石ノ坪遺跡

1990年3月

匹見町教育委員会

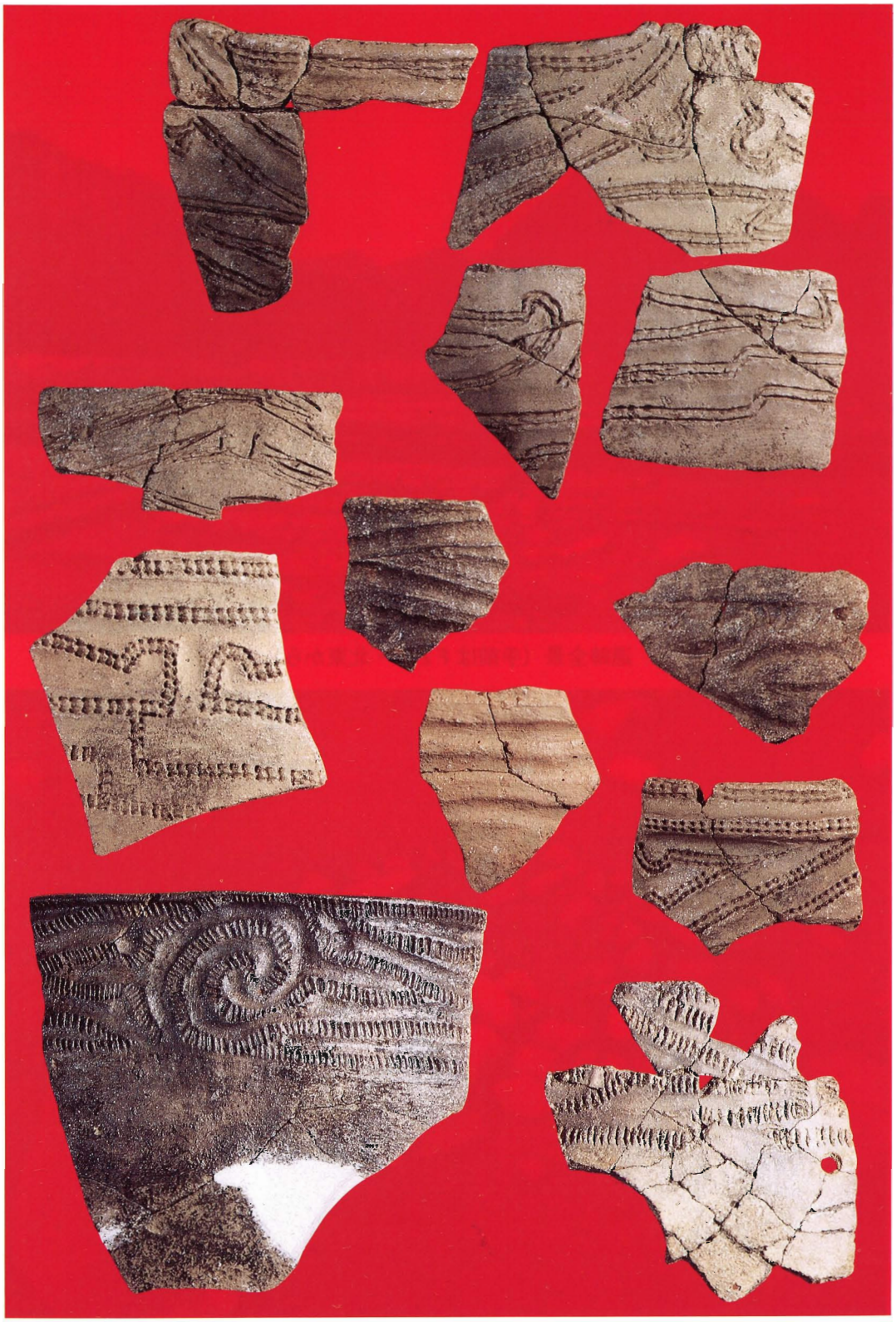
石ノ坪遺跡

1990年3月

匹見町教育委員会

遺跡全景（手前はＦ２区・北東から）

集石遺構検出（北東から）



滑石混入土器

例　　言

1．本書は島根県益田農林事務所の委託を受けて，匹見町教育委員会が平成元年に行った匹見地区県営圃場整備事業に伴う，石ヶ坪遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は島根大学歴史学教室及び島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根大学法文学部教授	田中　義昭
	山口大学人文学部助教授	中村　友博
	広島大学文学部講師	河瀬　正利
	島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第１係長	宮沢　明久
	島根県教育委員会文化課文化財保護主事	内田　律雄
	島根県教育委員会文化課文化財保護主事	鳥谷　芳雄
事務局	匹見町教育委員会教育長	平谷　　勉
	匹見町教育委員会教育次長	渡辺　　隆
	匹見町教育委員会派遣社会教育主事	田原　敏明
調査担当者	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺友千代
調査補助員	広川富和，渡辺登美子	
調査参加者	栗田　定，宮市民義，森　清，原田禎二，森脇雅夫，久保田博万，落田政人，栗田　修，渡辺　照，森　英雄，斉藤百合子，森脇一枝，山崎リマヨ，石原八重子，中村靖子，竹田早月，大谷清子	

3．発掘調査に際しては，益田農林事務所の石飛富夫，堀野 章氏をはじめ，土地所有者，地元の方々に終始多大な協力をいただいた。また，遺物整理にあたっては，島根県教育委員会文化課の松本岩雄・足立克己・柳浦俊一氏らの御指導を得た。ここに感謝の意を表したい。

4．今回の調査では，住居跡 － SI，土壙状遺構 － SK，溝状遺構 － SD，柱穴状遺構 － P，集石遺構 － SX と略号した。

5．本書掲載図は，渡辺友千代が石器，渡辺登美子が土器を実測し，藤井富子，西川和代がロットリングを担当した。執筆は，指導者・調査員・事務局が担当し，編集は渡辺友千代が行った。

目　　次

第１章　石ヶ坪遺跡の調査を終えて ……（渡辺　　隆）…… 1

第２章　石ヶ坪遺跡寸感 ……（中村　友博）…… 2

第３章　調査の概要 ……（渡辺友千代）…… 6

１．はじめに …… 6

２．調査のあらまし …… 9

第４章　遺　　構 ……（渡辺友千代）…… 18

１．はじめに …… 18

２．F2区の状況 …… 19

３．下層面の状況 …… 25

４．他調査区の状況 …… 29

第５章　出土遺物 ……（渡辺友千代）…… 39

１．はじめに …… 39

２．F2区の出土遺物 …… 39

３．他地区の出土遺物 …… 45

第６章　総　　括 ……（渡辺友千代）…… 63

石ヶ坪遺跡想像図

現地説明会風景

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図Ⅰ …… 1
第２図　遺跡位置図Ⅱ …… 3～4
第３図　遺跡位置図Ⅲ …… 7～8
第４図　遺跡配置図 …… 10
第５図　遺跡配置図と中央トレンチ図 …… 11～12
第６図　A1－A2トレンチ・C1－C2トレンチ・G1－G2トレンチ土層図 …… 14
第７図　各地区出土状況と遺跡層位柱状図 …… 15～16
第８図　F2区３層上面状況図 …… 21～22
第９図　F2区３層遺物出土状況図 …… 23～24
第10図　F2区基底面出土状況 …… 26
第11図　F2区遺構図 …… 27～28
第12図　Ａ地区ピット検出状況 …… 31～32
第13図　C1区遺構検出状況図 …… 33～34
第14図　C2区・D2区遺構検出状況図 …… 35～36
第15図　D1区・E1区遺構検出状況図 …… 37
第16図　F2区土器実測図（1） …… 40
第17図　F2区土器実測図（2） …… 41
第18図　F2区土器実測図（3） …… 42
第19図　F2区土器実測図（4） …… 43
第20図　F2区土器実測図（5） …… 44
第21図　F2区石器実測図（1） …… 46
第22図　F2区石器実測図（2） …… 47
第23図　他地区土器実測図（1） …… 48
第24図　他地区土器実測図（2） …… 50
第25図　他地区土器実測図（3） …… 51
第26図　他地区土器実測図（4） …… 52
第27図　他地区土器実測図（5） …… 53
第28図　他地区石器実測図（1） …… 55

第29図　他地区石器実測図（2）…… 56
第30図　他地区石器実測図（3）…… 57
第31図　他地区石器実測図（4）…… 58
第32図　凹石実測図（5）…… 59
第33図　他地区石器実測図（6）…… 60
第34図　竪穴住居の想像図
第35図　石ヶ坪遺跡縄文想像図

図　版　目　次

図版１　１．石ヶ坪遺跡と周辺地形の鳥瞰
図版２　１．遺跡遠景（手前は紙祖川・北から）
　　２．発掘調査前の全景（南から）
図版３　１．調査開始時のＡ地区（南から）
　　２．Ａ地区のピット群
図版４　１．東北東に流走する旧河道とＢ地区以下の調査区
　　２．C1区の河床礫の露頭
図版５　１．石囲炉検出状況（C1区）
　　２．土壙検出状況（C2区）
図版６　１．乳白色黒曜石出土状況（D2区）
　　２．滑石混入土器出土状況（E2区）
図版７　１．F2区の３層上面状況（北東から）
　　２．土器出土状況（F2－b）
図版８　３．集石遺構検出状況（北東から）
　　４．集石遺構検出状況（北西から）
図版９　５．F2－cの出土状況（焼石も散見される）
　　６．トレンチを挟む石囲炉（F2－a）

図版10　7．F2－dの土壙検出状況（SK07）
8．立石と周堤（？）を周行する溝状土壙
図版11　9．トレンチに投影された“陥ち込み”（左P29・右SK05）
10．土壙内のピット（SK06・P28）
図版12　11．F2区の３層下位の状況（北東から）
12．F2区の遺構検出状況（北東から）
図版13　13．F2－c・F2－bの遺構状況（北東から）
1．縄文土器
図版14　2．縄文土器
3．縄文土器
図版15　4．縄文土器
5．縄文土器
図版16　6．縄文土器と陶磁器
7．縄文土器
図版17　8．縄文土器
9．縄文土器
図版18　10．縄文土器
11．縄文土器
図版19　1．石　　器
2．石　　器
図版20　3．石　　器
4．石　　器
図版21　5．石　　器

第１章　石ヶ坪遺跡の調査を終えて

昭和62年度より匹見町大字紙祖地区から県営圃場整備事業が始まり，それに伴って昭和63年度にに遺跡の分布調査を行った結果，紙祖地区の石ヶ坪遺跡を本格調査することになった。

石ヶ坪遺跡は昭和58年土地改良事業で農道工事中に縄文時代の遺物を発見した周知の遺跡である。

本格調査の進行中に縄文中期の並木式土器（鹿児島県）や阿高式土器（佐賀県）が多数出土したことから，当時匹見町は九州や山陽との交流があり，物質的にも住みやすい地域であったようです。

今回の発掘の終盤に現地説明会を開催したところ，多数の町内外からの視察者が訪れ，説明を受けたり，遺物に触れることにより縄文時代の原始ロマンに浸りました。

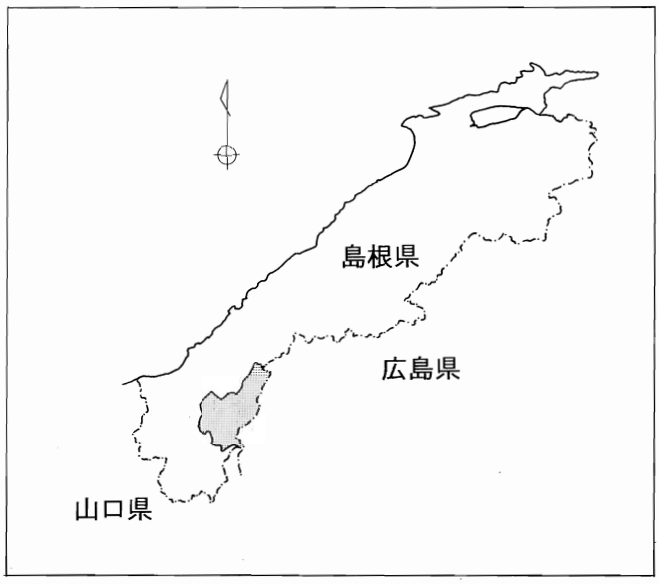
また，匹見町の原始古代と題して，島根大学教授田中義昭先生の講演会や，文化財を活かした地域づくり，シンポジウムを開催し，4,000年前から匹見に人が住んでいたという誇りと，縄文銀座と呼ばれどこを発掘しても縄文・弥生の遺跡に出会うといったこの恵まれた原始遺跡を町づくりにどう活かすかを討議しました。

今後の文化財保護はただ保存するだけでなく，いかにこの文化財を活かした町づくりに結びつけるかが，カギになると思われます。

遺跡発掘が契機となって住民の文化財保護に対する認識が高まったことをとても喜んでおり，このような住民の盛り上がりにより石ヶ坪遺跡を縄文村として整備する為に，町は50ａを買いあげ，保存することに至りました。

指導の先生及び土地所有者の斉藤正人さん，坂原金子さん，事業主体である益田農林事務所，作業員さん他，関係者の深いご理解により石ヶ坪遺跡調査が早急に終了したことを感謝しております。

（渡辺　隆）



第１図　遺跡位置図Ⅰ

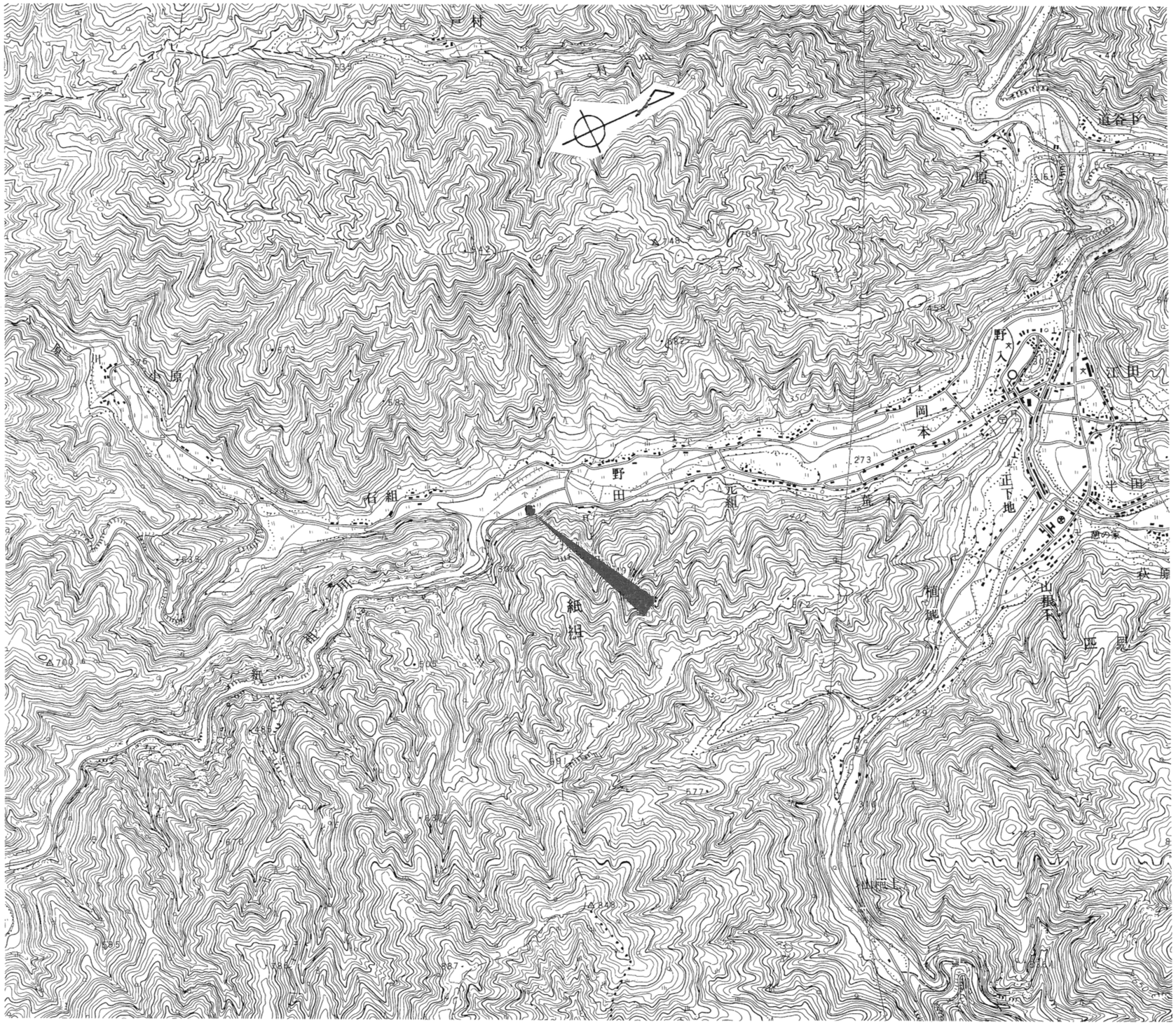
第2章　石ヶ坪遺跡寸感

1989年12月18・19日の両日，匹見町埋蔵文化財調査室を訪問し，今夏発掘した石ヶ坪遺跡について説明を承ると同時に意見を求められた。以下，乞われるままに印象を添えたい。

遺跡は，縄文時代の中期と後期の時期の違う２つの遺構が重複していると想像される。発掘に立会っていないので，遺構検出面が２面あったかどうか自分にはわからないが，この遺跡の顕著な存在である集石遺構は後期の造営と判断する。後期の土器は前葉の中津式を主体とするもので，中頃まで下るものは瞥見したかぎりではなかった。中期の土器は並木式と阿高式で，ほとんどの胎土に滑石の混入がある。たぶんＦ区で検出した竪穴住居は，これらの中期の土器に伴うものであって，平面円形，建替えでなければ主柱を二重廻りさせる構造である。屋内炉については不明で，竪穴の埋土には部分的に後期の土坑が掘られたと判断する。中期の土器には船元式，里木２式，波子式が混っていないようであり，滑石混入のある九州系土器を九州から渡海しての持ち込み品と仮定すると，あまりにも量がおお過ぎ思案している。

後期前葉には手前を流れる紙祖川の河床礫を利用して集石遺構が造営されている。集石遺構には祭場説と墓地説が提起されているので，石組の下を精査しなければならない。祭場説には山嶽信仰と結びつける説もあるので，付近の山に関する伝承の類にも気をくばる必要がある。東日本の内陸といってよい立地の後期の遺跡には集石遺構を残すものがあるが，西日本ではきわめて例が少ない。管見では，愛媛県北宇和郡広見町にある岩谷遺跡が，この石ヶ坪と比較できる唯一の遺跡である。備讃瀬戸には後期の遺跡が密集しているけれども，このような集石遺構は発掘されておらず，おそらく今後の周到な調査でも出土の可能性は少ないだろう。

石ヶ坪遺跡の集石遺構の発掘調査は，経験豊かな担当者でも技術的にむつかしく，やっかいなものである。東日本の集石遺構はおおむね黒色有機土に配石されたもので，自然の堆積とは容易に区別できるけれども，石ヶ坪では遺構検出面にまで川床礫が露出しているから，自然堆積と配石，さらに配石の崩壊とを識別して調査を進めねばならない。この件について発掘法が開発される見込みはなく，ひとたび掘り出せば，調査の失敗が失敗であったとする再検討の手立てすら失ってしまう。しかも研究の段取りからいって，集石遺構の発達する中枢地帯での詳細な研究の完成をまたなくしては，比較研究もなしえないし，今のところ西日本で手つかずに残っている遺跡がこの石ヶ坪１箇所しか知られていない現状を鑑みれば，発掘調査は避けるという結論がおのずと導かれるのである。関係各位のご尽力で，土地が公有の運びとなったのは，次代の研究者に稀有な遺跡の慎重な取扱いを託せるわけであるから，それまで我々のできることはせいぜい教育的な効果をこの遺跡から引き



第2図　遺跡位置図Ⅱ

出すことでしかありえない。

私案だけれども，土盛りした上に縄文人の主食である木の実のなる樹木を植えてみてはどうか。木の実を食品に加工する風習は，急速にすたれているけれども，まだ町内には学者や図書よりも貴重な人材がご健在とおみうけする。町当局が遺跡の活用ではなく，開発に対処する発掘で忙殺されるなら，苗木であってもよい。木の実の加工法は，つぎの世代に伝承しておく必要があると思う。クリ・オニグルミ・トチ・ドングリなどが樹種となるが，匹見町には石ヶ坪以外にも縄文遺跡があるので，石ヶ坪に植えるのは１種に限定し，ほかの遺跡に別種を植えつけて，木の実の森を巡回し，縄文人が結実時期の微妙な違いを資源戦略として配分していたことを体感できるようにしていただきたいのである。しかもこの分野の実験的，定量的研究は立ち遅れているから，その記録は将来かならず学問にも役立つはずである。よく芝生で公園化した遺跡をみかけるけれども，芝生は縄文時代の植生と違う。水田の雑草が侵蝕して繁茂するもの困るが，地下の集石遺構の埋没を表示するため河原から礫を持ち込んで，石組を再現しておくだけでもよいと思う。まず，そのための参考写真として，集石遺構の管理団体に焼付依頼や図書からの複写を町教育委員会は用意しておかねばならない。そして成木になれば，かならずカリキュラムが必要となるだろうから，社会教育の分野で長期計画を立てていただきたいのである。

希望も記すこととなってしまったが，なつかしい遠祖たちがこんなに立派な遺跡を残し，それを後代に伝えるのも我々の生活の誇りと思う。

（中村　友博）

第3章　調　査　の　概　要

1．はじめに

遺跡の立地　本遺跡は，標高約291m測る匹見町大字紙祖字元組に所在する。そこは断層谷の断点にあたり，紙祖川に小原川が相会する河岸段丘の右岸に立地している。地点の南東面は急峻な童仙山（848m）がせまり，対向の北西面は水田地が緩傾斜を成し，その端面を比高差約4mを測って紙祖川が北東流していて（第2図・第3図），断層谷に沿って谷平地が延びている。該地はその南西端にあたり，三方を比高300m前後の山々がとり囲んでいる。

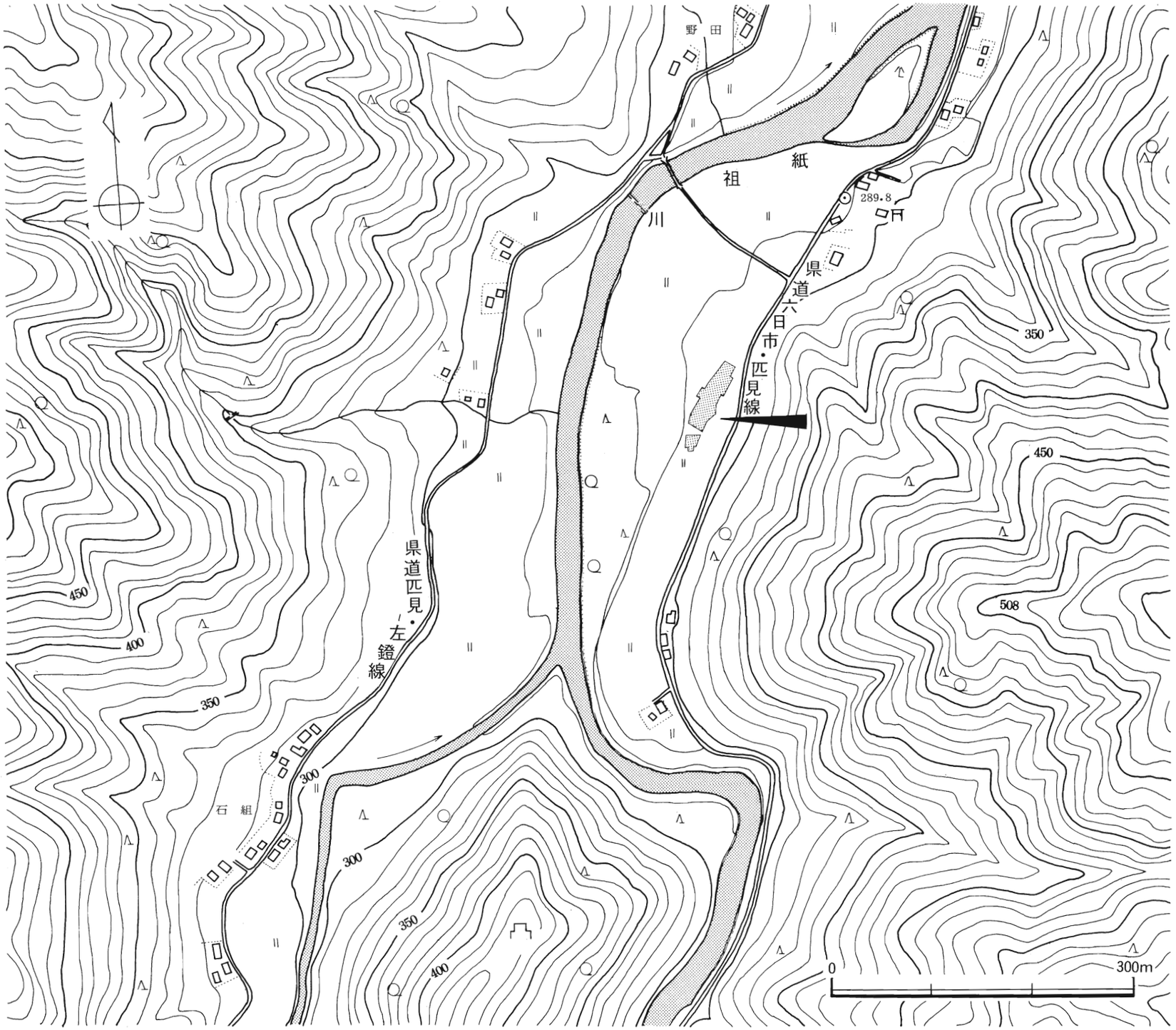
このような立地から，戦国期には匹見一円を支配した益田氏の庶家が至近の要害山に居住していた。また南西は通路の役目を果した2支川が延び，古くから交易路であって，1つの“文化の拠点地”を想像させる地形に立地している（第3図）。

調査に至る経過　農道施行時に発見された本遺跡は，1983年（昭和59年）4月の発見届の提出によって，周知の包蔵地として認定されていたものである。したがって，1987年（昭和62年）から始まった本地域の県営圃場整備事業に伴い，1987年と1988年との2回にわたって確認調査が行われた。1987年8月の1回目の調査は島根大学の田中義昭教授らによって，本地点の西面（舌状に突出した紙祖川沿い）約50m地点の約1,200m²を対象調査区域として，2mの方形8坑，32m²が調査された。

その調査では，条痕文を基調とした縄文後，晩期のもの数片のほか，安山岩製の打製石斧5点・鉄鏃・陶器などが出土しており，本遺跡の性格を考察する上での材料を資している。また，その後の調査は，1988年11月に本地区域を中心として，2mの方形区4箇所を試掘し，今回の調査範囲をほぼ限定することができたのである。その調査では，太描きの沈線や細い沈線で曲線を描いた磨消縄文土器や滑石混入土器が出土し，本遺跡が縄文後期初頭から縄文晩期に至る遺跡であることを把握することができたのである。

調査の経過　今回の調査は，1989年（平成元年）4月10日から同年7月31日までの間，823人役を要し，約1,236m²を対象に行ったものである。

しかし調査の中盤になって，事業者である益田農林事務所から「盛土工法によって保存」との旨があったので，急拠，調査工程の再検討を行うことになった。したがって，保存となれば実質的には破壊に繋がる調査は極力やめた方がよいので，一応調査を中断した上で，調査指導者である島根大学の田中義昭教授・広島大学の河瀬正利講師・島根県教育委員会文化課の内田律雄主事らの意見を求めた。その結果，多量の縄文後期の遺物をはじめとして，縄文中期の阿高式系土器，また一部



第3図　遺跡位置図Ⅲ

には遺構面も検出されているものの，本遺跡の性格が今一つ把握しきれていない現状では，いずれかの地点を限定し精査しておく必要があろう，という指導を受けた。そこで，その対象地点を紙祖川の溢流によって河道が遺跡を北東に還流した端部に当たるF2区を選定した（第５図）。

当地点は，河礫と想定される自然堆積も確認されたが，主観的判断があってはと思い，できるだけ識別を避け，忠実に実測することに努めた。したがって，地点の南東面には遺構とは結び付け難い，つまり河礫群が確認され，遺構面にも若干露頭しているようであった。その後調査が進むにつれ，本地点からは多量の縄文中期から縄文後期中葉に至る遺物が出土するとともに，集石遺構・住居遺構等が検出されたのである。こうした貴重な資料の検出は町民を刺激させ，未調査域はそのまま保存とし，同年９月には町議会で本遺跡の買収が決議されるに至ったのである。

上述したように，今回の調査は中途での盛土工法による保存，あるいは終盤における買収による保存等の紆余曲折によって，作業進行に一貫性を欠いた面があった。また一方，1,300㎡に及ぶ広範囲の調査であったため，掘削作業を２班に分け進めたことによって，各地区の作業の終着に差異が生じるなど，全体的に整合性を欠いた調査になったことは否めない。

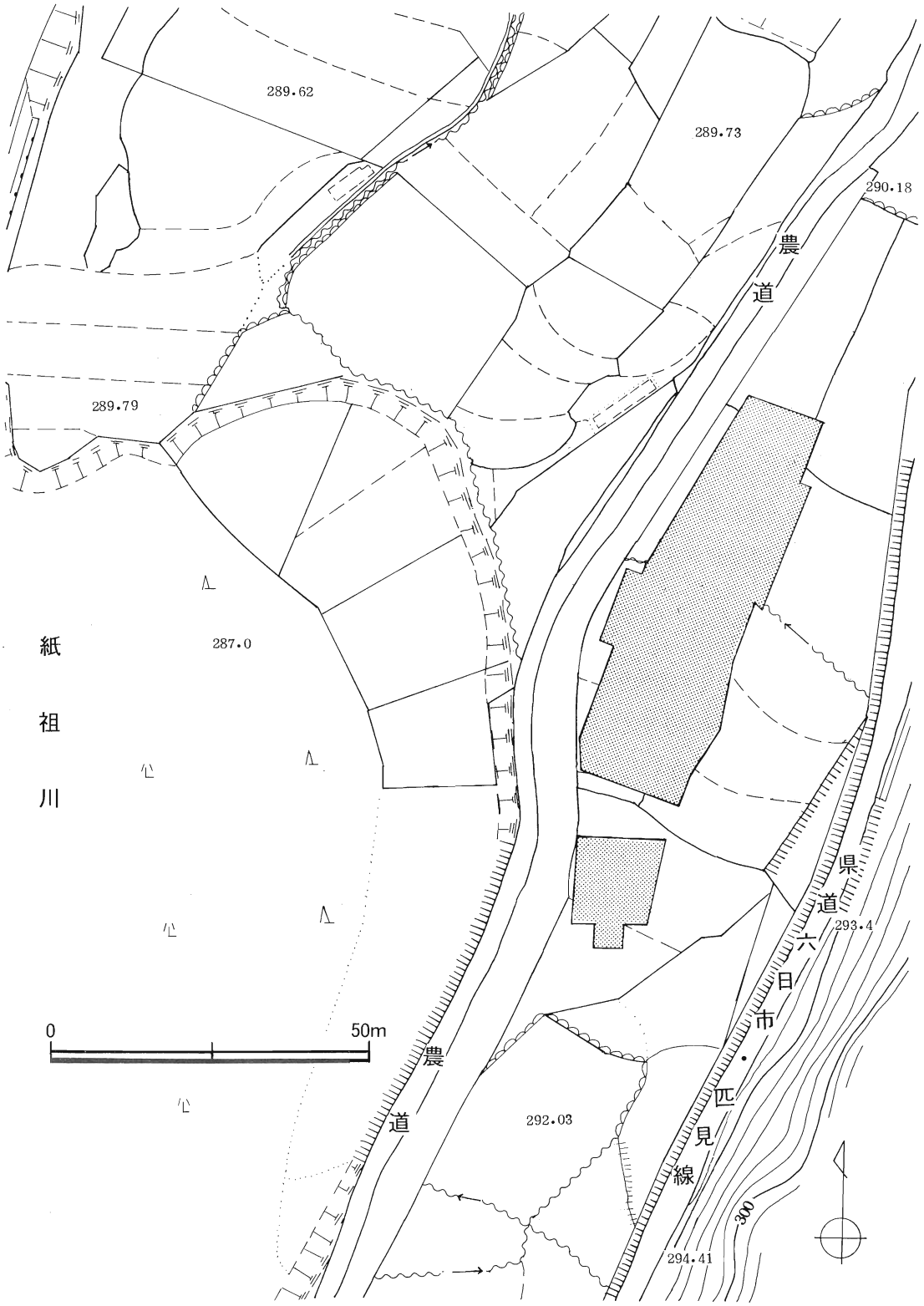
２．調査のあらまし

調査区設定　調査は，まず実測基点となる地点を設定することから始めた。その地点は，前回（1988年）確認調査した地区域の南西面に当たる約0.6～0.8m高い水田地のほぼ中心に任意に設定（標高約291.43m）。その基点を起点として，磁北を基準線に，それに対行する東西線を両延し，磁北側に向って西面をA1区と称し，東面をA2区と称する地区設定をした。さらにA3区と称する小地区は，A1区・A2区の調査で，南面に遺跡の包含が予測されたため，後に拡張したもので，Ａ区域の調査面積は約167.5㎡となった。

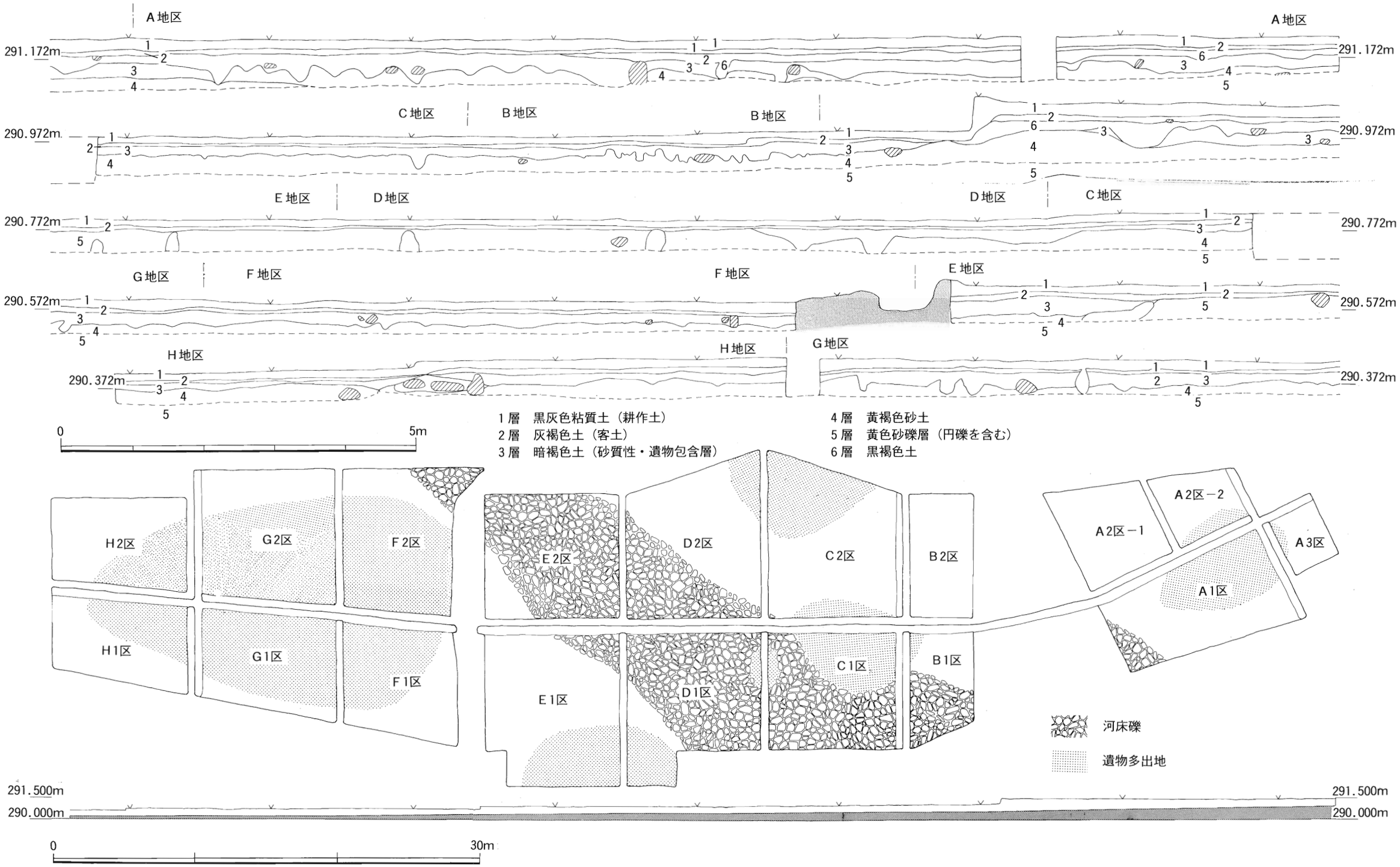
Ｂ区域はＡ区域との間に石垣を設け，やや傾斜する一段低い現地標高291.4mを測る地点で，中央トレンチ（基準線に沿ったもの）を挟んで西面をB1，東面をB2と区分し，合せて74.3㎡を設定した。しかし調査域の南東面は山裾がせまり，緩和曲状を成していたため，周辺するように基準線も東に13度振らずをえなかった。さらにＣ区域からは12度振った角度をもって延長し各地区を設定した。

以下は同様に中央トレンチを挟んで１，２を連称し，アルファベット順にＤ・Ｅ・Ｆ……というように冠して区名とした（第５図）。したがってD1区，E2区というように呼称し，以下１区ごと約80㎡に区分し，Ｈまでとし，その各区の四周に50㎝のセクションベルトを設けた。しかし地区によっては地形的立地，あるいは包含層の平面的拡がりによって変則的に区分したものもある。

各地区の概要　掘削作業は測量による地区設定と併行して，４月11日よりＡ区域から開始した。


289.62
289.73
290.18
農
道
289.79
紙
祖
川
287.0
県
道
293.4
六
日
市
・
匹
見
線
0
50m
農
道
292.03
300
294.41

第4図　遺跡配置図



第５図　遺跡配置図と中央トレンチ図

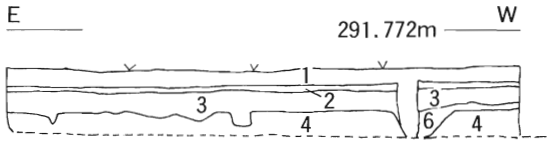
A区は調査域の南西面に当たり，一段高いためか，既設した中央トレンチの序層からみて，他地区とは成因に差異がみられる。つまり耕作土は平均約16cmと層厚で，黒褐色土の3層が加層する。これは北流する紙祖川と，北東流した小原川との会流が数次に溢流して貫流した結果と想定できる。つまり，一段高位にあるA区域ではその影響が僅少で，B区以下は頻繁であったことを示す。それは遺物・遺構包含層などの上位層が乱曲して薄く，しかも河礫の嵌入を多とするE・D区などに顕著であることから察しられるのである（第5図)。

A区は1層耕作土（黒灰色土)，2層客土（石粒を含んだ灰褐色土)，3層黒褐色土，4層暗褐色砂質土，5層は黄褐色砂質土と砂礫層とに分層できるが，3層下位に柱穴と思われる遺構が検出された。これらのピットは，A1区14穴・A2区13穴・A3区2穴の合計29穴みつかっている。また遺物は縄文土器・打製石斧・磨石・石錘・石鏃などで，81.3m²を調査したA1区に多出する。時期的には第23図64～67，図版16に示したように，狭幅の三本沈線あるいは巻貝施文による縁帯文など，他のものを含め相対的に判断するならば，縄文後期中葉から縄文後期終末のものと想定され，他地区の出土遺物とは時間的間隙が指摘できる。しかし，これらの遺物が検出された遺構に供給しうるものかは，基底面まで調査している現状では結論付けることはできない。

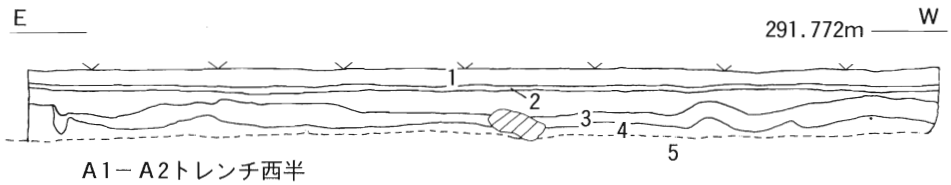
A地区域から僅かに下がったB地区は，石垣をもって段をなす（第5図)。そのためB1区35.1m²，B2区39.15m²とに，他地区に比べ小区分に設定した。層序は，1層耕作土（黒灰色土)，2層客土（石粒を含んだ灰褐色土)，3層暗褐色土，4層黄灰色砂土で，A地区でみられた有機土である黒色土は欠落する。また3層と4層の層界は小刻みに乱調し，4層には人頭大の円礫が部分的に露頭し，実質的には河床礫である。3層は遺物包含層で，下位面を中心に出土し小片であった。土器は条痕文を中心として，10数片のうちには津雲A式の特徴をもつもの，丁寧に研磨した研磨土器などが出土しており，これらの構成からA地区に包括できるものとして捉えられることができる。なお，遺構らしきものは検出されなかった。

C地区は現地標高約291m測る地点で，1988年の確認調査の折，南西端の調査区として2m方形区を設定した場所である。したがって第5図にあるセクションの間欠部分は，その調査時のものである。C地区の調査面積はC1区83.6m²，C2区98m²で両区とも遺物・遺構が検出している。特にC2区の北東面に検出した土壙，柱穴等（第14図）は注意されるもので，3層上面から検出され，遺物も同範囲に多出している。同じくC1区にも南東面に遺構が確認されている（第13図）が，紙祖川の溢流による北東流の貫入で資料を乏しくしている（図版4－2)。また土器には滑石混入土器が出土しており，時期的にA・B以下地区とは明確に間断できるものといえる。

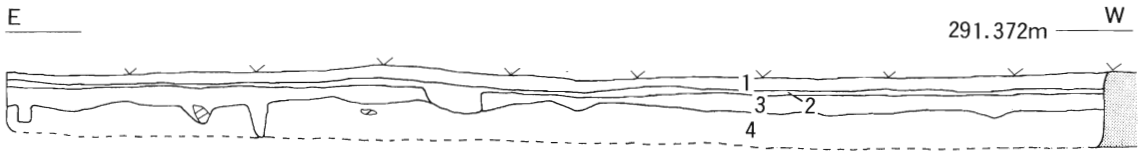
D地区はD1区92.35m²，D2区98.08m²の合せて190.43m²を調査区としたが，掘削は前述したように，事業者から盛土によって保存したとのことであったので，3層直下で終えている。特にD地区



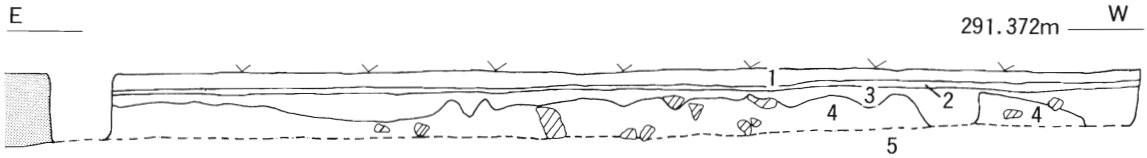
A1－A2トレンチ東半



A1－A2トレンチ西半

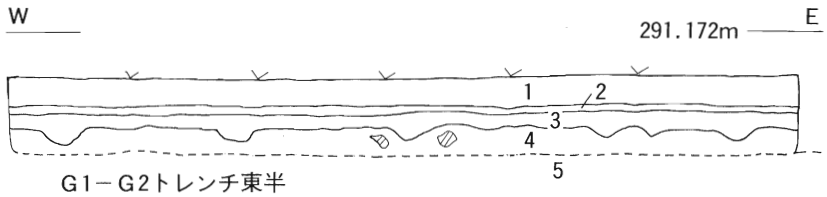


C1－C2トレンチ東半

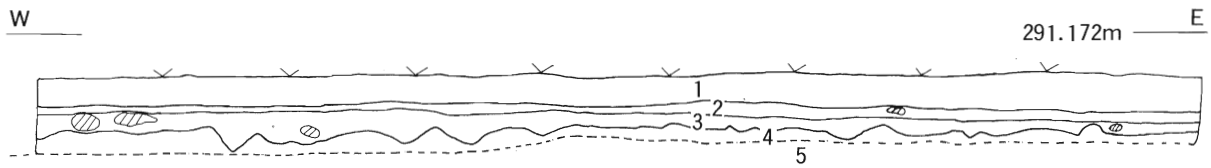


C1－C2トレンチ西半

1層　黒灰色粘質土（耕作土）
2層　灰褐色土（客土）
3層　暗褐色土（砂質性・遺物包含層）
4層　黄褐色砂土（下位は明黄色砂土）
5層　黄色砂礫層（円礫を含む）
6層　黒褐色土

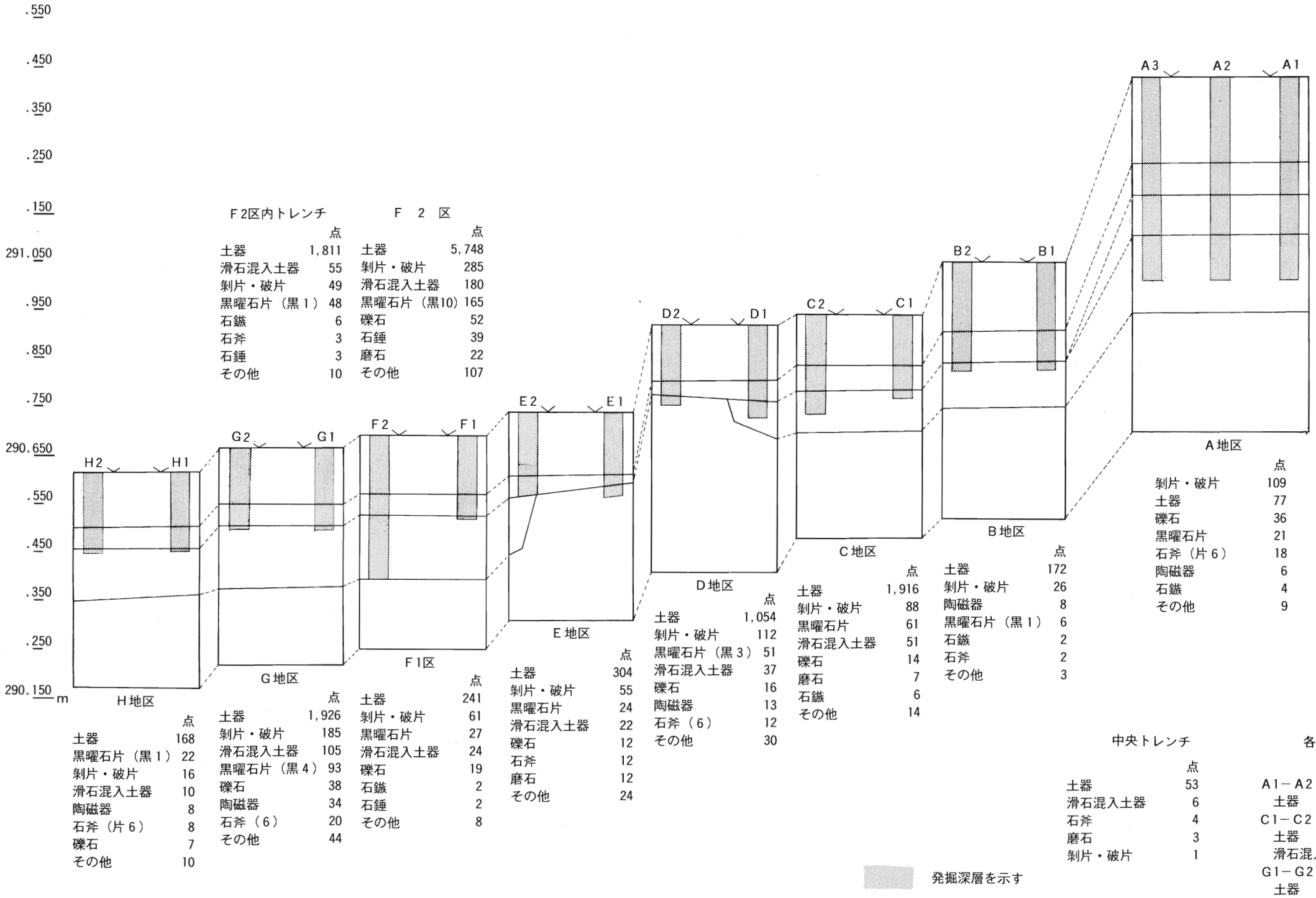


G1－G2トレンチ東半



G1－G2トレンチ西半

第6図　A1－A2トレンチ・C1－C2トレンチ・G1－G2トレンチ土層図



第７図　各地区出土状況と遺跡層位柱状図

は，接するＣ地区，Ｅ地区についてもいえることであるが，紙祖川の溢流による貫流域であるため，２層直下に河礫群の露頭（第５図，図版４－１）がみられ，遺構あるいは遺物を荒壊していることが窺える。したがってD1区の北西面，D2区の南東面に僅かなまとまとった遺物が認められるものの，全面に摩耗した遺物が散在する。本地区を斜行するこの河道は，トレンチの序層をみる限り，３層の生活面が消滅していることから，嵌入したものと捉えることができる。また遺物・遺構については後章で述べることにするが，変則的に拡張したD1区南東面にはC1区に関連する径３ｍ×５ｍの土壙，D2区南東面にはC2区にかけてP01，P02，P03の柱穴と想定されるピットなどが検出している（第14図）。土器は中津式や津雲Ａ式に並行するもの，また縄文中期に比定される並木式あるいは阿高式は，Ｃ地区からＨ地区に至る全面に出土している。

Ｅ地区はE1区の103.6㎡とE2区の82.65㎡に設定し，現地標高は約290.8ｍ測る。掘削は河礫が露頭する２層直下までとしたが，礫が僅少で暗褐色の兆候がみられるE1区南西面では，遺物と相俟って，D1区に連関する径７ｍの住居プランらしきものが検出された（第15図）。また遺物が特にE2区で少なかったのは，浅い掘削であったことによるものではなく，その主因はE1区でも確認されたように，斜行した溢流の貫入によるものであろうと考えられる。

Ｆ地区は，Ｅ地区と畦畔，溝によって区画した一段低い現地標高約290.65ｍの地点である。Ｆ地区からは，さらに中央トレンチに沿う基準線を地形的理由から５度東（山側）に振ってＧ地区，Ｈ地区へ延長した。したがって基準線は概ね北東方向になる。そのF2地区の設定面積はF1区64.54㎡，F2区87.32㎡で，完掘したF2区は別として，掘削は撹乱されているとみられる２層直下までとした。層序は１層耕作土，２層客土，３層暗褐色土，４層黄褐色砂土とに分層でき，文化層として捉えることができる３層は，概ね15㎝の平均層厚で良好であった。

Ｇ地区は現地標高約290.6ｍで，G1区72.5㎡，G2区92.5㎡とに設定した。１層黒灰色土，２層灰褐色土（砂粒を含む），３層暗褐色土，４層黄褐色土となり，その下以は砂礫層であるが，全体的に砂質性である。掘削は２層までとしたが，中央トレンチのセクションをみる限り，層界はほぼ水平であり，また客土の２層以外は他地区に比べて層厚である。遺物は，縄文土器1,700点（うち滑石混入土器90点），石斧10点，磨石10点，石鏃15点，黒曜石60点などが集中的まとまって出土していることから，下位層に住居跡等の遺構が検出される可能性がある。それを裏付けるように，中央トレンチ北東面（下側）のセクションにはピットあるいは住居基底面と想定される“陥ち込み”がみられ（第５図），また滑石混入土器の出土比率も高い。

Ｈ地区は本遺跡で最も低く，現地標高約290.5ｍ測り，H1区の設定面積は59.37㎡，H2区は59.85㎡の合計119.225㎡とした。層序はＦ地区，Ｇ地区などと比べて変化はないが，遺物包含層とみられる３層が北東面を中心にやや薄くなる。土質は砂質であるが，やや粘性を帯び，４層の下位は円

礫が露頭する。掘削は２層までとしたため下層状況は把めないが，２層までの遺物出土が南西面に集中し，北東面は希薄という結果は遺物包含層である３層と比例している。

（渡辺友千代）

第４章　遺　　構

１．はじめに

層位　調査の中盤における「盛土工法による保存」という今回の経緯から，完掘したF2区以外ほとんど未調査のままである。したがって層序については既掘した中央トレンチを中心に概説する。

掘削は地区設定した後，一段高い南東面のＡ地区から始めた。その後，調査域の層序を把握しておく必要があるため，北東に細長い調査域にまず磁北方向に中央トレンチと呼称する幅50㎝のものを貫通させることにした。Ｂ,Ｃの両地区からは調査区域が北東に緩曲線を成しているため，その曲線に従ってほぼ中央を貫走するように設定した。さらにその中央トレンチに対行するように，Ａ地区の南壁に沿うA1－A2トレンチと称するもの，Ｃ地区では南西壁に沿うC1－C2トレンチ，Ｇ地区の北東壁に沿うG1－G2トレンチと称する各トレンチを設けた（第５図)。精査したF2区でのトレンチについては後述するが，ここではトレンチから全体の基本的層序を述べることにする。

本遺跡の基本的層序は，

１層　　黒灰色粘質土の水田耕作土

２層　　３～５㎜大の砂粒を含んだ灰褐色土の客土

３層　　遺物包含層である砂質性の暗褐色土

（上位面は黒褐色を呈すが，下位面は漸移に黄褐色に変化する）

４層　　黄褐色砂土（下位は明黄色砂土）

５層　　黄色砂礫層・円礫層・角礫層

しかし，一段高いＡ地区では２層と３層の間に有機土である黒色土が明確に加層している。これが本来の層序であったことが，底位の調査区（Ｂ地区以下）を貫流したと想定される河道状況から把握することができる。つまり本来の黒色土はＢ地区以下の調査区では，東流した河道によって洗流されたものであり，特にＤ地区，Ｅ地区では暗褐色土の３層，黄褐色砂土の４層までをも滅失させている（第５図)。また中央トレンチを対向するA1－A2トレンチ，C1－C2トレンチ，G1－G2ト

レンチをみる限り，東面（山沿い）は営田による人為が加わった１，２層は別として，３，４層が比較的層厚で，河沿いの西面に比べて低い（第６図)。それは底位面である北東面のＥ地区以下の地区域が顕著で，５～６cmの差があることから，旧くは河道が貫流の後，遺物の僅少である東面（山沿い）を周流していたと想定されそうである。遺物の包含層はＡ地区では３層の黒色土，４層の暗褐色砂質土であり，それ以下の地区では３層の暗褐色土であって，また遺物が比較的上位層（１，２層）に出土がみられるのは，それらの洗流による流入・転移によって包含されたものとして捉えることが可能である。

以上のことから良好な遺物包含層を保存しているのは，トレンチあるいは出土状況から，Ａ地区・C2区・Ｆ地区・Ｇ地区（Ｈ地区は周流の端部にあたる）である。特にＦ地区，Ｇ地区では１層10～17cm，遺物包含層の３層は12～30cmと層厚で“遺構的陥ち込み”以外は比較的水平に堆積している。

２．Ｆ区の状況

上層面の状況　F2区はF1区に併設する調査区で，現地標高約290.680ｍを測る。なお堆積状況を把握するためのトレンチはF2－aトレンチ，F2－cトレンチ，F2－dトレンチと称するものを十文字にとり，さらにサブトレンチと称するものを補助的に設けた（第８図)。その結果，調査区内の層序は１層黒灰色土の耕作土，２層灰褐色土の客土，３層暗褐色砂質土，４層黄褐色砂質土とに分層でき（第８図)，やや北東面に斜底しており，南東面には周流した旧河道の河礫が嵌入している。そのため南東面の１層（耕作土）は薄く，３層直下から河礫が露頭した。したがって３層上面に露頭する円礫群（第８図）が，当初その影響によるものであると判断されたが，後に基底部の住居プランに照合した結果，住居プランの周囲には比較的少なく，その範囲に，ある一定性をもって集約していることから，これらの石群のある程度は“生かされている”とみなした方が良いように判断された。これらの石群は，全体的には南西面（F2－a・F2－d）が疎間で，北東面（F2－b・F2－c）に集密するという差がみられる。これは標高差からくるもので，造田時に高い南西面が平削されたことに生じたものと解される。また住居遺構内にみられる石群の中には，長径40～50cm測る石体が点在しており，中には平坦な形状のものがあって注意を引く。それらは台石であり，中には使用痕も認められ，炭化物・骨片・石器剝片が検出された地点に近接する（第８図・第９図，図版７－１)。またF2－cグリットのトレンチ寄り（Ｃ地点）には，多くの熱焼による拳大の茶褐色した角礫が散在する（図版９－５)。

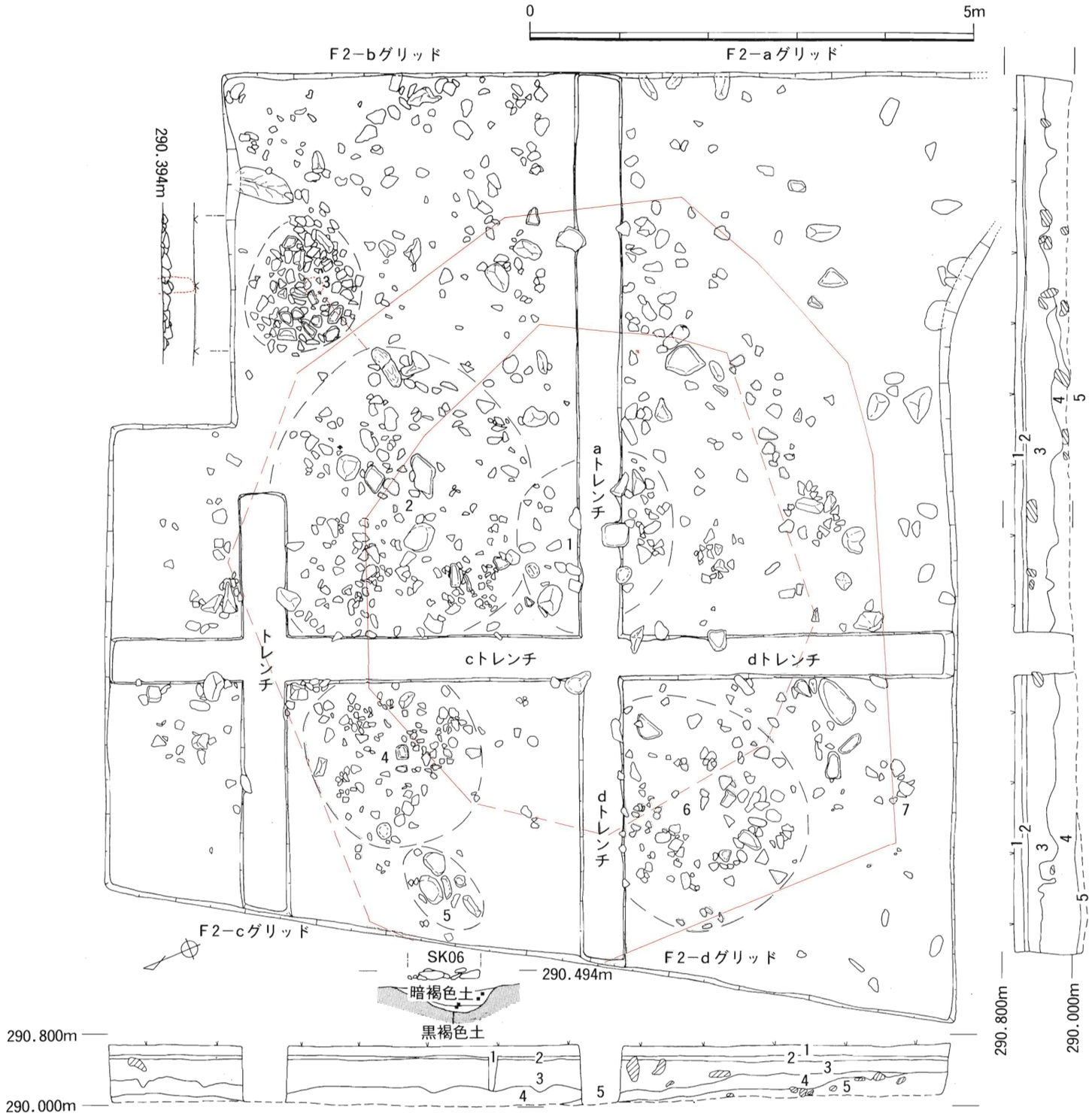
SX（特殊遺構）　F2－bグリットの東北東面には集石遺構（SX）が，３層上面の暗褐色土層に検出された（第８図，図版８)。配石の長径1.52ｍ，短径1.25ｍで，長さ７～28cmの円礫を主に並石する。一部に積石がみられるものの，レベル的には８～14cmを測り，ほぼ水平に配並されており，

その西面は整列する。立石は確認されていないものの，中心に間隙がみられるため存在したと思われる。仮定であるが，配石遺構の50cm南面にはその形状から立石と想定できるものが確認される（第８図，図版10－８）。それは砂岩系のもので，長さ54cm，径23cmの円筒形を成したもので，移動したものと考えられる一方，あるいは出入口と想定される箇所の３層下位に検出された状況から，人為による意志によって埋められたものかも知れない。

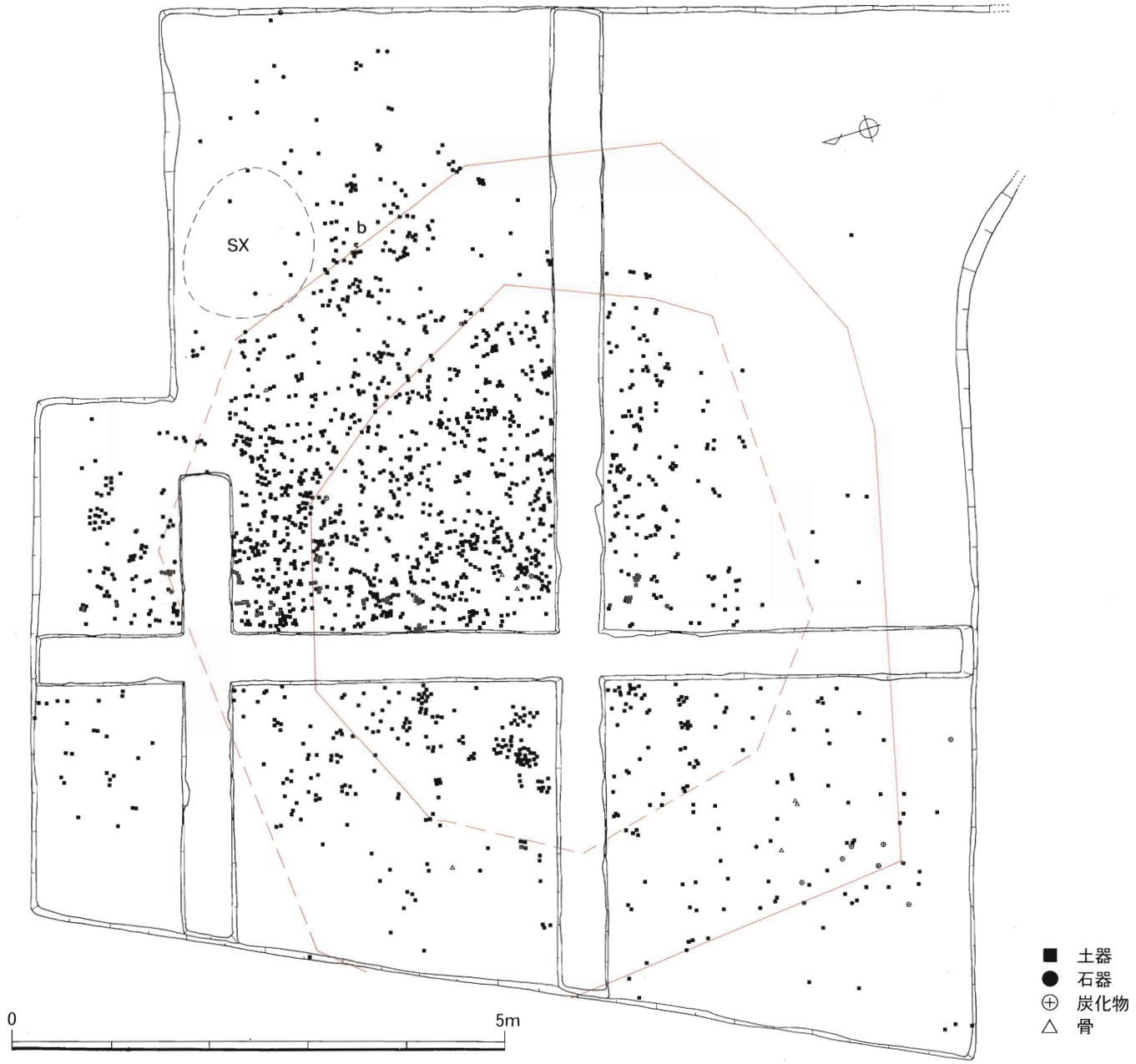
また遺物は，１，２層を除く３層中以上表示した第９図をみても判るように，配石遺構内に６点のみで，南面にあるまとまりがみられる以外は閑散である。なお，配石の下以について保存のため掘削していない。

Ｆ２　区　遺　構　計　測　表

遺構	長径	短径	深さ	上面標高	遺構	長径	短径	深さ	上面標高
P01	22cm	20.5cm	10cm	290.444m	P25	17cm	15.5cm	5cm	290.324m
P02	22	21	11	290.414	P26	22.5	20	10	290.274
P03	20.5	20	12	290.404	P27	23	22	4	290.324
P04	24.4	22.5	13	290.294	P28	22	14.5	28	290.314
P05	23.5	20	20	290.404	P29	28.5	－	17	290.244
P06	22	21	10	290.294	P30	11	10	4	290.284
P07	30	24	17	290.394	P31	29	22	16	290.324
P08	31.5	30.5	22	290.364	P32	24.5	20.5	6	290.324
P09	20 23.5	18 20	12 12	290.334 290.334	P33	20.5	18	11	290.404
P10	19	15	4	290.214	P34	20.5	19	9	290.404
P11	23.5	22	10	290.334	P35	29	24.5	11	290.404
P12	28	24	12	290.354	P36	16	15.5	8	290.344
P13	25.5	22	11	290.164	P37	26.5	22.5	7	290.364
P14	18	10	7	290.224	P38	22.5	22	9	290.284
P15	21	20	11	290.274	遺構	長さ	幅	深さ	摘要
P16	27	26	12	290.274	SK01	350cm	340cm	10cm	不整形
P17	20	20	8	290.214	SK02	約 420	約 116	17	溝状
P18	24	22	7	290.304	SK03	104	40	7	Ｌ状土壙
P19	48	24	15	290.324	SK04	48	38	15	円形状
P20	16.5	15	5	290.144	SK05	147	100	20	円形状
P21	23	20	5	290.324	SK06	124	56	27	涙滴状
P22	23	19	12	290.264	SK07	185	83	15	涙滴状
P23	24	23	26	290.324	SK08	83	72.5	16	円形状
P24	17	16	6	290.224	SD01	－	約 80	27	溝



第8図　F2区3層上面状況図



第９図　Ｆ２区３層遺物出土状況図

3．下層面の状況

SI（住居跡）　ここでは住居プランが検出された基底面を中心に，３層中位までの状況をも踏まえて述べておく。

SIは暗褐色土（３層）から黄褐色土（４層）に変異する層界に検出されたものである（第11図，図版12)。全体的（図示範囲）には，２層は４～６㎝，３層下面は10～20㎝北東面に傾斜する。したがって，南西面は造田時に削平されたらしく壁体などの遺構が消去する。壁体が遺る東北東面の壁外周は，13～19㎝掘り下げている（通常高の床面から）ことから竪穴式住居といえる。その長軸8.6ｍ，短軸7.6ｍで楕円形プランを成しているが，特に東北東面（Ｂと表示）に連なる壁体は意識的に有段されているようで注意される。例えば内壁に接するSK02は別にして，外側に周行するSD01はそのことをより浮彫りにしているといえる。この有段壁体といえる壁体は，溝と壁体との最大差27㎝測り，壁体の頂部分は３層上面で既に露出していたのである。したがって第９図，図版10－８に明らかなように，その頂部面は遺物の出土が閑散である。また，明らかに有段されたと想定される壁体部分の１箇所（ｂと表示）に底面が確認され，その箇所からあたかも遺物が流出したかのように散漫する（第９図，図版10－８)。この有段状の壁体が構造的に壁周していたものか，あるいは部分的に水退等に配慮した築造であったかは，浮彫りにすることはできなかった。

Ｐ（柱穴），SK（土壙），SD溝状遺構　本調査区では第11図に明らかなように，柱穴38，土壙８，溝状遺構１などの遺構が検出された。そのうち柱穴は径17～48㎝のものであるが，P09，P19は建替えあるいは補助柱による連穴するものであって，その多くは21～23㎝である。これらの柱穴をSIプランに照合して辿っていくと，第11図のような柱列プランが想定され，柱間はおよそ1.6～２ｍである。しかしF2－aグリットからF2－bグリットの周堤状壁体上面に連なるP05，P07，P11，P18に連結していくと，そのSIプランの長軸7.6ｍ，短軸7.2ｍとなり，前述の柱並部分は拡張されたとも捉えられる。また，内側に周円するP05，P07，P11，P17，P21，P22，P29，P27等の周並穴は，同位面（３層と４層の層界）に掘削されていること，基底面での遺物の散布状況（第10図）からみて一定の境界性がないこと，想定されるSIプランにほぼ比例して周並していることなどから，複合プランとは認められず，内外に主柱を置く構造であったものと解したい。

土壙には広く浅いSK01のようなもの，またSK06のように狭く深いもの，あるいはSK02，SK06の低位は粘性の強い黒褐色を呈し，土器片等が流入する（図版10－８)。

SK01はほぼ中央に位置し，浅く掘り下げ，その上面の暗褐色土にはF2－aトレンチを挟んで地床炉と想定される石組が検出された（第８図１，図版９－６)。また，SK05の上面からも拳大から20㎝あまりの角礫群がみられ（第８図４，図版９－５)，その多くは熱焼のため赤茶褐色を呈し，さ

らに屋外炉と想定されるSK08の南西面には骨片，炭化物が検出されたブロック（第８図７）が存在する。SK04の基底面には土器とともに拳大から25cm大の円礫が６個検出され，その上面（３層中位）には石器剝片が多出した石群があり，30～50cm大の石台が４個みられる（第８図２）。特に貯

（◇註　トレンチ溝が図示してないので承知願いたい）

第10図　Ｆ２区基底面出土状況図

0
5m
F2−bグリッド
F2−aグリッド
F2−cグリッド
F2−dグリッド
SX
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SK06
SK07
SK08
aトレンチ
bトレンチ
cトレンチ
dトレンチ
290.684m
290.704m
290.644m
290.644m

第11図　F2 区 遺 構 図

蔵穴と思われるSK06では，上面を覆うように並石した配石の検出（第８図５）は気になるが，配石自体が暗褐色土中であるので，流入石かも知れない。SK02は土壙として捉えたが，有段状の壁体に用いるために掘削した溝かも知れず，それはSD01でもいえ，その基底部には土器，石器が集中する（第10図，図版10－８）。

４．他調査区の状況

Ａ地区　Ａ地区での遺構の検出は，３層（暗褐色土）中位であった（第12図，図版３－２）。これらの柱穴遺構は，A1区14穴，A2区13穴，A3区２穴の合計29穴で，概して調査域の南面に偏存して検出された。遺物は３層から４層にかけて縄文遺物が出土しているが，他調査区に比べて少なく，時期的にも多少の擦れがある。遺構を検出する４層は，５㎜大の砂粒を含んでいるため，紙祖川の溢流による流出の影響が僅かに読み捉られる。それはP23，P24，P26に明らかなように，北東に流走した河道方向に柱穴が100°，110°，115°とに傾斜していることからも確認できる。これらの柱穴が平床式，あるいは竪穴式に伴う柱穴であったかは判らないが，A1区に半円形に周行する深さ８～15㎝，幅50～80㎝，長さ660㎝の溝状遺構（SD01）は気になる（第12図）。遺構に伴う石体等は柱穴の検出をみた４層中位では確認されておらず，中央ベルト，A1－A2ベルトのセクションを

Ａ調査区遺構計測表

遺構	長径	短径	深さ	上面標高	遺構	長径	短径	深さ	上面標高
P01	30㎝	26.5㎝	3㎝	291.182m	P17	12㎝	12㎝	6㎝	291.052m
P02	24.5	23	12	291.202	P18	19	16.5	15	291.072
P03	23	20.5	12	291.202	P19	18.5	15	9	291.092
P04	26.5	20	25	291.152	P20	25	24	3	291.112
P05	22	20	9	291.182	P21	12.5	12	17	291.112
P06	20.5	18.5	13	291.162	P22	18	17.5	18	291.122
P07	17.5	14	3	291.172	P23	20	18.5	29	291.042
P08	25	24	21	291.132	P24	20	18	24	291.062
P09	24	20.5	14	291.142	P25	22.5	20	15	291.072
P10	18.5	18	15	291.162	P26	23.5	20	23	291.072
P11	14	12.5	11	291.142	P27	20.5	17	20	291.092
P12	24	22	11	291.152	P28	22.5	18	14	291.062
P13	18	17.5	10	291.152	P29	18	17.5	18	291.022
P14	24	22.5	12	291.172					
P15	14.5	13.5	15	291.102	遺構	長さ	幅	深さ	摘要
P16	14.5	14	7	291.052	SD01	660㎝	50～80㎝	15㎝	溝状

見る限り，４層と５層の層界に土壙，あるいは柱穴等の“陥ち込み”が顕著であるため，下位に存在するものなのか，あるいはそれらの遺構は時期的に異なるものであって複合するものなのかについては，下位層を掘削していない現状では判らなかった。

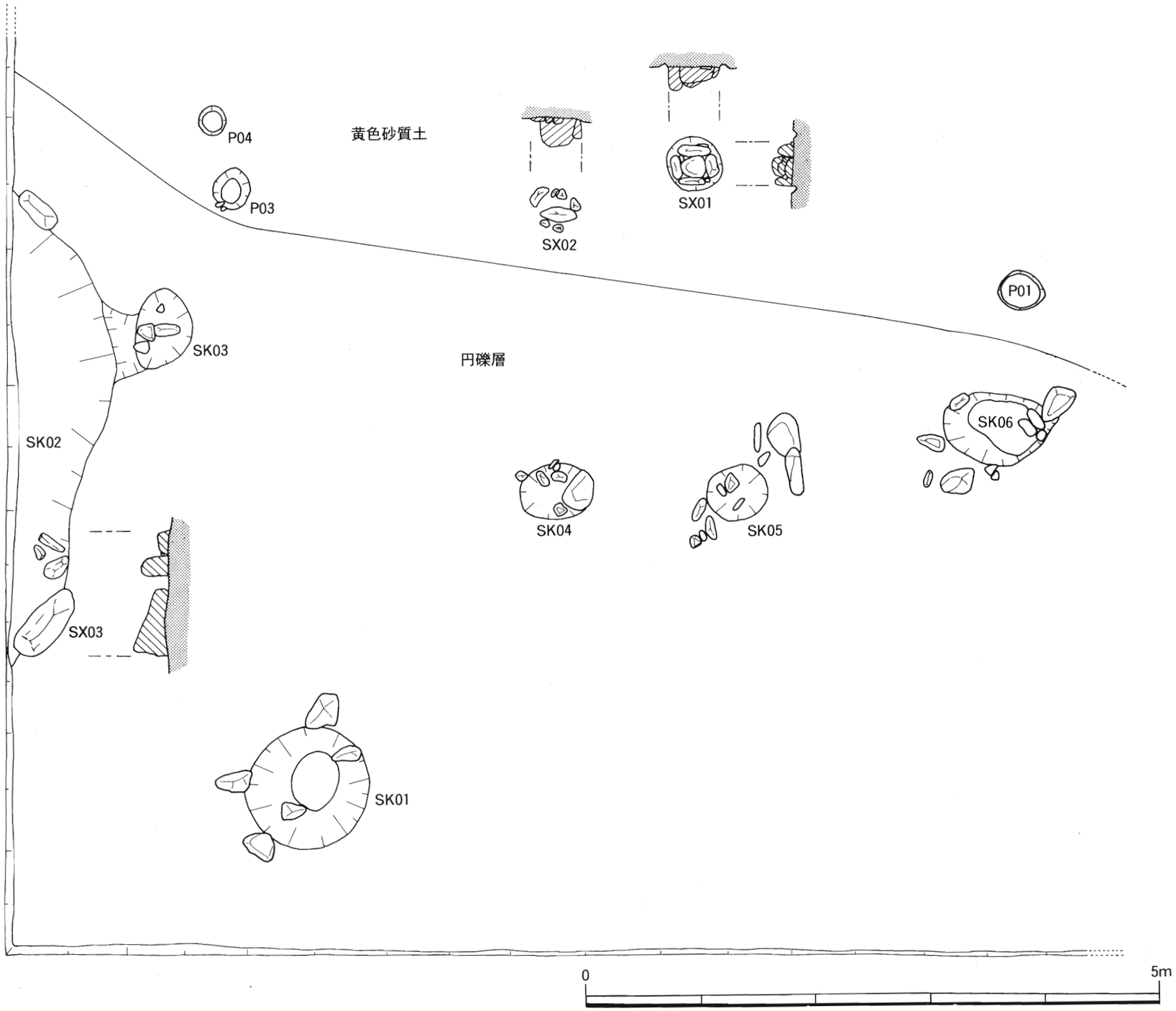
C1区　C1区は北東流した河道に立地している（第５図，図版４）。そのため区内には10～60cm大の河床礫に覆われ遺構を撹乱するが，部分的には河道の側沿にあたる東面のように，柱穴，石囲炉と想定される遺構等を遺している。これらの遺構内には砂礫が多く混入した暗褐色土であって，遺物が多出している。特にD1区に連結するSK02では200点，SK06を中心とした地点では250点余りが出土している。

石囲炉と想定されるSX01（第13図）は，長さ23～27cm，幅15～20cmの河原石４個をもって四周させ，さらに中央に偏平な石をはめ込むように１個置き，それらを小石３個で固定している。それらの石体が人為であったことは，層界の四周をとり囲む幅約５cm，深さ３～５cmに掘り込まれている暗褐色土が物語っており，また１個の石面に付着する炭化等から明らかである。柱穴と思われる径23～38cm，深さ約６cm測るピット，P01，P02，P03，P04がそのSX01と一連プランの如く径約6.6m測って散在する。SX02（第13図）も石囲炉かも知れない。またSX02の土壙内に存在するSX03は，３個の石を立ち上がらせ，さらに側に横たわる長さ60cmの石体との配石状況から人為的な立石を捉えられそうである。長軸4.8m，短軸3.6m測るSK02（D1区に連結）は，長楕円形を呈した土壙で，上位面は円礫による河床礫が覆い，約５～８cm下層は遺物を伴いながら黄褐色砂質土，そして砂礫を含む暗褐色土と漸移に変化し，その深さ15～20cm陥ち込んでいる。土壙はその他SK04，SK05，SK06が確認され，いずれも下層は砂礫を含んだ暗褐色土であるが，20cm大の円礫が多く流入する。

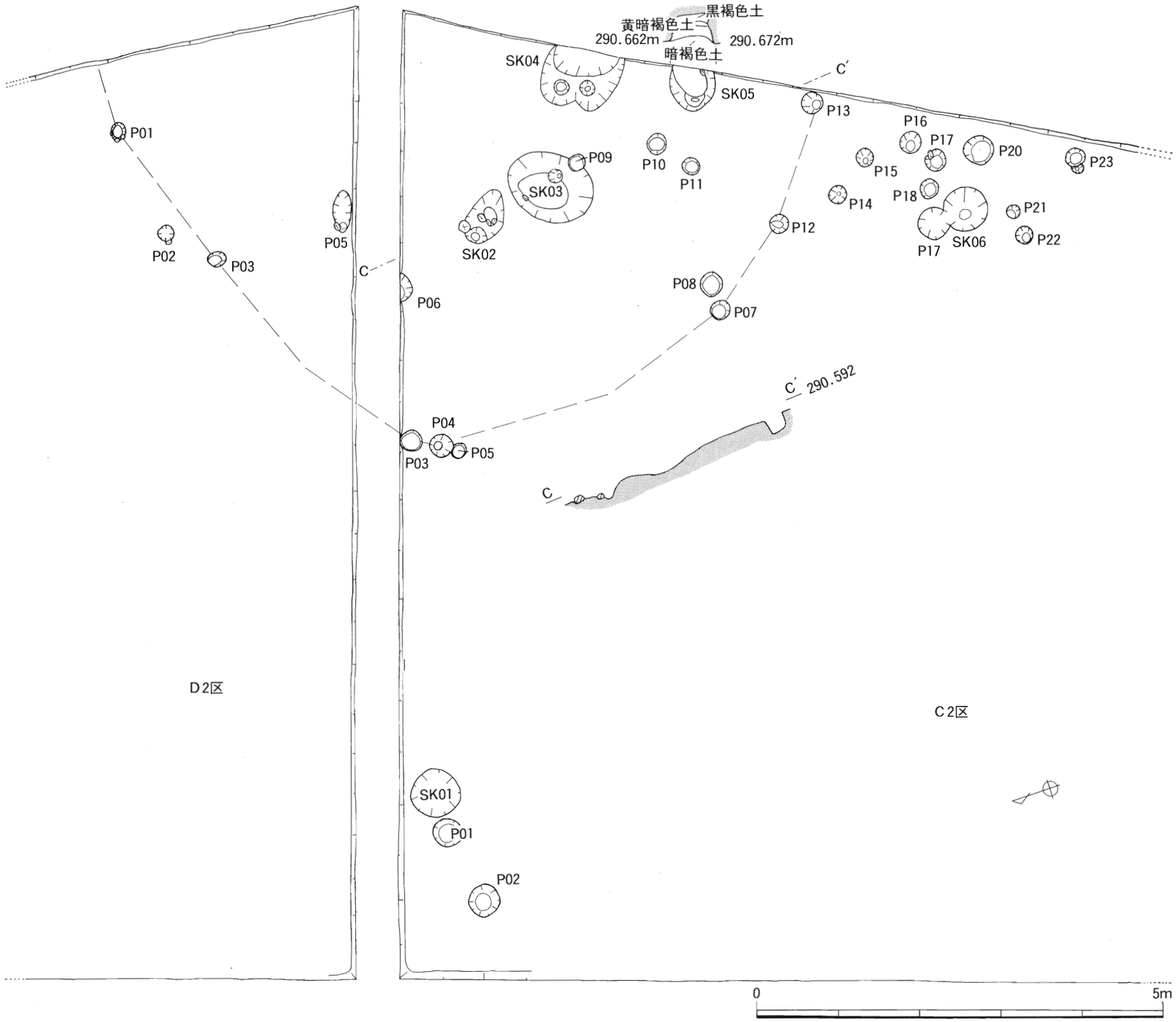
C2区　C2区の東面半分は，１層耕作土，２層客土，３層暗褐色土（層厚約４cm），４層黄褐色土とに分層されるが，西面に向って（C1区寄り）３層の暗褐色土層が漸移に消える。遺構はその東面の暗褐色土層を残す面に，遺物とともに集中した。柱穴と思われるピットは，径18～23cmのものが中心で，４層の黄褐色砂質土層におよそ10～13cm掘り込んでいる。隣接するD2区にもP01，P02，P03などのピットが検出されているが（第14図），これらを結んでいくと，C2区のP03，P04，P07，P08，P12，P14，P15，P16に連結され，住居プランらしきものが浮かび上ってくる。土器，石器などの遺物は約1,200点出土し，想定されるプラン内を中心に散在した。土壙はSK01（図版５），SK02，SK03，SK04，SK05，SK06が検出され，そのうちSK05，SK06は貯蔵穴であろう。またSK02，SK03，SK04の構内にはピットが確認されており，これを結ぶとF2区で確認されている主柱を二重廻りさせる構造となっている。

D1区　D1区は，北東に流走した河道の側沿（北西側）にあたるため石体も小さくなり，砂礫化す

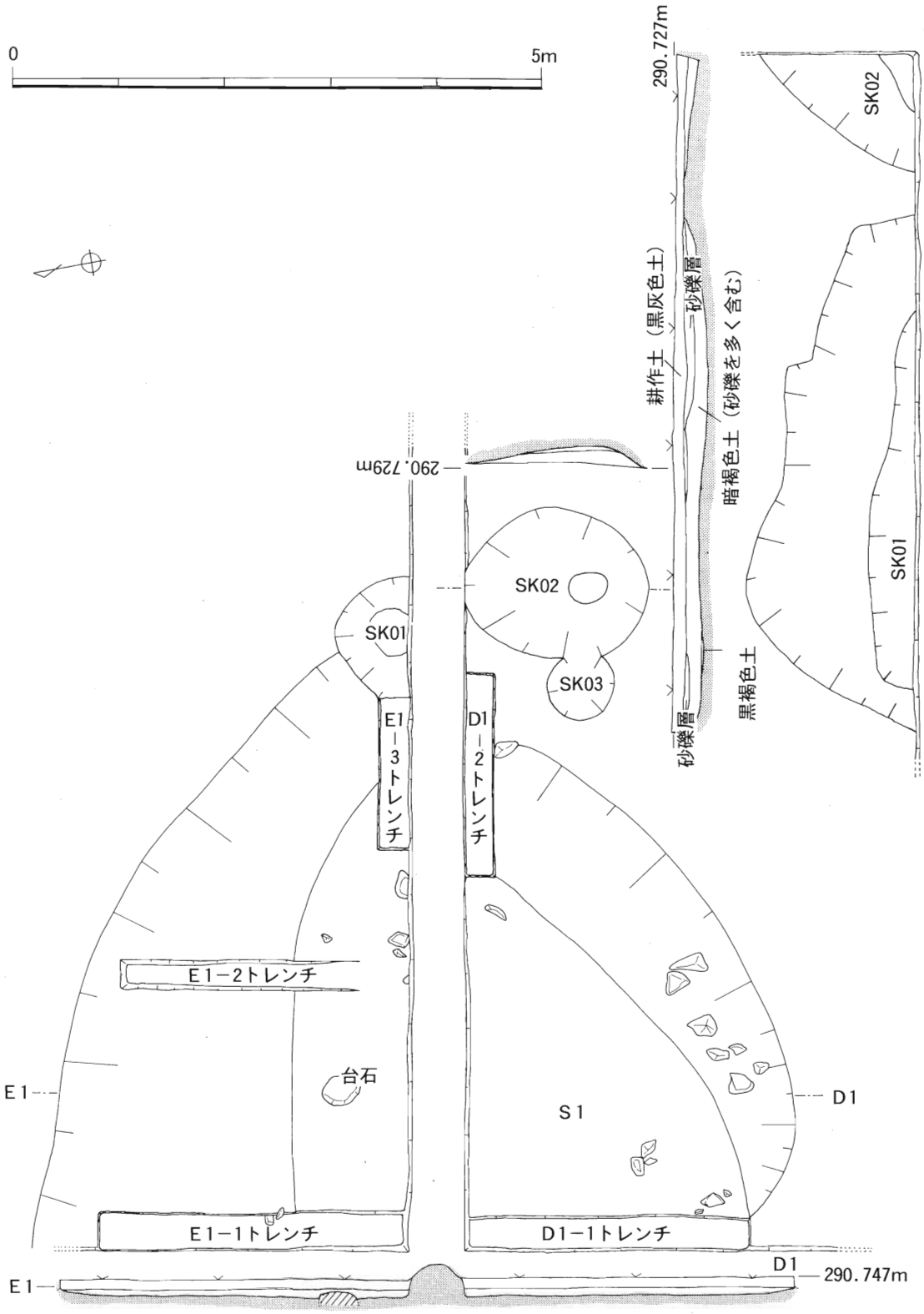
第12図　A地区遺構検出状況図



第13図　CI区遺構検出状況図



第14図　C２区・D２区遺構検出状況図



第15図　D１区・E１区遺構検出状況図

る。区内の南東面には，C1区のSK02と連溝するSK01が検出されている（第15図）。その構内の上層には部分的に役２～５㎝大の砂礫が嵌入し，下層には砂礫，円礫を含む暗褐色土となり，基底部にわずかに粘質の黒褐色土がみられた。

また北西面には，セクションベルトを挟んでE1区と連結する住居プランと想定されるSI01が検出された（第15図）。耕作土は８～10㎝と薄く，客土は顕著ではない。僅かに砂粒溜がみられ，磨滅した小片の縄文土器がプラン域に拡がり，暗褐色土を掘り下げると密になり，ほぼ水平に堆積している。遺構プランが拡がっていると思われる北西面は，水路を挟んで農道が北東方向に走っているため拡張できなかった。その実施調査した長軸約6.2mを測るが，予測的には８mにおよぶと思われ，短軸は約6.3m測り，楕円形プランが想定されそうである。掘削は３層の上面までとしたため，その下層状況について詳しいことは明らかでないが，３層上面に長径38㎝，短径28㎝の台石が出土している（第15図）。その台石は花崗岩で，上面に擦痕による使用痕がみられ，約30°傾斜させて配置する。またSI01の東端（E1区の南西面）に径約１m，深さ約30㎝円形土壙が検出した。遺物はその上面（暗褐色砂礫土）に数点出土したのみで，下層には無かった。

E1区の耕作土直下は，１～４㎝台の砂礫と砂粒が２～３㎝あまり層をなしていて，部分的（中央トレンチより）には，そのまま河床礫に至っているものもある。しかし，区内のほぼ中央には暗褐色を呈した円形状の約5.8m測るプランが確認され，遺物も散在するもので，遺構が存在するかも知れない。

（渡辺友千代）

第5章　出　土　遺　物

1．はじめに

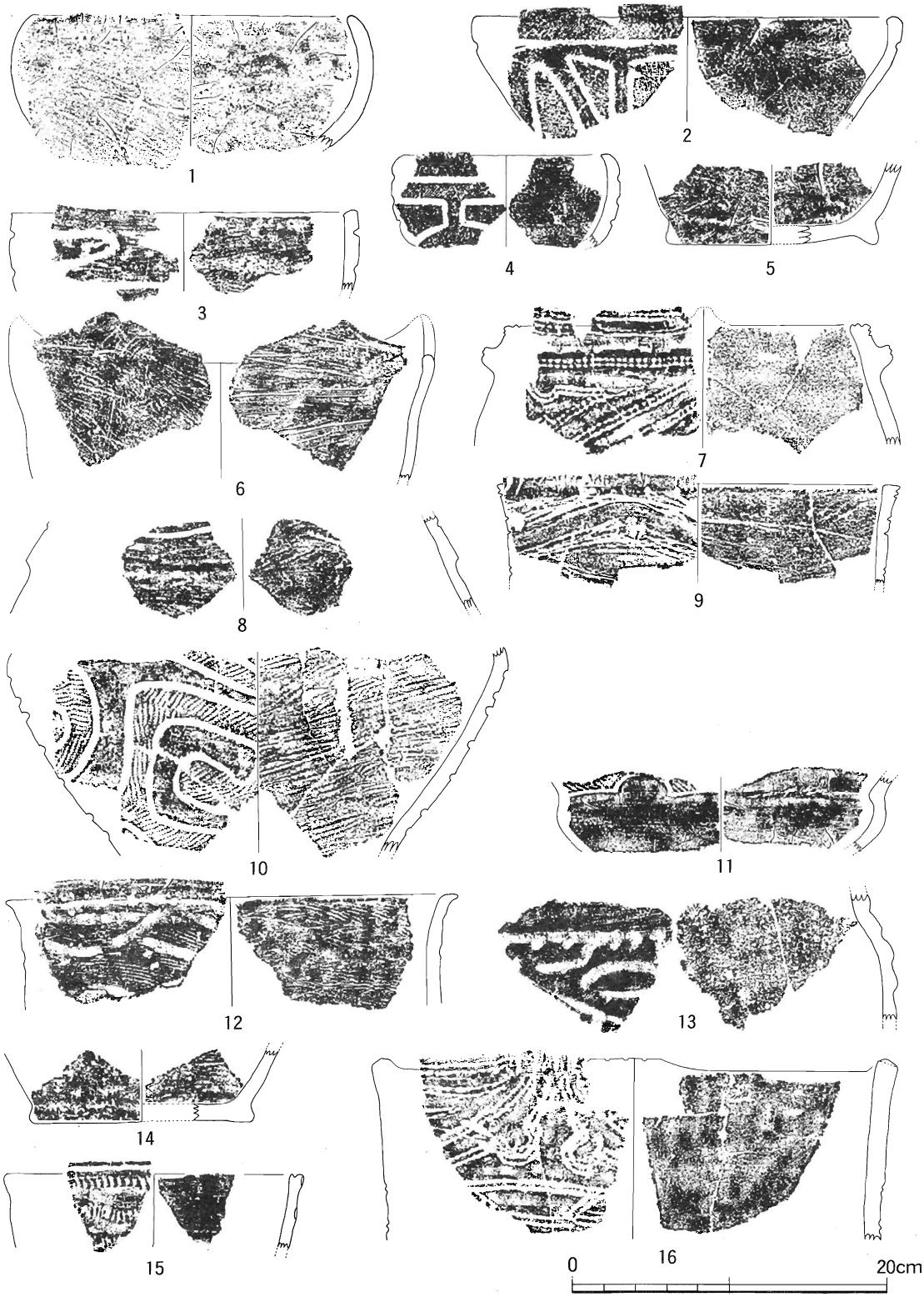
本調査で取り上げた遺物は，第7図に表したように15,900点に及ぶ。本章ではこれらの遺物について，完掘したF2区を中心に，他調査区も含め，総準的にその特徴を示しているもの，あるいはレァリティのものも含め，土器125点，石器56点の合計181点を図示した。これらの掲載については，調査面積が1,300m²に及ぶ広範囲であったため，特徴的分類とはせず，地点（地区）ごとにとり上げている。また特に滑石混入土器については，本遺跡の特徴を描き出すために極力掲げるように務めた。

2．F2区の出土遺物

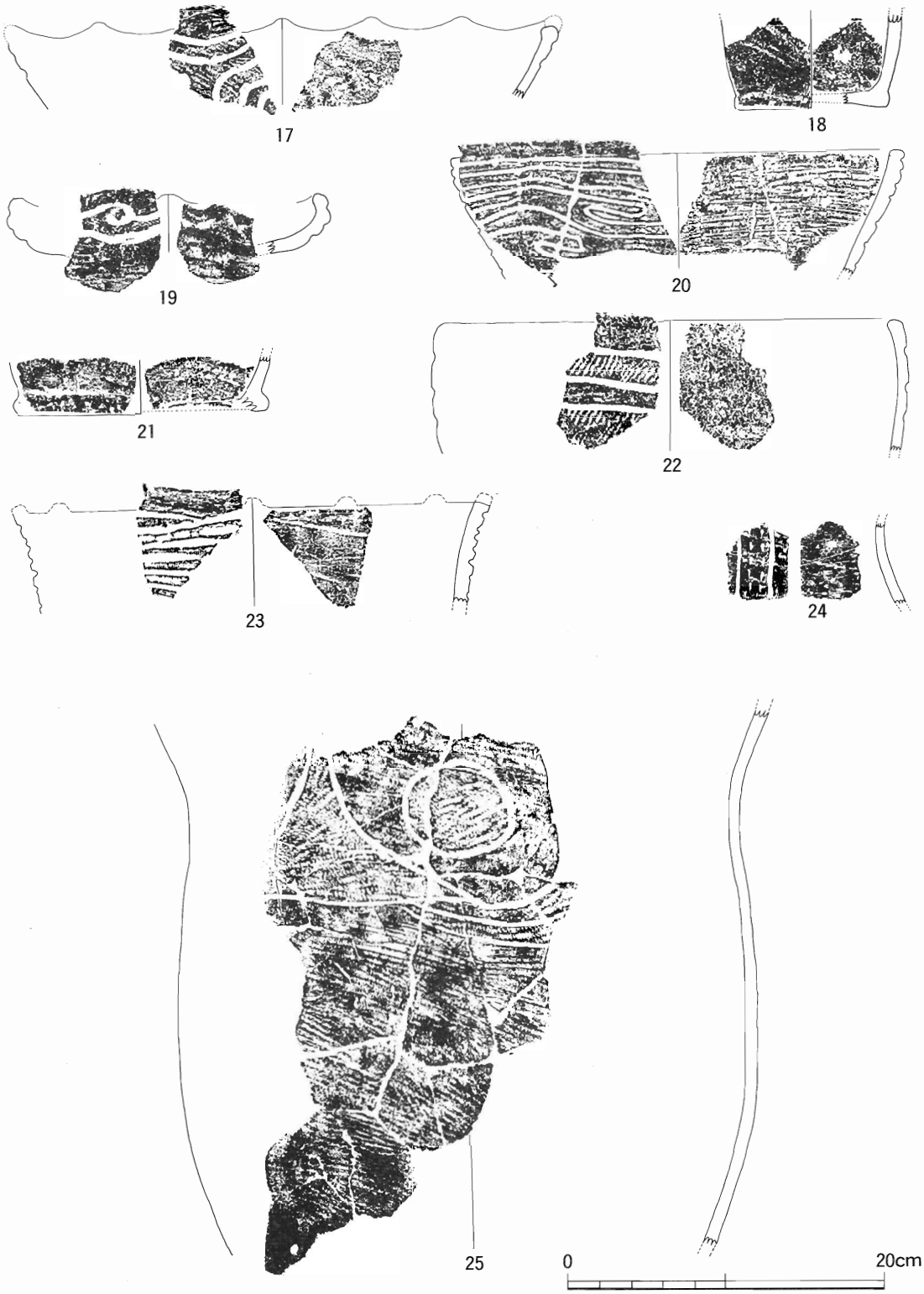
F2区からは，縄文土器片5,928点，そのうち滑石混入土器180点，剝片285点，石錘39点，磨石22点などの総数6,599点が出土した。以下これらの遺物について，まず土器から概略述べていくこととする。

土器（第16図～第20図）　1～5は，耕作土及び客土から出土したもので，5の底部以外は，太い沈線や深い沈線を枠状モチーフで描く磨消縄文土器。また1，2，4は口縁が内湾し，そのうち1は椀形。6～10（第16図）は，3層から出土したもの。凸帯を巡らす7は，2本単位の施文具による押引きの後，その間を指頭などで凹線文を施した広義でいう阿高式系土器（並木式）。胎土に滑石を混入させ，外面に煤が付着し赤褐色を呈する。9も滑石を混入させた阿高式系土器。器面に斜向の短沈線を数次に引き連ね，その間を浅く凹線を施す。また直立した口縁の端面には横位に細沈線を間隔的に4，5本並行させる。色調は茶褐色。10は太くて深い沈線で描く磨消縄文土器で，器肉は厚く，比較的広い縄文帯である。内面は条痕を施し，茶褐色を呈する。

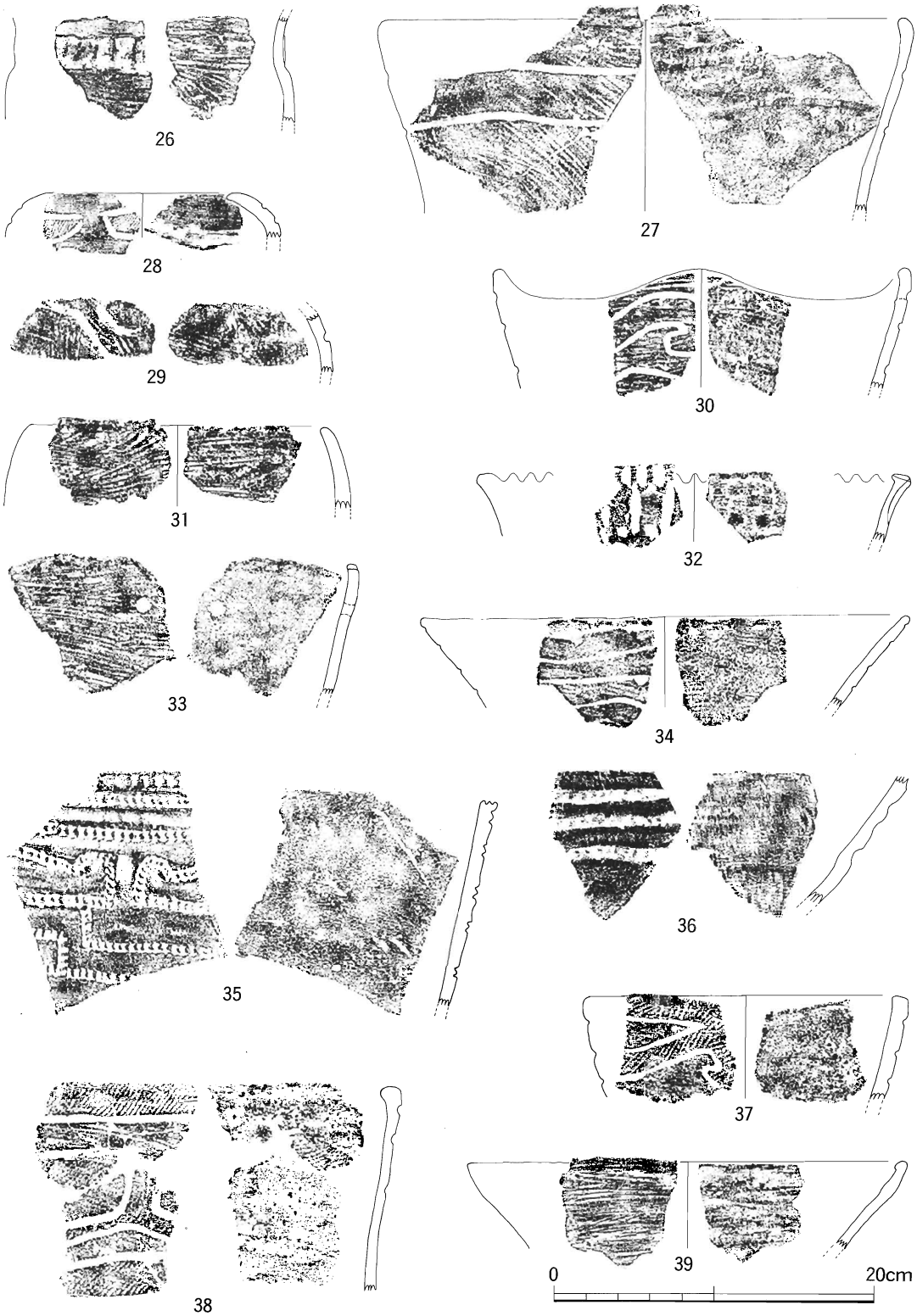
11～25（第16図・第17図）までのものは，ほぼ3層に出土したもの。11は，短く外反させる精製土器。内外とも丁寧に磨き，文様は半円弧状を成す鐘崎式のもの。12は外反した口縁部。外面に凹線を施した後，内面とも板状施文具によるハケ目調整を施す。滑石は混入していない。13は凹線文と凹点文を併用した阿高式系土器で，灰褐色を呈する。15，16は2本単位の施文具で押引きした後，その間に凹線を施した並木Ⅱ式といわれている[註1]前者は茶褐色，後者は黄灰褐色した土器。17・19（第17図）は口縁部に幾何学的な文様を集中させる縁帯文土器で，津雲（彦崎KⅠ）式に並行するものであろう。20は，鐘崎の影響を受けたものだろうか，狭い沈線を一筆書に描く。外面はナデ，



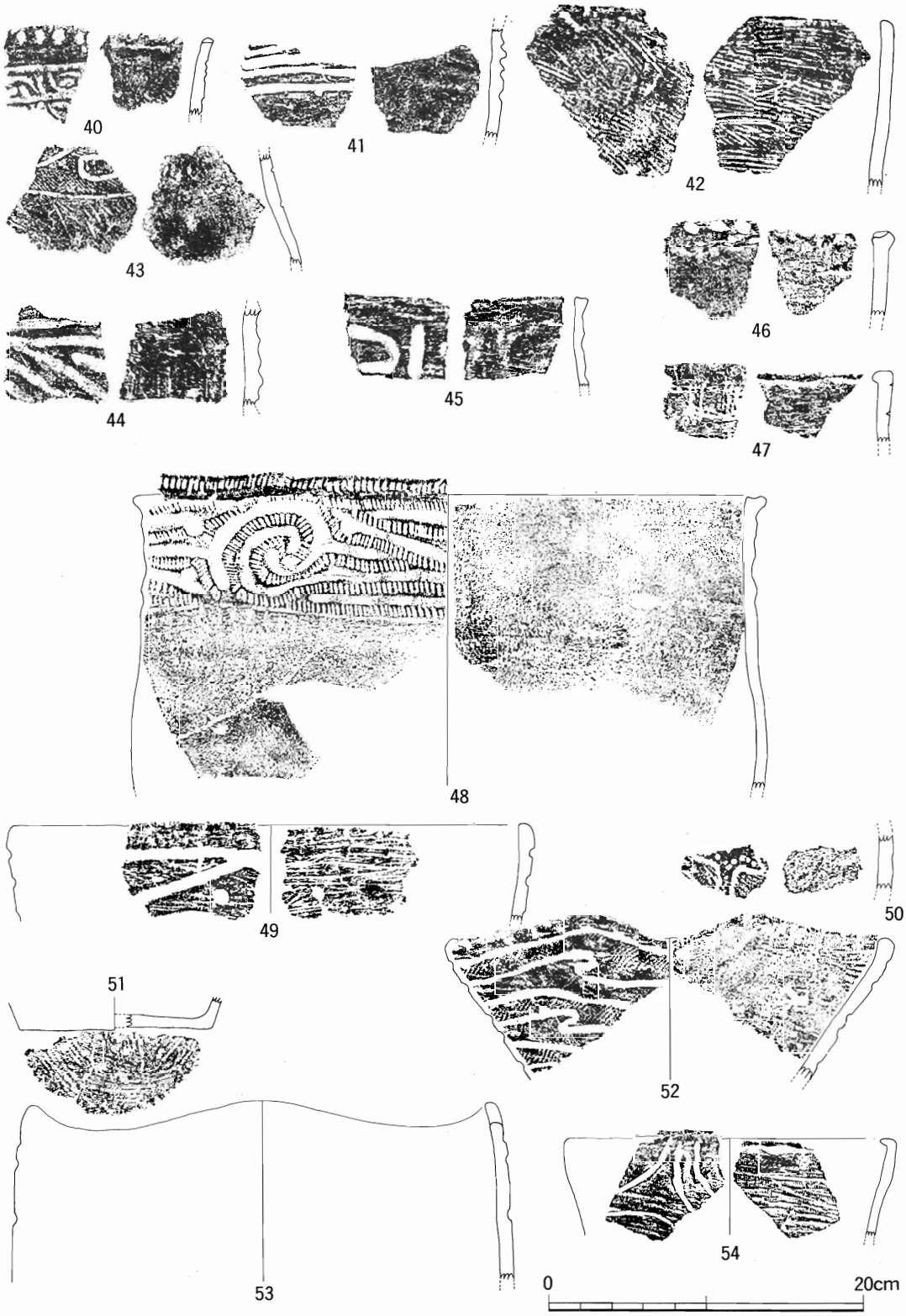
第16図　F２区土器実測図(1)



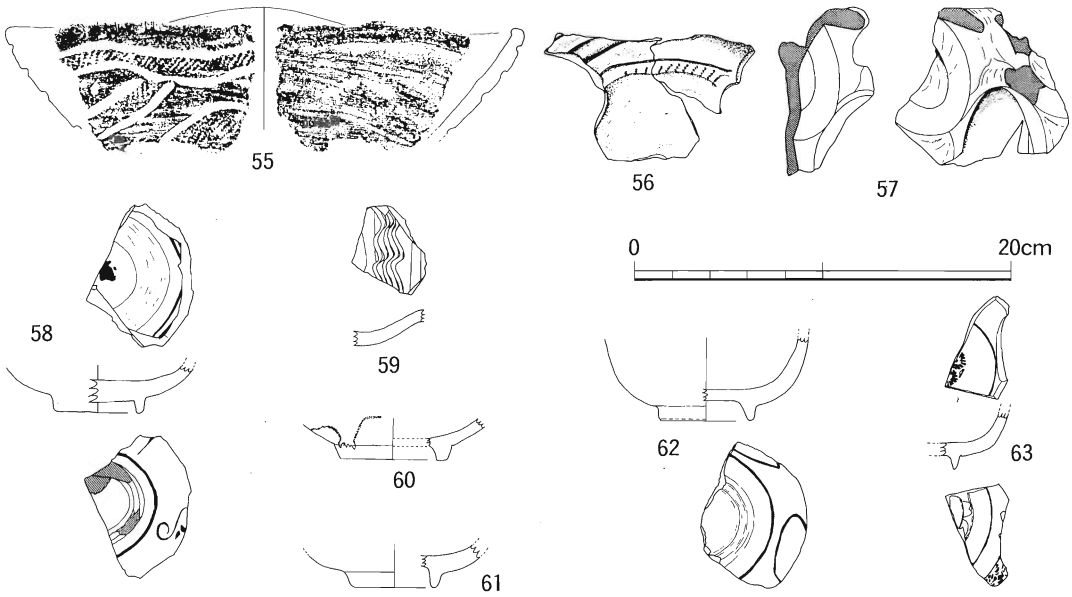
第17図　F２区土器実測図(2)



第18図　F２区土器実測図(3)



第19図　F２区土器実測図(4)



第20図　F２区土器実測図(5)

内面は条痕で調整する。胎土に２㎜大の石粒を含み，黒褐色を呈する。21は，滑石を混入する阿高式系土器の底部。その底部はベタ底に近く，縁辺はふっくらと円みを帯び，黄褐色を呈する。阿高式系の底部は，およそ同様な形状をしている。23は，滑石混入土器で，棒状施文具で沈線，凹点の区画の縄文帯に疑似縄文を施し，他を篦で磨く。胴下半や内面は条痕で調整している。

26～44（第18図・第19図）は，３層下位あるいは区内のトレンチの下位に出土したものである。26は，内外を条痕で調整し頚部に指頭で押圧したもの。27は深鉢の口縁部。大振りな曲線を描き，器面を条痕で調整した後，内外ともナデ仕上げする。30も同様な手法による中津式土器。32は器面に竹管状の施文具による凹点，押引きし，口縁を波状に刻んだ土器で，40も同形状をなし，南福寺式と思われる。35・36は滑石混入土器で，前者は並木Ⅱ式，後者は凹線のみの阿高式，内面を板状施文具でケズリ調整する。37は，曲線が鉤状的にカーブする磨消縄文。外面には酸化鉄が付着し，淡茶色を呈する。41は，茶褐色を呈した滑石混入土器。42は，内外ともはっきりした条痕施文で，僅かに外反して立ち上がる深鉢土器。口縁端はナデ仕上げ。

45～55（第19図・第20図）は，３層と４層（黄褐色土）との層界に出土したものである。44・45は滑石混入土器で，後者は器肉は薄く，器壁を板状施文具で調整する。46・47・48も滑石混入土器。そのうち47は鋭い沈線を数次に集約させる。色調は青灰色を呈しており，並木式中でも古い段階のものであろう。49（第19図）は，棒状具で幾何学的に施文し，器壁は条痕で調整したもの。50は磨

消縄文で，縄文帯に貝殻圧痕の疑似縄文とし，磨消部分に竹管で列点文を施文する。また図示してはいないが，他に沈線に同様な列点を施しているものも出土している。56は異形土器で，３層中位に出土した。57は橋状把手で，鐘崎系統の土器であろう。

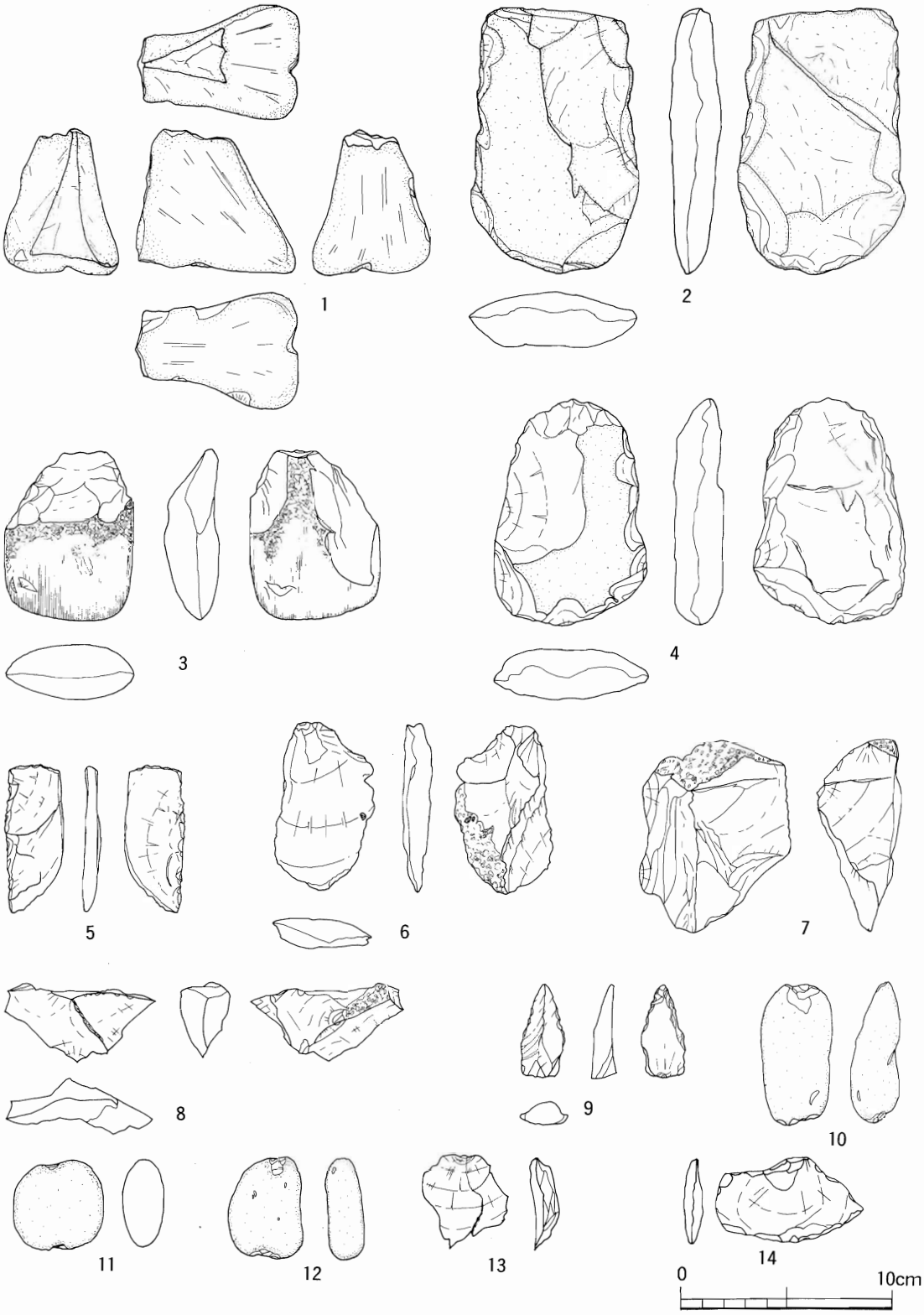
58～63－１（第20図）は，全調査区内のおよそ１，２層に出土した陶磁器類のうち，６点を図示したものである。その多くは78の伊万里系にみられるように，近世のものであるが，中には61や図版16－6，63－１のように，中国青磁も出土している。

石器（第21図・第22図）　１は，３層下面の石囲炉（SK01）と想定される上面で出土した砥石。３面は擦削で凹状を成し，そのため２方は欠除する。また石角の凸部には局部に使用した擦痕が凹跡にみられる。石材は砂岩。２は器長12.5cm，器幅８cmを計る安山岩質の打製石斧。５・６は削器で，前者は基底面，後者はF２－cトレンチ３層下面に出土したもの。いずれもガラス質安山岩で，５は直刃面に階段状に細部調整する。７・８は石核で，前者はガラス質安山岩，後者は乳白色の黒曜石である。９は，ガラス質安山岩の尖頭状石器。器長4.2cm計り，３層下位に出土した。打点は基底にあって三角形を成し，両縁を丁寧に両面調整する。10・11・12は，礫石によって両端を欠いだ切目石錘。そのうち10は長さ6.8cm，11は器長，器幅とも4.3cmの円形を呈する。このような石錘は，同区に39点出土している。13は，黒曜石（乳白色）の剝片石器。裏面に数次の剝離面がみられるため，石核かも知れない。14・15はガラス質安山岩による横形石匙状石器。いずれも打面は上部の稜面にあって，弧状を成し刃部縁に浅い片面細部調整を施す。16は剝片石核で，石材は黒曜石（乳白色）。17・18・19は基部に抉入のある石鏃で，そのうち17・19はガラス質安山岩を石材とし，器体に剝離面が周円する。同区には同形状のものが５点出土しており，いずれも縁辺を丁寧に整形し，偏平なもの，円形あるいは三角形状のものとに分類される。形状的には石刃鏃に近く，基部が尖る石鏃であろう。なお同区からは３点の鍬形鏃が出土している。

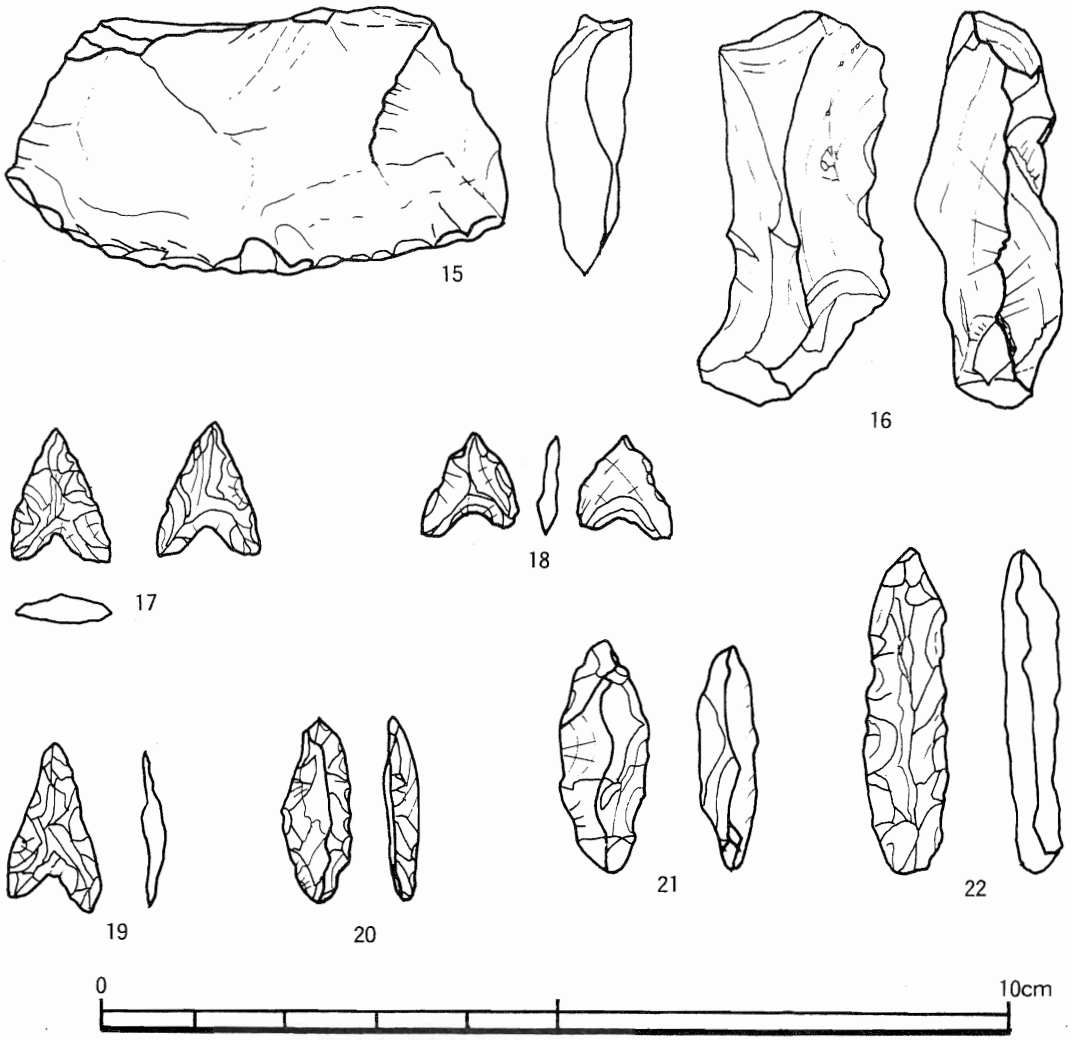
３．他地区の出土遺物

土器（第23図～第27図）　64～66は，Ａ地区の遺構を検出した４層上位に出土したもの。64は，短く内折する口縁部。口唇部は凸帯状に肥厚させ，その頂部に貝殻の腹縁で押圧し，さらに殻頂で刻みを入れている。内外とも条痕で調整するが，口唇部はナデで疑似縄文を消す。65は，A3区の３層に出土したもので，口唇部は肥厚し強く内折する。外面は条痕を施し，肥厚した凸帯に篦状具で刻みを入れ，内面はナデ調整する。66は幅狭３本沈線の精製土器。縄文帯との間，内面とも篦で丁寧に磨き上げており，色調は暗褐色を呈する。

67・68はB2区の３層上面に出土したもの。そのうち前者は口唇端に篦状施文具で刻みを入れ，内外を篦で精緻に磨き上げ，焼成はきわめて良好。後者は淡茶色した底部で，下半部にかけて縦に



第21図　F２区石器実測図(1)

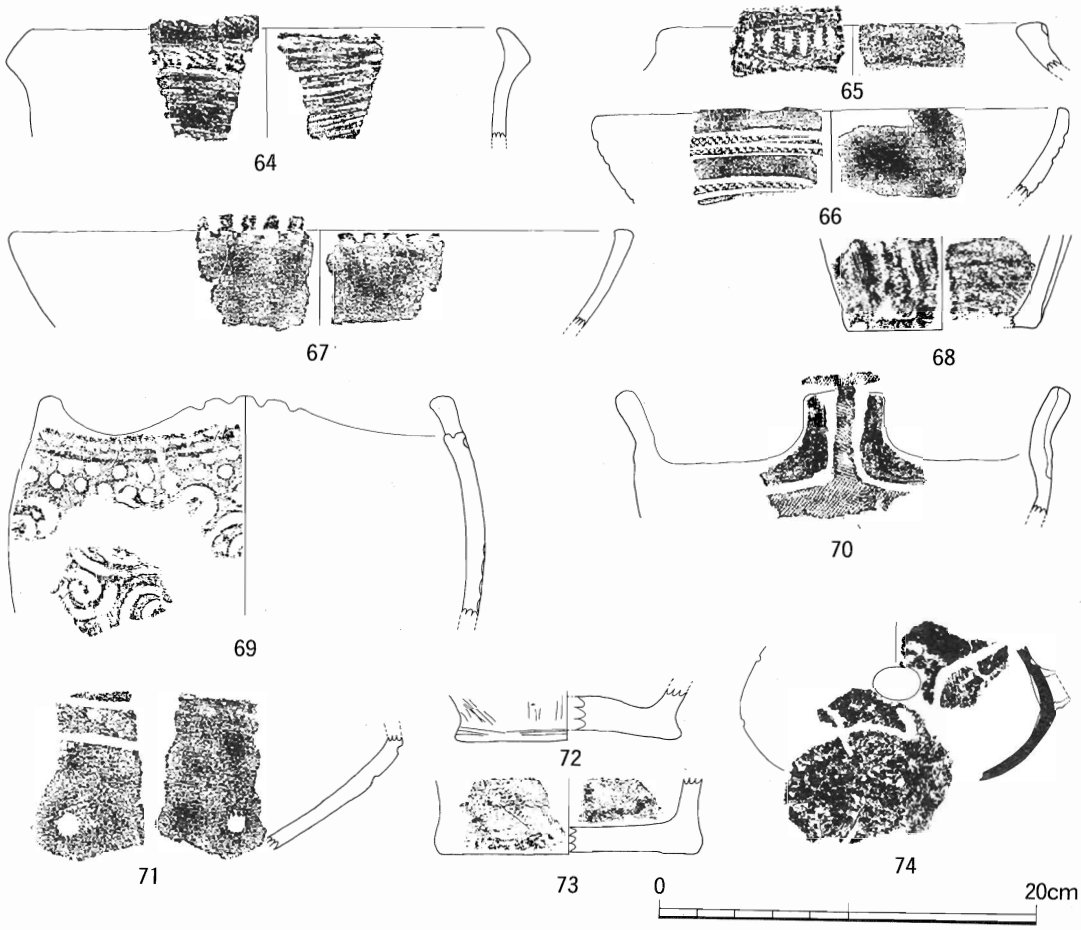


第22図　F２区石器実測図(2)

数次の凸帯が施されている。

69～85（第23図・第24図）はＣ地区で出土したもの。そのうち69は，C1区で出土した内湾する波状口縁の土器。口縁部に２列の篦で抉った凹状の点文を配し，その下部に篦で渦巻文を描く。口縁端は刺突・波頂部には棒状の施文具で５つほど押圧している。阿高式系統のものと思われるが滑石の混入はなく，内外の器壁は篦で平滑する。70は，C1区のSK05付近に出土した（３層上面）突起部。２本の深い沈線が頂部まで至り，縄文帯は比較的広く，残りの区画を篦で丁寧に磨いている。色調は内外とも黒褐色を呈し，精緻な作り。71も中津式である。72・73は底部で，前者は凹レンズ状に揚げ底となり，内面は篦で粗く調整する。色調は黄褐色を呈する。73は，茶褐色した滑石入り

のもの。底面はやや揚げ底で，底部の縁辺はふっくらとする。全体にぶ厚く，やはり他の阿高式系と同様な形状を呈している。74は注口土器で，C2区のSI内に出土したもの（3層上面)。文様帯は注口，その上面に幾何学的に施し，その沈線辺のみ縄文が施文され，色調は淡茶色を呈している。75は，滑石混入土器。2本単位で直線的に押引いた後，その間に凹線を施文する。下部は無文で，内面には板状施文具による調整がみられるが，外面はナデ仕上げのように見受けられる。色調は茶褐色。76は，C1区の3層直下から出土したもの。口縁端に棒状施文具で連続的に押圧する。外面は条痕，内面はナデ調整を施し，黄褐色を呈する。こうした形状のものは，彦崎KI式やあるいは鐘崎式系のものに見受けられる。77・78は2本沈線による磨消縄文土器。80は内外とも条痕で調整し，外面に2本沈線を施した土器である。84は浅鉢系の底部で，内外とも篦で磨く。



第23図　他地区土器実測図(1)

88は，開き気味に立ち上がった口縁部。その口縁端に細い刻みを連続させ，外面に凹線，内面には板状施文具で調整した滑石混入土器で，茶褐色を呈している。

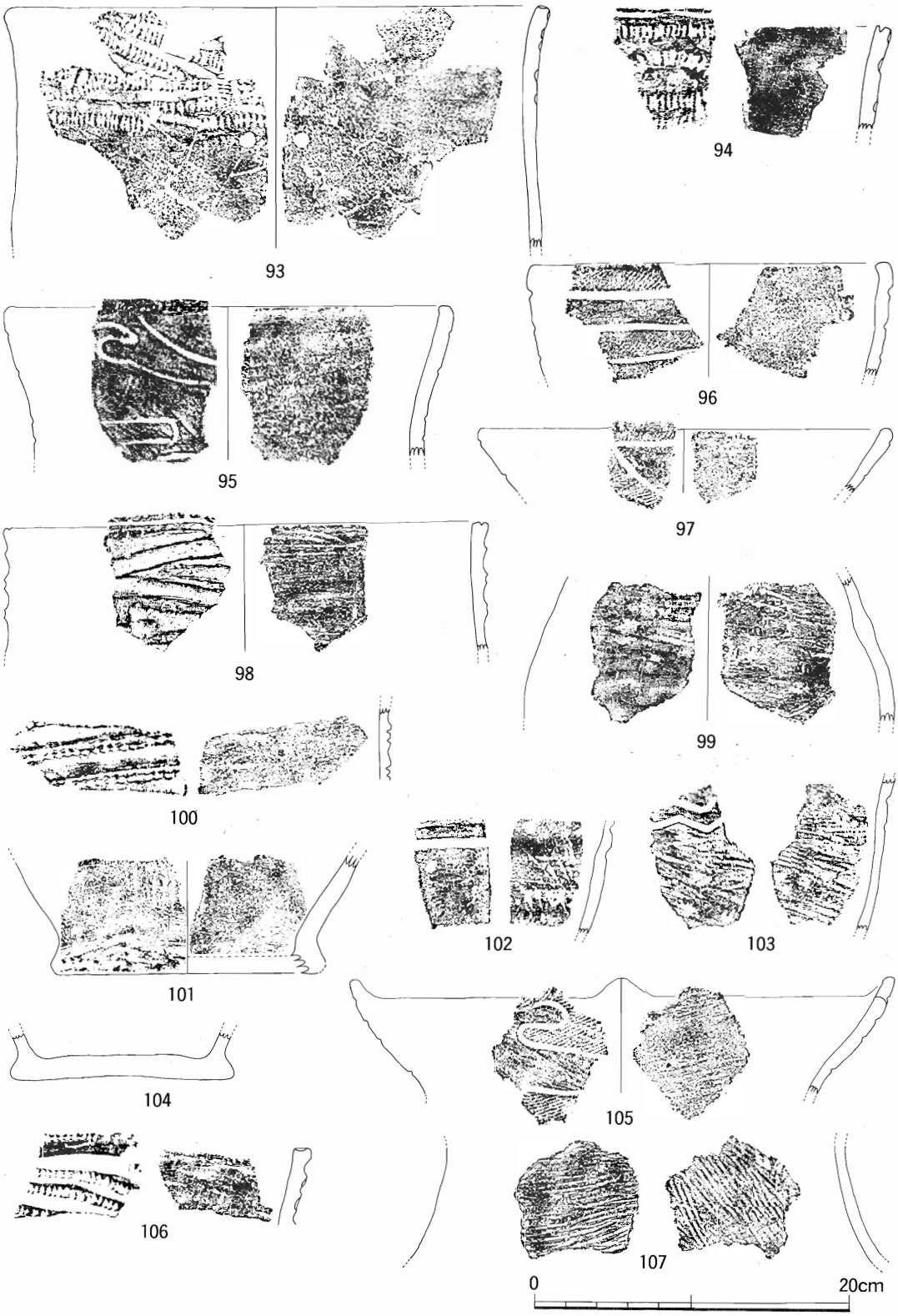
89～92（第24図）は，D地区に出土したもの。そのうち89は注口土器で，C1に連関するSI域の2層に出土した。胴部には凸帯の縁側がとりまき，その区画に縄文が，その下部は磨き残された縄文が微かにみられ，上半部は篦磨きする。彦崎KⅠ式のものであろう。90は滑石混入土器で，口縁部に鋭い沈線を乱調気味に集約させ，肥厚するその端部に1状の沈線を通す。内面は篦ナデ，青灰色を呈する。同じく92も滑石混入土器で，2本単位の施文具で曲線的（逆S字状文）に押引き，後にその間に指頭などによる凹線を施している。曲線が小振りだけに，その間を縫う凹線は浅厚の差となって表れている。平縁の口唇には瓜形状の連続文を施し，内面は篦削り。色調は外面青灰色，内面は黄褐色を呈する。

93（第25図）は，E2区の2層に出土した滑石混入土器。口縁部の外面に瓜形状の連続文を幾何学的に施し，その間に凹線を描く。下半部は茶褐色を呈し，無文で篦削りした後ナデ仕上。内面は茶褐色を呈し，篦削り。阿高式系でいう並木Ⅲ式であろう。[註2]

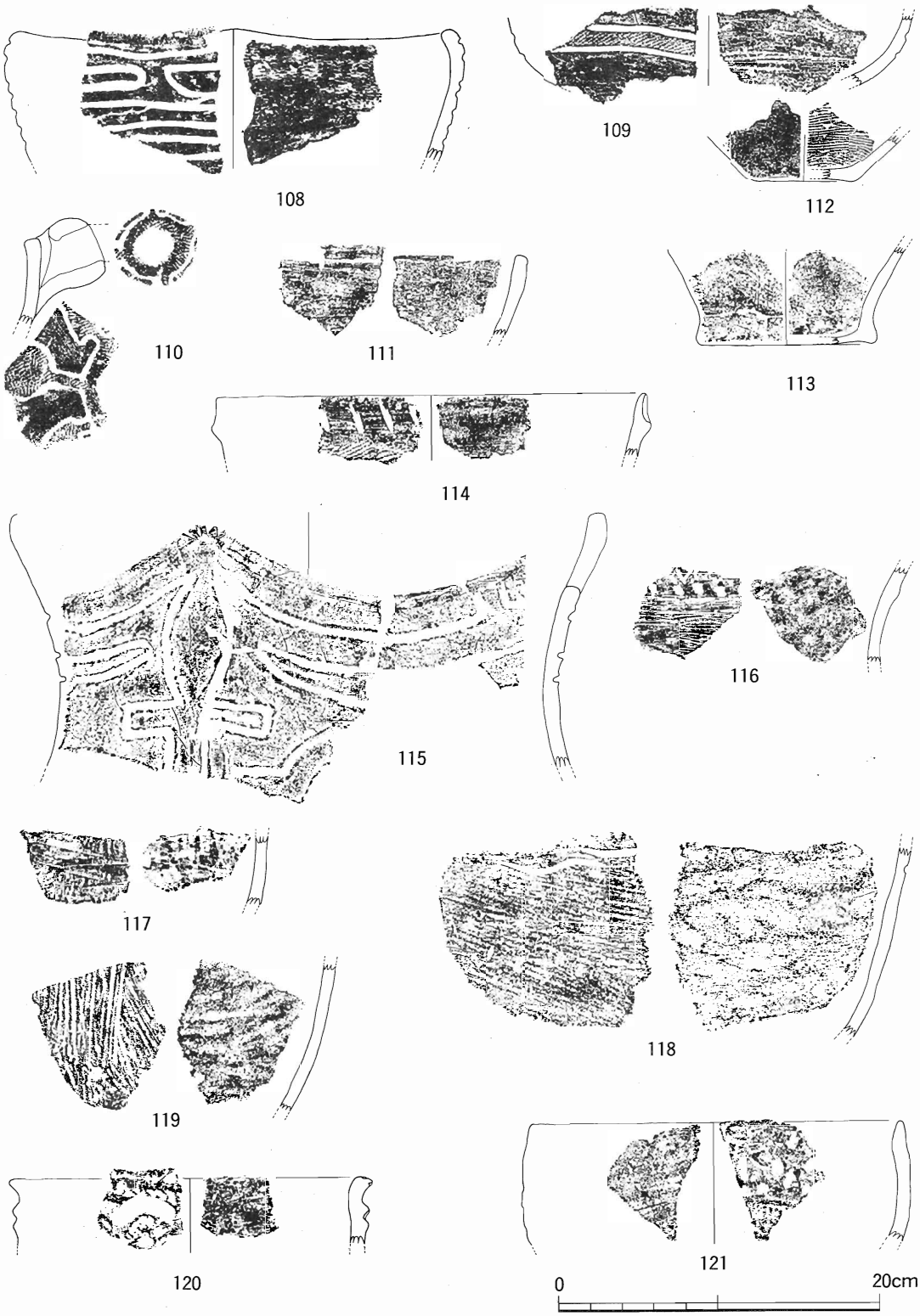
94は，F1の中央トレンチ側に出土（3層）した滑石混入土器。瓜形状の連続文を曲線的に描き，その間の凹線は顕著でない。口縁端には刺突を連続させているので（押引），沈線的に見える。内面は篦ナデで，灰褐色を呈すが，外面は部分的に風化したように茶褐色を呈する。

95～114（第25図・第26図）はG地区に出土したもので，そのうち95～104はG1区の2層。105～107は中央トレンチ（G1区側），G1－G2 2トレンチ内の3層。108～114はG2区の2層・3層上面に出土したものである。95は内外を条痕で調整し，外面に浅い沈線を曲線的に描く。胎土に3～5㎜大の石英を多く含み，外面には煤が付着する。96は直線的に描いた磨消縄文土器で，外面に煤が付着し茶褐色を呈する。98は，青灰色した滑石混入土器。内外とも板状施文具で調整した後，画面には横走する凹線を施文する。99は内外とも条痕で調整した土器。100は赤褐色した滑石混入土器。2本単位の施文具による押引文を直線的に施文した後，その間を凹線文で描く。101は赤褐色した滑石混入土器の底部。102は沈線を施文する滑石混入土器。103は内外とも条痕を施し，外面には山形文を施文する。黄褐色を呈し，外面には煤，内面には酸化鉄が付着する。105は2本の浅い沈線で，比較的幅の広い縄文帯とする磨消縄文土器。外面には朱が着色されているように思われる。106は滑石混入土器。外面に瓜形状の押引きを連続した後，その間に凹線を施文する。外面には煤が付着し，茶灰色を呈する。口縁端には瓜形状の施文具で内側に向って刻みが入る。内面は黄褐色を呈し，輪積痕が顕著である。108は内湾する波状口縁部。外面に描かれている沈線は比較的狭く篦磨きされているが，口縁端には縄文が施文され，黄灰色を呈している。鐘崎系統の土器であろう。110は注口状の突起で，彦崎KⅠ式の縁帯文土器であろう。112は浅鉢系土器の底部で，外面は篦磨きし平

第24図　他地区土器実測図(2)



第25図　他地区土器実測図(3)

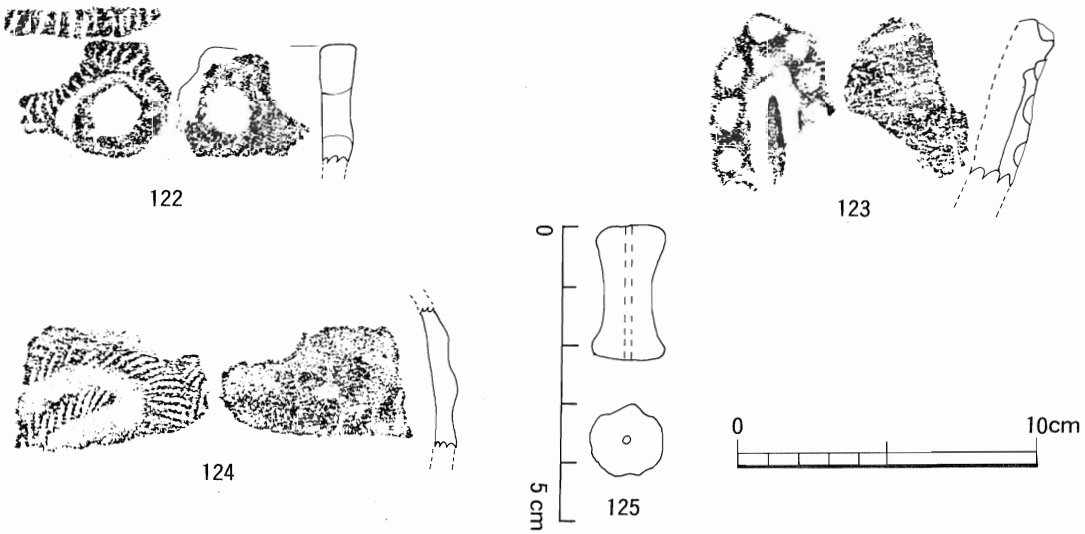


第26図　他地区土器実測図(4)

滑である。文様帯は底部辺まであったらしく，縄文帯が看取できる。内面は精緻な条痕を施し，黄褐色を呈する。113はベタ底に近い底部で，内外とも条痕で調整の後，ナデ仕上げる。外面は灰褐色を呈するが，内面は赤褐色を呈し酸化鉄が付着する。

115～121（第26図）は，H地区から出土したものである。そのうち115・116・118はH1区の３層上面，他は中央トレンチの３層に出土した。115は波状口縁の深鉢土器で，内外とも篦ナデした後，外面に太い大振りな曲線，枠状の沈線を施文する中津式土器。116は頸部で，胴部にかけて条痕地とし，上面の口縁部は有段状に肥厚させ，巻貝を間隔的に押圧する。外面には煤が付着し，内面にナデ調整。117は内外とも板状施文具で調整した土器。118は外面に条痕を施し，浅い沈線で波状曲線を施文する胴部で，内面は条痕調整。120は口縁部の滑石混入土器。外面に煤が付着し，内面は灰色を呈する。121は外面に篦による圧痕を施文する粗製の口縁部。内面は条痕調整の後，ナデ。色調はは赤褐色を呈する。

122～125（第27図）のものは，形状あるいは特徴性から別掲したものである。122は滑石混入の几形をした突起。H2区の３層上面に出土したもので，縁端部に瓜形状の連続文を施し，その中央部分に孔を有する。色調は黄褐色。123は粘土紐による長楕円形に作り出した貼付帯で，その隆帯縁に指頭状の押圧を周行させる。124は，1983年（昭和59年）に本地点での農道施行時に発見されたものであるが，本遺跡の性格を浮き彫りにするために取り上げたものである。その土器は，外面に細い縄文を施した後，指頭状の凹線を長楕円形に施文する。内面はナデで，煤で黒灰色を呈し，外面は赤茶色で滑石の混入はない。このような特徴から「この土器は在地の土器と阿高式系土器の折



第27図　他地区土器実測図(5)

哀土器と考えられ……在地土器としては中津式が想定されよう。」[註3]といわれている。125は，C地区の廃土中に発見された耳栓。長さ2.2cm，端径約1.1cm，中央部の径0.7cmを計り糸巻形を呈する。中心孔の径は0.1cm程度で黄橙色。

石器　石器は全地区で約1,140点が出土し（第7図），その石材は讃岐岩（サヌカイト）が最も多く使われているが，ここでは物質鑑定していないものの，さらに黒色で緻密なものをガラス質安山岩といい，そうでない灰色のものを安山岩と称することにした。また姫島産と思われる乳白色の黒曜石491点，黒色は20点が出土し，そのほか貢岩，青白珪石（チャート），砂岩，水晶などであった。

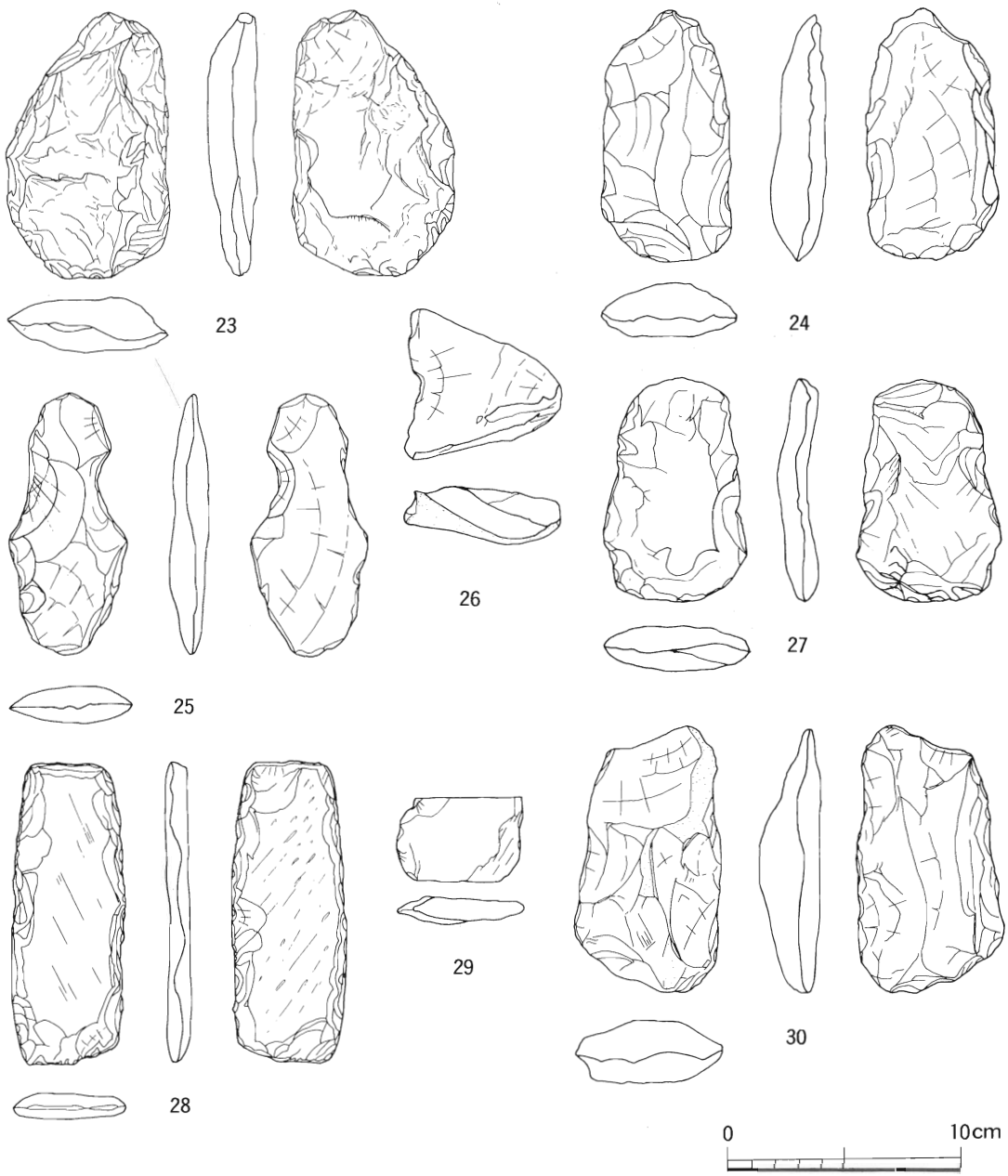
23～30（第28図）は，A地区から出土したものである。客土から出土した23は，安山岩製の打製石斧。縁辺から大胆に加撃するが，乱節理のため片形状を成す。26は，打製石斧等の製作時の砕石であろう。25はA2の3層上面に出土した打製石斧。石材は安山岩で分銅形を呈する。28はA－1区の3層下位に出土した貢岩質の打製石斧。四周を丁寧に階段状剝離を加えた短冊形。器長12.7cm，器幅4.8cmを計る。30は安山岩質の打製石斧。

31（第29図）は，B2区の2層（客土）に出土した打製石斧。石材は安山岩で，背面に自然面が残り，腹面に弧状を成し下端部は折損する。

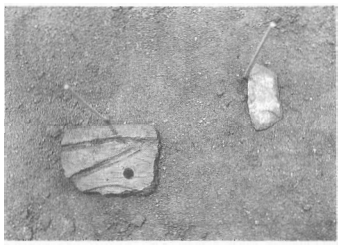
32～34（第29図）は，C1区に出土したもの。そのうち32・34は，C1区－S101遺構の3層上面に並行して出土した（両斧とも刃部を南東方向）。32は安山岩質の乳棒状磨製石斧。断面は楕円形を呈し，頭部は細く，刃部は蛤刃を呈する。基部は細かい打裂を加え成形する。器長13cm，器幅6.2cm，器重351g計る。33も安山岩質の乳棒状磨製石斧。器長15.2cm，器幅4.8cm計り，刃部に腹面に向って大きな単一打裂が入る。基部に細かい打裂を加え成形し，1側面部に擦切痕がみられる。器面には酸化鉄が付着する。34は，ガラス質安山岩の横形石匙状石器。石匙にしては器厚が形状に比べて1.8cmと厚く，整形が全体に粗製である。しかし，つまみの弧状部分，先端部分に整形調整がみられる。

35・36（第29図）は，D地区に出土したもの。そのうち35は，D2区の3層上面から出土した乳白色の黒曜石で，長径7.8cm，短径6.7cm器体は半楕円形を呈するが，丁寧な縁部整形はみられず，石核石器か。36は，ガラス質安山岩の石核。腹面に両側面からの加撃によって，数次の弧状の剝離面を成す。背面は角閃石斑晶安山岩特有のギザギザした自然面である。

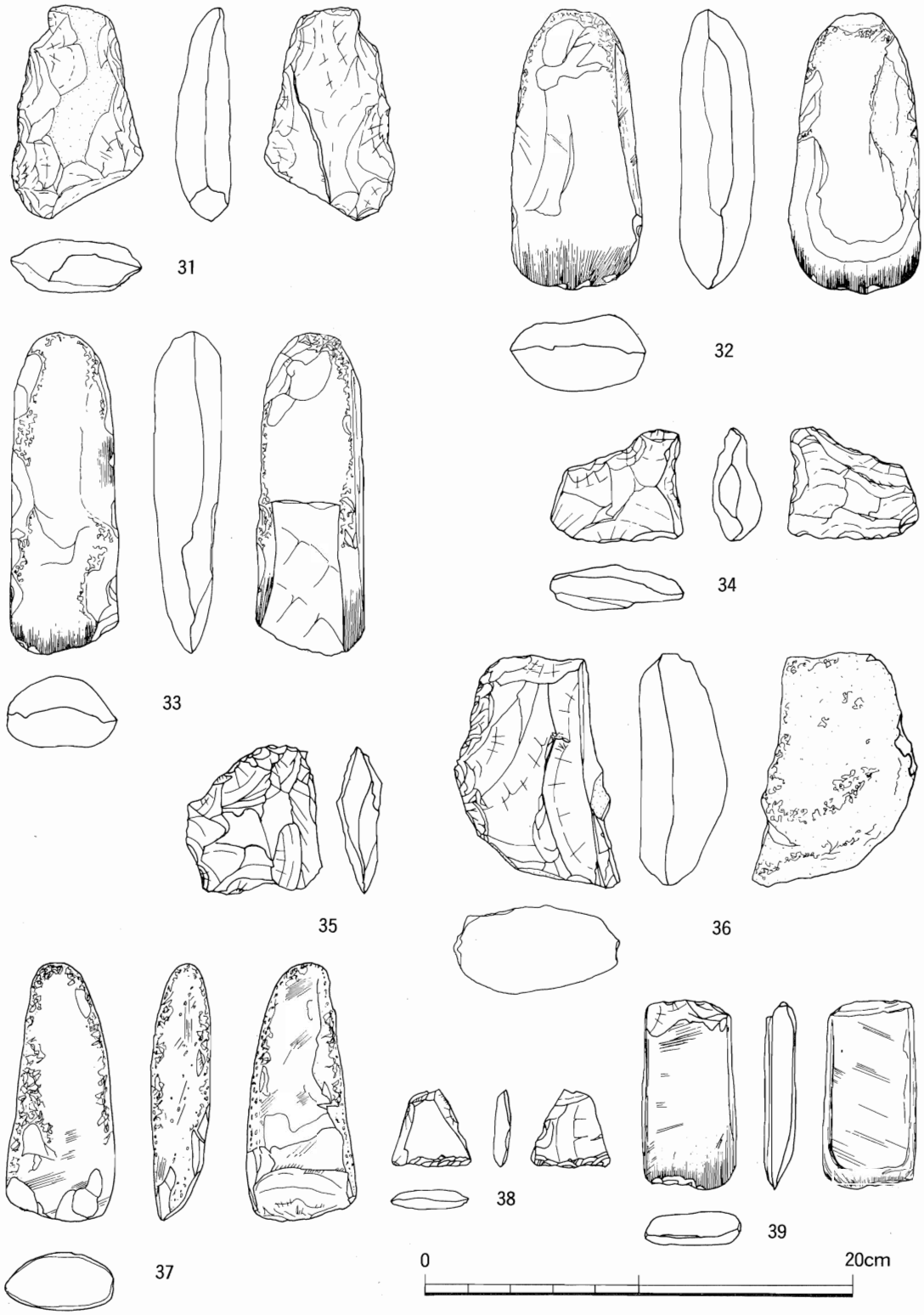
37～39（第29図）は，E地区の2層（客土及び河床礫層）に出土したもの。37は橄攪岩質を含む安山岩で，乳棒状を呈する石斧。刃部は腹面に向って欠損するが，基底部は丁寧な打製を加え成形する。また腹面には扁平状を成す節理面が残り，その裂痕がみられる。38は，ガラス質安山岩による台形様石器。両端を欠断し，縦位の端部に階段状の極浅形細部調整を施す。器長3.8cm，刃長3.6cm，器幅0.8cmを計る。39は，E2の2層（客土，河床礫層）に出土した擦切石斧。石材は扁平状に節



第28図　他地区石器実測図(1)



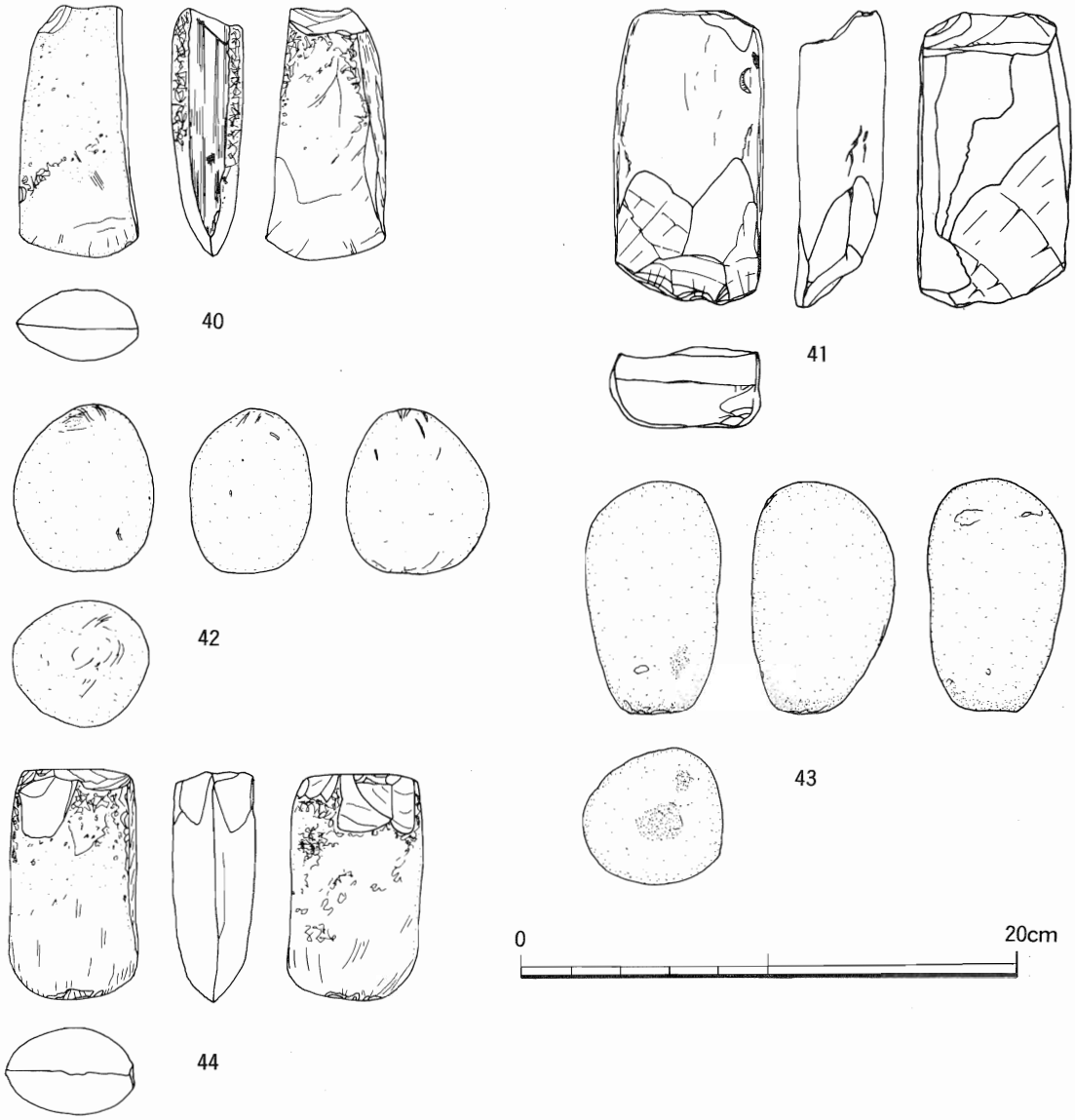
土器・石器出土状況



第29図　他地区石器実測図(2)

理を持つ貢岩。背面の鎬部分は長めに深く研ぎ出すが，腹面は短く片刃を呈す。形状は定角式で，他にも数点出土しており，中には撥形もみられる。

40～44（第30図）は，F1区の２層，３層上面から出土したもの。そのうち40は，２層から出土した安山岩質の蛤刃石斧。片側縁は磨かれ，背腹の両面は細かい打裂を加え成形している。41は未完成の石器。石材は安山岩質で，石斧等の製作過程のものであろう。42・43は敲石。いずれも砂岩質の礫石を石材とし，43は敲点が顕著である。44は安山岩による磨製石斧。

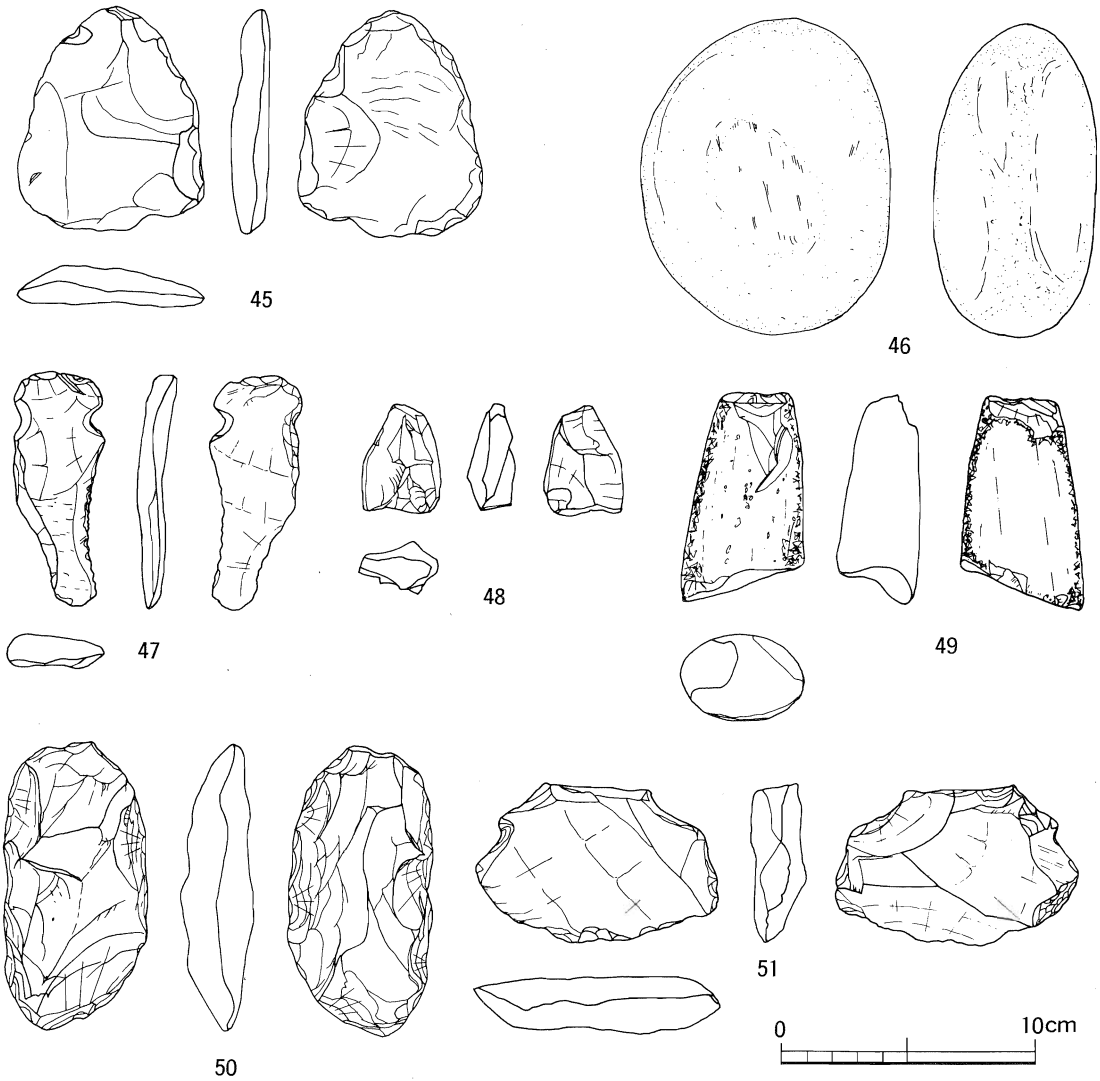


第30図　他地区石器実測図(3)

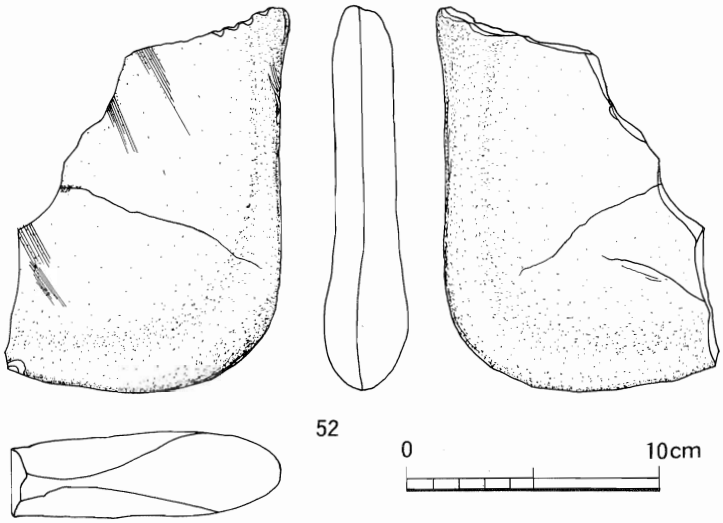
45～51（第31図）は，G1区の２層及び３層上面に出土したもの。45は石篦状石器。46は河原石を使った磨石。47はガラス質安山岩製の縦形石匙。つまみ部分が大きく，側縁は横剝ぎによって得られた稜線面を利用して剝離調整する。48はチャートの砕片。49は刃部が欠損した石斧で，基部は丁寧に打裂を繰返し整形する。50は安山岩製の打製石斧。稜が偏在するため，側縁部の剝離面が深形，浅形とに粗形調整されている。51はガラス質安山岩による削器。

52（第32図）は，G1側の中央トレレンチの３層中位から出土砂岩質の凹石。背腹の両面は使用による凹状をなし，半折する。また半折面の一端は，使用した数次の細かい極部擦痕が確認できる。

53～55はG2区，56はH1区に出土したもの（第33図）。そのうち53は，３層上面に出土した安山



第31図　他地区石器実測図(4)



第32図　凹石実測図(5)

岩質の石皿。器長35cm，半失した最大器幅18.5cm，器厚５cm，重さ60.5kgを計り，ほぼ扁平である。背面の中央部は凹状を成し数次の擦痕，腹面は平坦に調整した剝裂痕が認められる。54は柱状の敲石。器長24.5cm，器幅3.8cm，器厚2.8cmを計り，両端部に擦痕，基部には傷痕が確認される。石材は砂岩。56は，H1区の３層上面に出土した石篦状石器。石材は安山岩質で，背面には自然面が残り，凸状部の一端を打裂して整形する。腹面は単打で粗形した後，側縁から剝離調整を加えている。

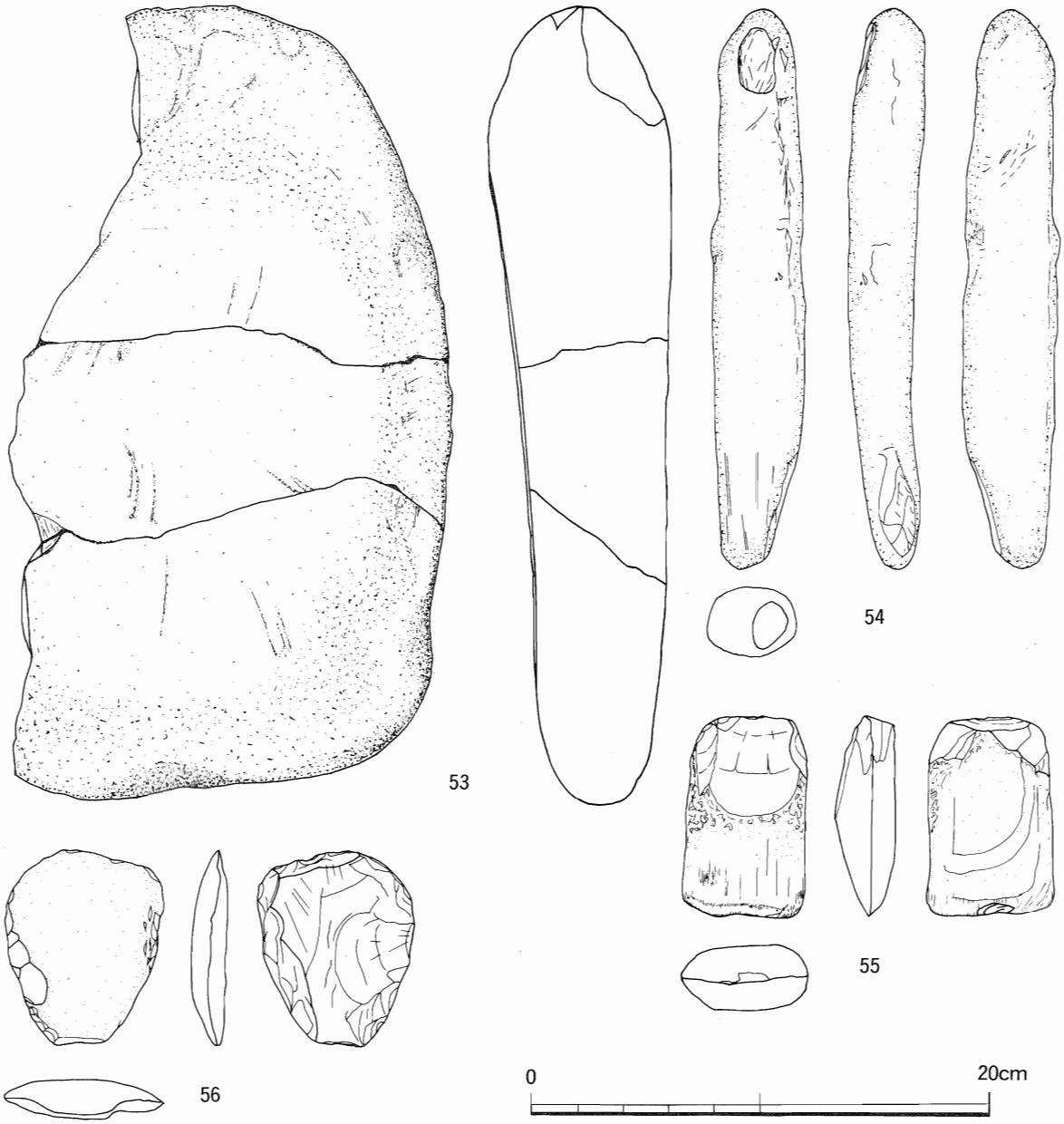
（渡辺友千代）

註

註１　田中良之　1979年「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』６　（九州古文化研究会）

註２　田中良之　1979年「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』６　（九州古文化研究会）

註３　足立克己　1987年「山陰石見地方における縄文後期前～中葉土器について」『東アジアの考古学』中



第33図　他地区石器実測図(6)

第6章　総　　括

今回の調査面積は1,300㎡におよぶものであったが，調査の中途に保存の話かの持ち上がり，最終的には町が買収保存したため，F2区以外は完掘していないのが現状である。したがって調査は予想外の早さで終ったといえるとともに，石ケ坪遺跡が“残った”という喜びは大きい。その“残った”（残された）理由付は，多岐にわたっていると考えられるが，調査を担当した者として気付いた数項について指摘しておきたいと思う。

1．住居跡

まず第一に指摘できることは，竪穴住居，貯蔵穴，土壙，柱穴等の一群性をもった遺構が具体的に検出されたことであろう。斎場（墓地）と明言はできないが，殊にF2区の集石遺構等は最たるもので，今後，下層面への詳細調査が必要且つ期待されよう。また15,000点という多量の出土遺物からは，形式学的方法で，ある程度の時間的物差しができた上に，しかもそれらの遺物が遺構に伴う一括遺物とて限定できるものが多くあった。このことは，つまり遺物年代イコール遺構年代ということになり，これらの遺構が時期的限定性をもつものとして意義深いことであった。

本遺跡で住居跡と確認されるものは，A，C1，C2－D2，D1－E1，F2の各地区に検出されているが，他にも下層面に数跡が想定できる。F2区での竪穴住居跡は，長軸8.6m，短軸7.6mの楕円形プランを成し大型住居といえる。このような大型住居が本遺跡の中でも特異性のものかというと，時期を異すると想定されるA地区内の住居跡は別にして，およそ同様なプランを呈しているため，本遺跡での1つの傾向として捉えることができよう。またF2区でその構造についてみるならば，その特徴は，主柱を二重構造とするパターンであったことが想定できる。大型住居であったため，恐らく内側をめぐる主柱は，外周する主柱を支持した柱であったものであろう。こうした構造パターンは，C2－D2のSIでも確認されている。またF2区の住居プランでみられる北東面の有段状の壁体は気になる。いかにも意識的に作造したように，壁体の両側に沿って溝状に掘り込み，有段させている。そしてその壁体上には，柱穴らしきピットがみられることから，住居の拡張跡とも受け取られるが，床面を修復していないのは何故なのであろうか。

2．中津式土器と並木式土器

土器は，本遺跡から出土した遺物のうち84％を占め，中には遺構から一括出土したもの，あるいは器形がわかる大片も多い。しかし，河道の流走にみられるように，上層面には遺物の摩耗，移流

等によって出土位置とはそぐわないものもあり，資料価値を乏しくしているものもあった。ただし，旧河道と想定される以外は層序は明確であり，遺構も砂質性にしてはしっかりし，遺構・遺物の同時性として捉えることができたことは大きな成果であった。これらのことを前提に，以下，中津式土器と並木式土器との問題点を指摘しておこう。

もっとも多く出土した土器は中津式であり，全体の約1/5を占める。深鉢形土器は胴部がややくびれ，口縁部は内湾ぎみで波状口縁の形態をとる。施文は沈線のみのも多く，その沈線は深浅の別があって，深いものはおよそ太めで狭いという傾向があるようである。また浅い沈線は沈線間が広く，第17図25のように，擬似縄文のものもある。また，その中津式に連続するという幅施３本沈線の福田KⅡ式は，意外に少なく，宿毛式として捉えられるものが数としては増し，口縁部に直線などを集中させた縁帯文系の彦崎KⅠ式・津雲A式が優越してくる。また，小さな突起や橋状把手，渦巻文を半円弧で囲んだもの，つまり鐘崎式系と呼ばれる土器が比較的出土している。この鐘崎式の器形は，第16図11・第17図19に図掲したように，短く外反するという特徴がある。

こうしてみていくと，本遺跡の盛行期は中津式の多出にみられるように，中期末から後期初頭にあって，そして後期中葉で盛り返し，その後一旦は中絶するものの，A地区を中心に後期後半から晩期初頭にまた出現するという大枠で捉えられることができる。しかし問題となるのは，中津式に次ぐといわれる福田KⅡは少く，むしろ後期中葉に位置付けられている彦崎KⅠと並行する鐘崎式，あるいは沈線を多用する小池原上層式などの九州系が多出していることである。中でも凹点文を施文とする坂の下式のように，阿高式土器から派生した南福寺系との類似性，つまり中津式と後期初頭における九州系との関連性とが問題になる。また滑石混土器のうち，特に多出した中期前葉の並木Ⅰ・Ⅲ式との間隙をどう扱ったらよいのであろうか。確かに，中期中葉から後葉にかけての阿高Ⅰ・Ⅱ式と呼ばれる“文化”は，第22図124に図掲しているように，中津式“文化”との相会で醸成された証拠がある以上，前者の問題は解決できるであろう。が，後者の問題は中津式系との時期差が余りにも間隙で吹き切れない。ならば本遺跡における文化層との複合ということになるが，現調査段階でみる限り，その並木式と中津式との関係は，遺構内において混在し共存遺物として捉えることができることから，やはり問題の解決とはならないのである。

3．打製石斧

本遺跡で出土した石斧は99点で，そのうち11点の大半は基部に丁寧に打裂を加え成形した局部磨製石斧である。この数点の中には擦切で成形し，顕著なものは掲図の第29図39にみられるような擦切石斧も出土した。残りの88点は打製石斧で，石材は安山岩である。その形態は撥形が最も多く，次いで短冊形，分胴型の１点の順で出土しており，そのうち1/2は腹面に向って弧状を成している。

こうした打製石斧は，どのような用途に使用されたものであろうか。確かに腹面に弧状を成す形態からは基端部に柄を着装し，鋤状に使用したことを連想させるが，用途については今一つわからない。中にはこれらを石鍬として捉え，農耕論説も出されているが，結論には至っていないのが現状である。むしろ採集を基調とした生活上の立場から，根茎類等の掘削具としての土掘具が指摘されているようである。しかし，その論拠も吹き切れないものがある。それは根茎類の掘削に使用したものと考えるならば，作業中欠損した場合，その折損片を持ち帰ったのであろうか，余りにも住居至近に多出し過ぎるのである。また竪穴等の柱の掘削等の使用とも考えられるが，やはり88点は多いようである。これらの問題をどう捉えるか，ということについて間接的にその解明の一端を窺わせる資料がある。それは第21図５，第21図14，第22図15に図掲したような石匙形石器である。こうした形状のものは，本遺跡で６点出土しており（石匙は別にして），その技法は横剝ぎを多用する。また，第21図５，第22図15のように，そこには石匙でいうつまみという意識の技法は認められないことである。それらのことを踏まえ，これを石包丁の前身として捉えるならば，穂摘具とも解され，それは農具とみることができるのである。つまり多出した打製石斧は，石匙形石器と絡めてみてゆくならば，そこには屋外で農具を振るう縄文人たちの生活が浮び上ってきそうである。

（渡辺友千代）

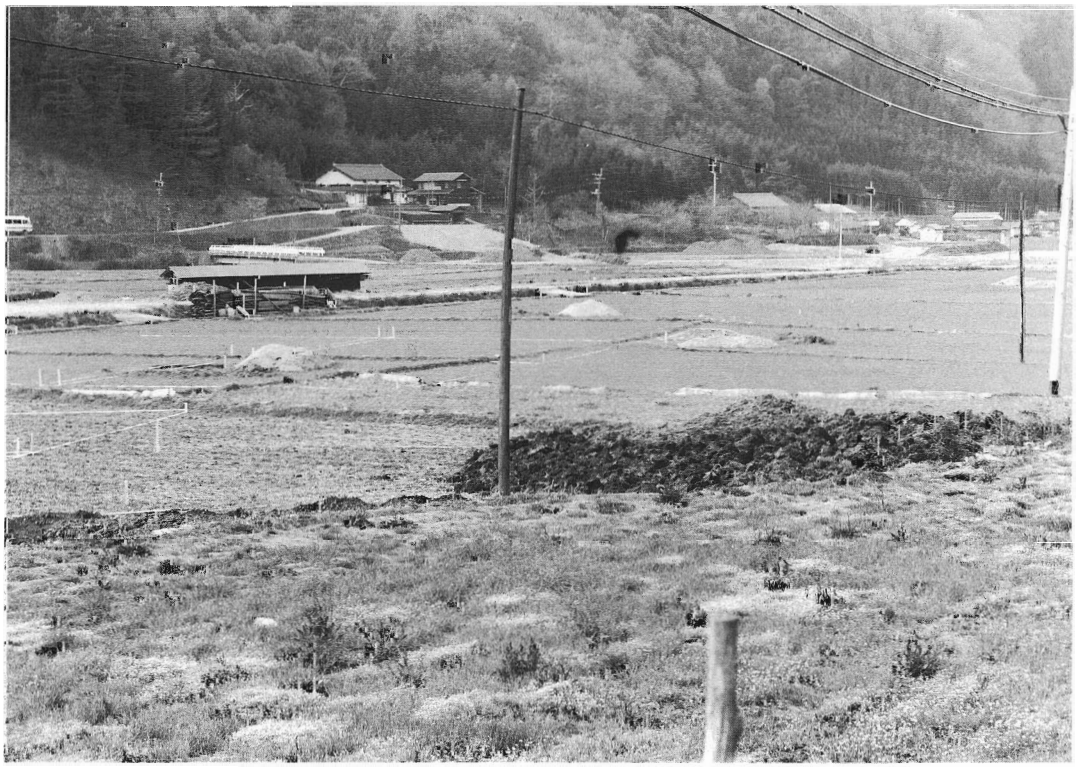
参考文献

田中良之　1981年「阿高式土器」『縄文文化の研究』４　（雄山閣）
田中良之　1979年「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』６　（九州古文化研究会）

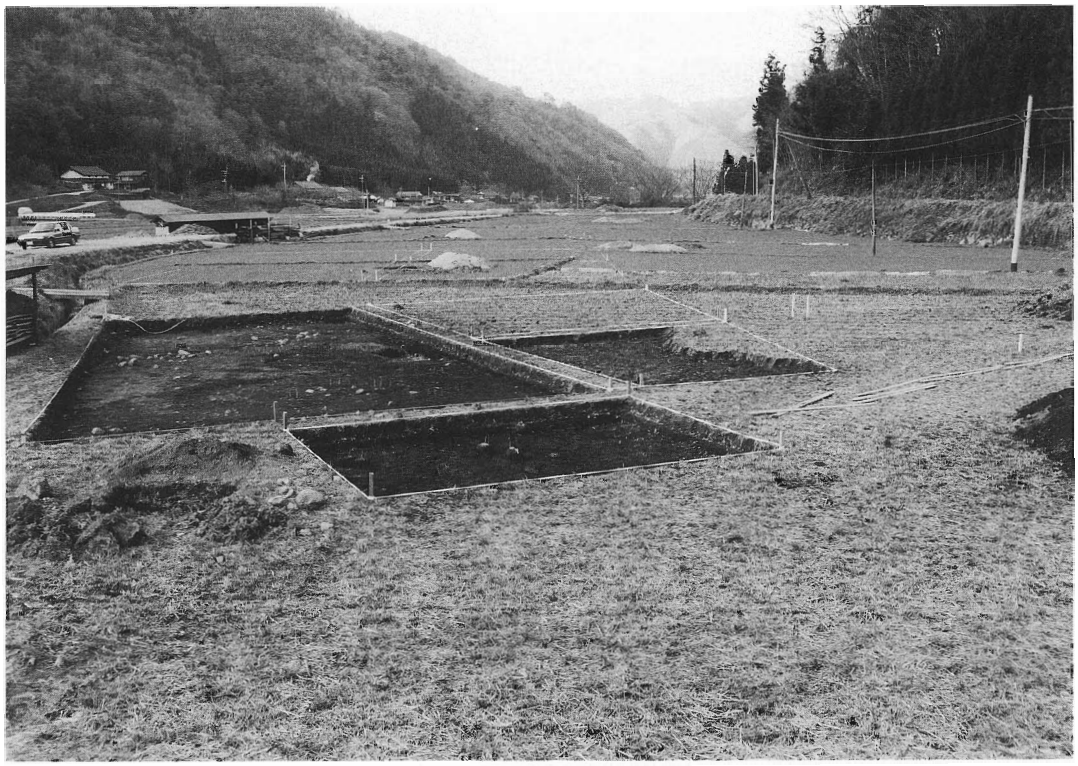
１．石ケ坪遺跡と周辺地形の鳥瞰

図版 2

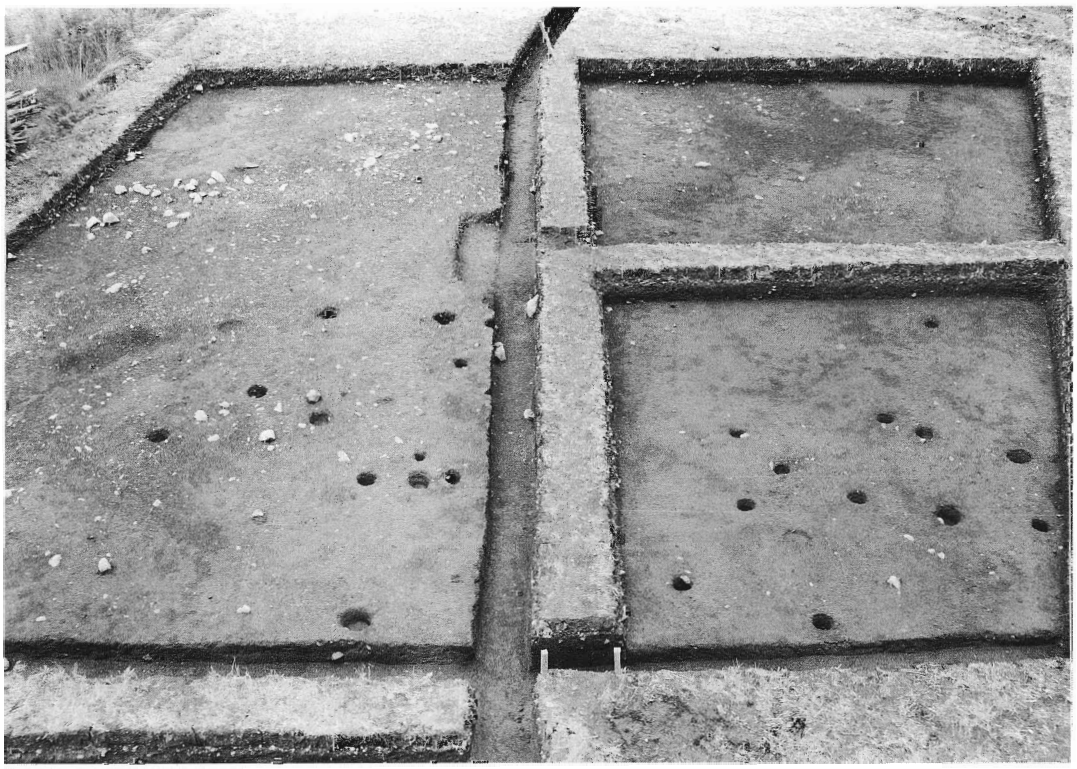
1．遺跡遠景（手前は紙祖川・北から）



2．発掘調査前の全景（南から）



1．調査開始時のＡ地区（南から）



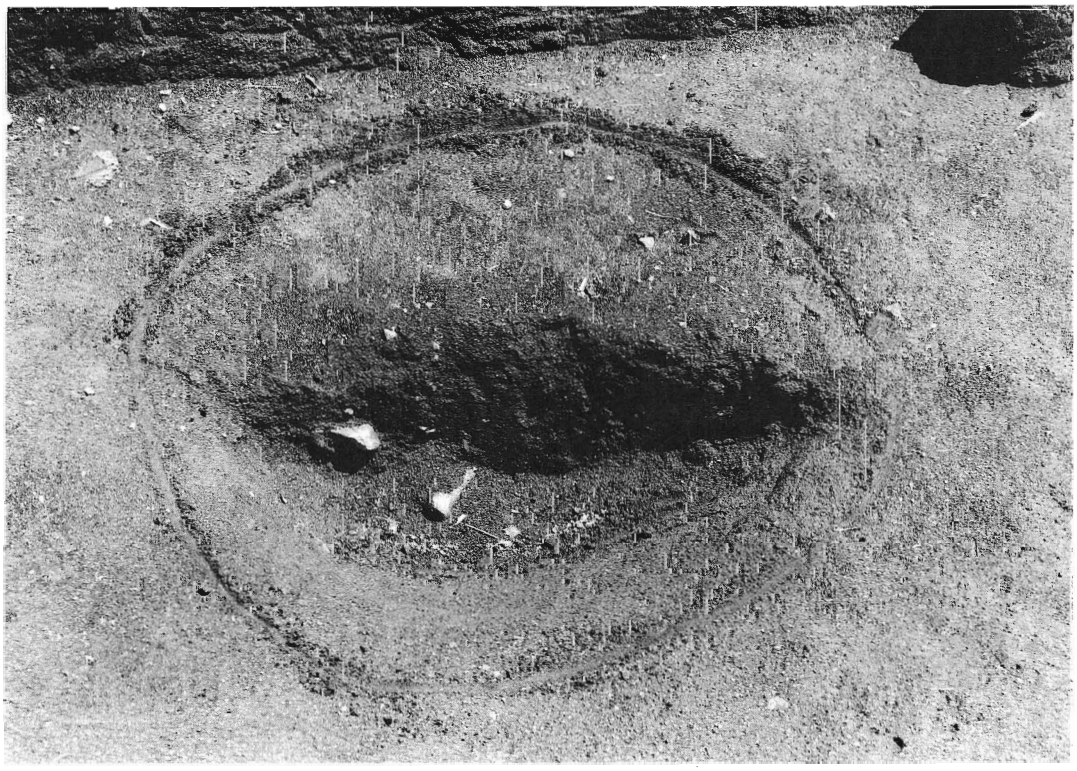
2．Ａ地区のピット群

図版 4

1．東北東に流走する旧河道とＢ地区以下の調査区

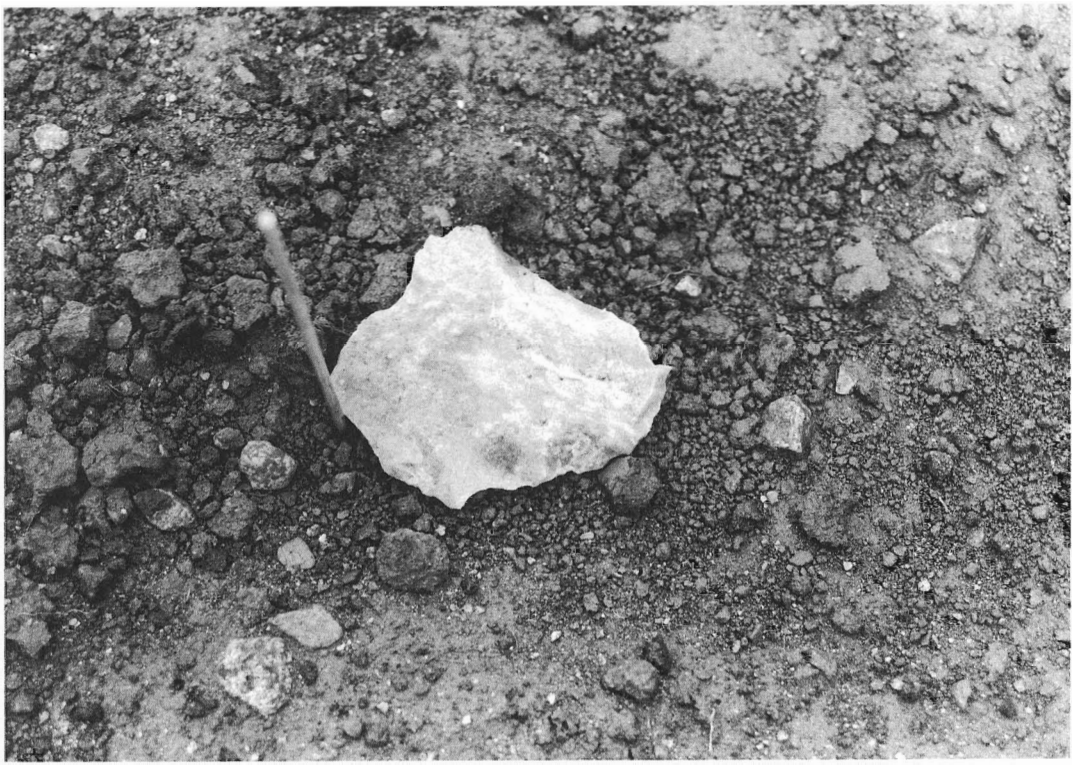
2．Ｃ１区の河床礫の露頭

1．石囲炉検出状況（C１区）



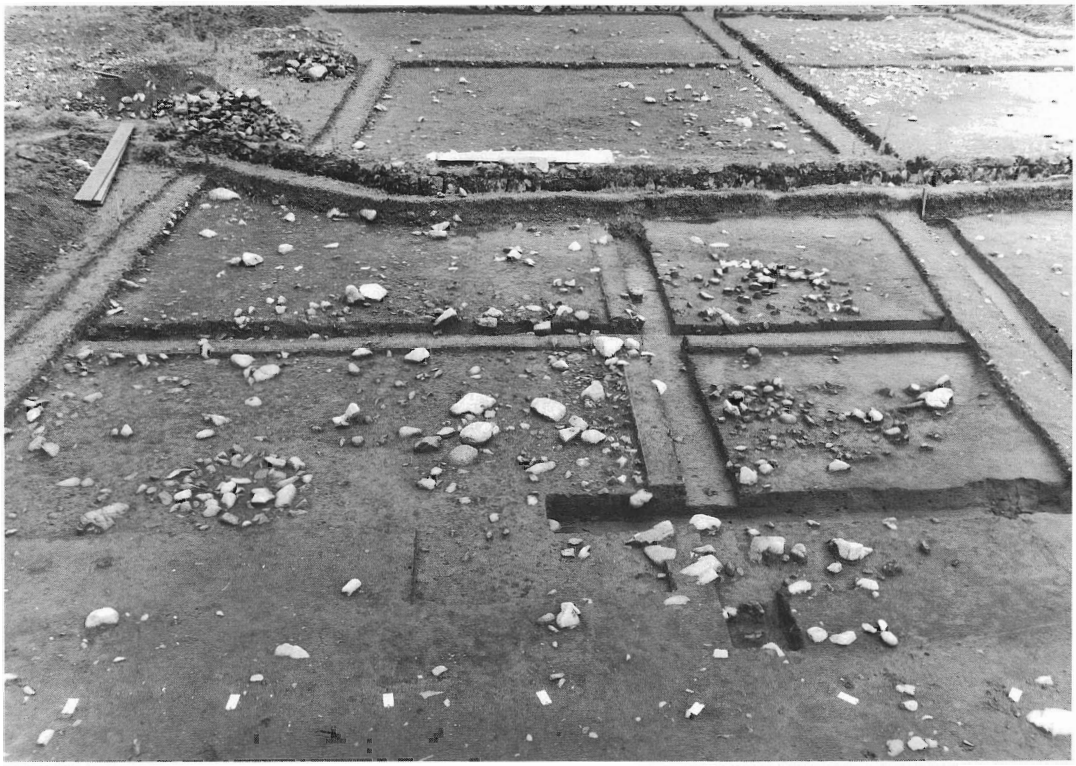
2．土壙検出状況（C2区）

図版 6

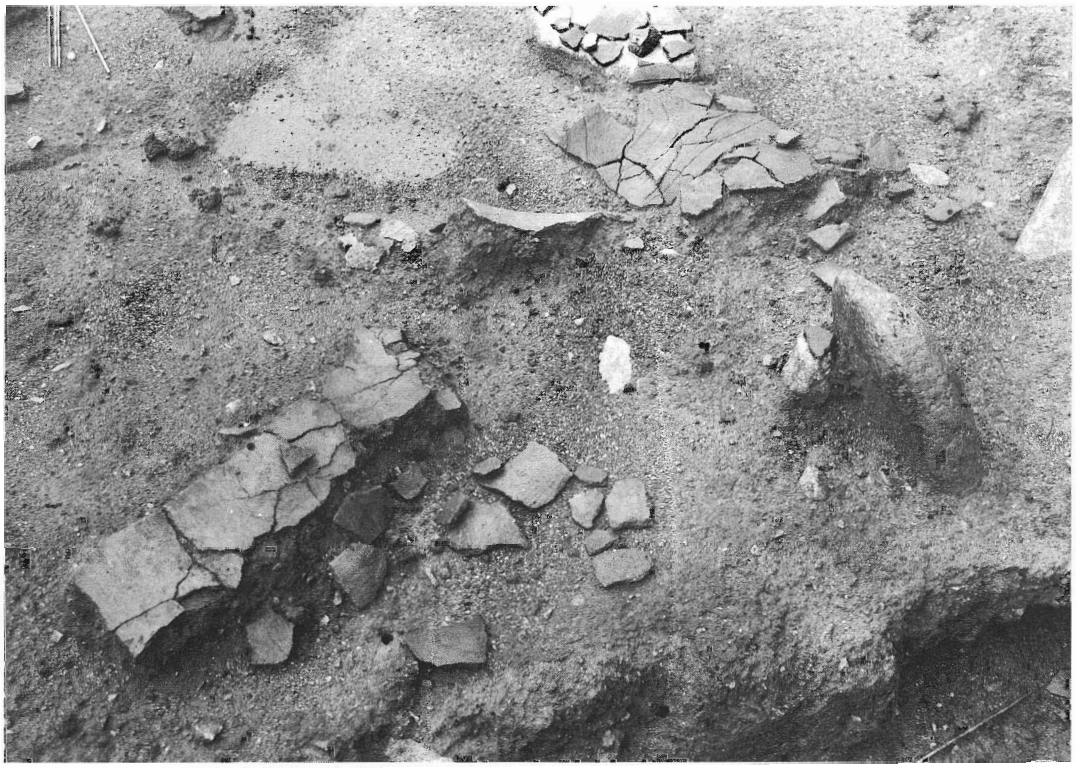


1．乳白色，黒曜石出土状況（D2区）

2．滑石混入土器出土状況（E2区）



１．Ｆ２区の３層上面状況（北東から）



２．土器出土状況（Ｆ２－ｂ）

図版 8

3．集石遺構検出状況（北東から）

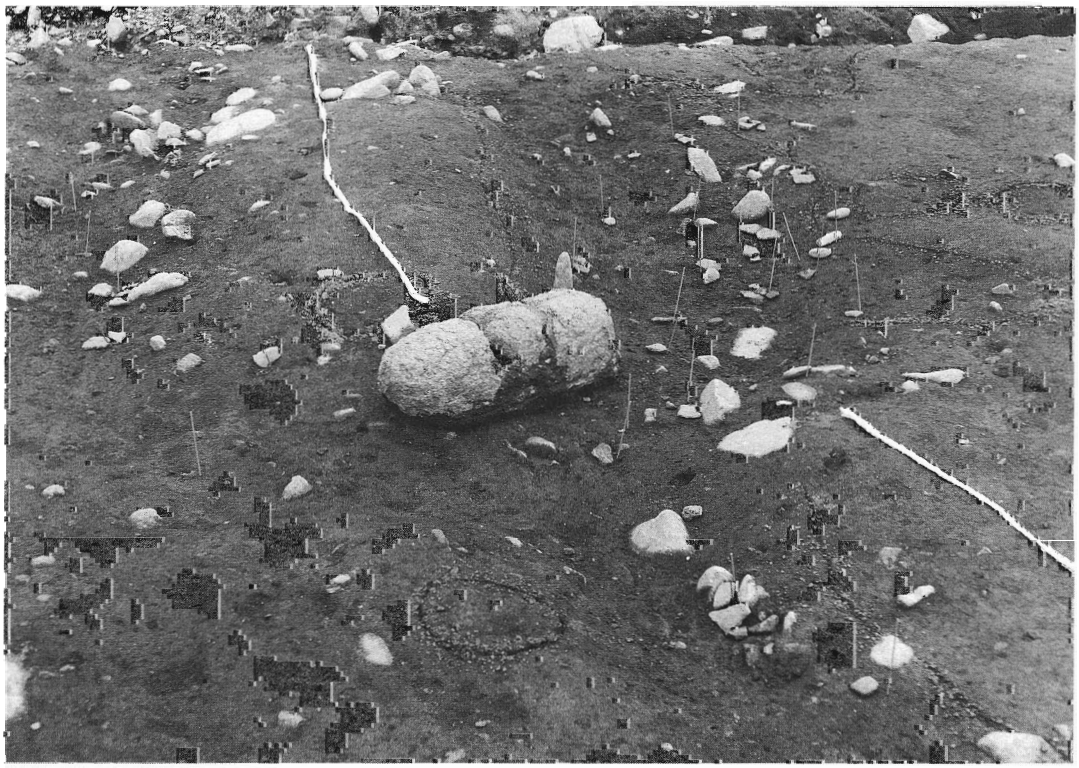
4．集石遺構検出状況（北西から）

５．Ｆ２－Ｃの出土状況（焼石も散見される）

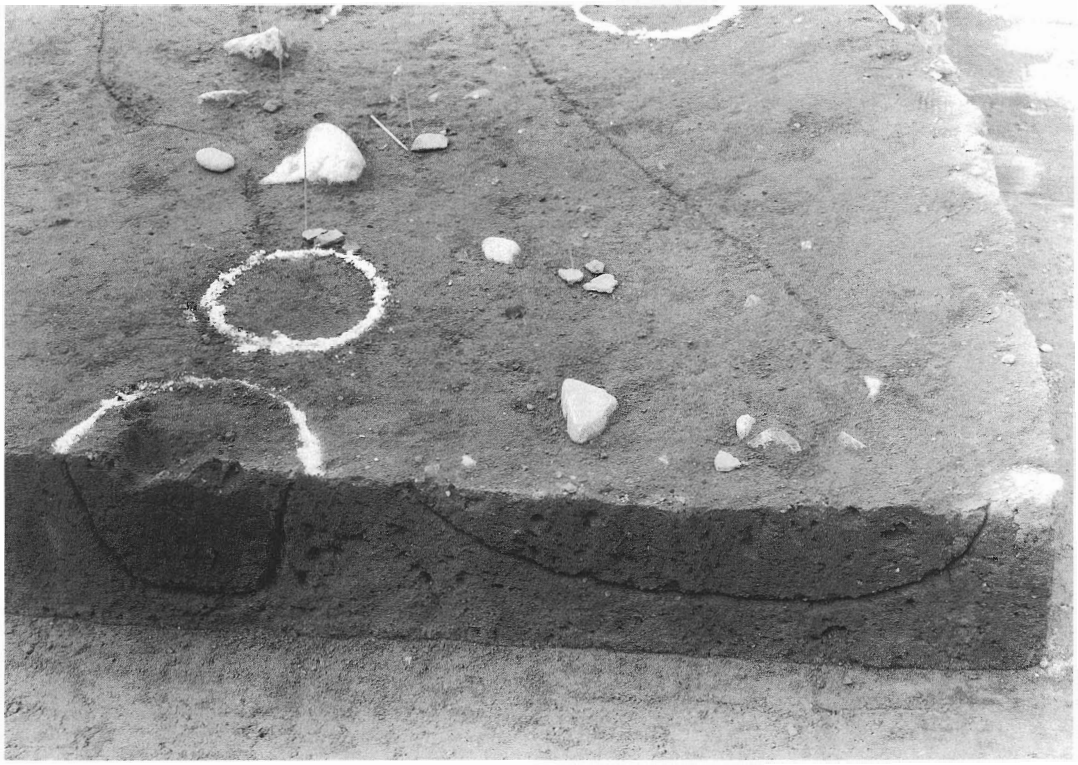
６．トレンチを挟む石囲炉（Ｆ２－ａ）

図版10

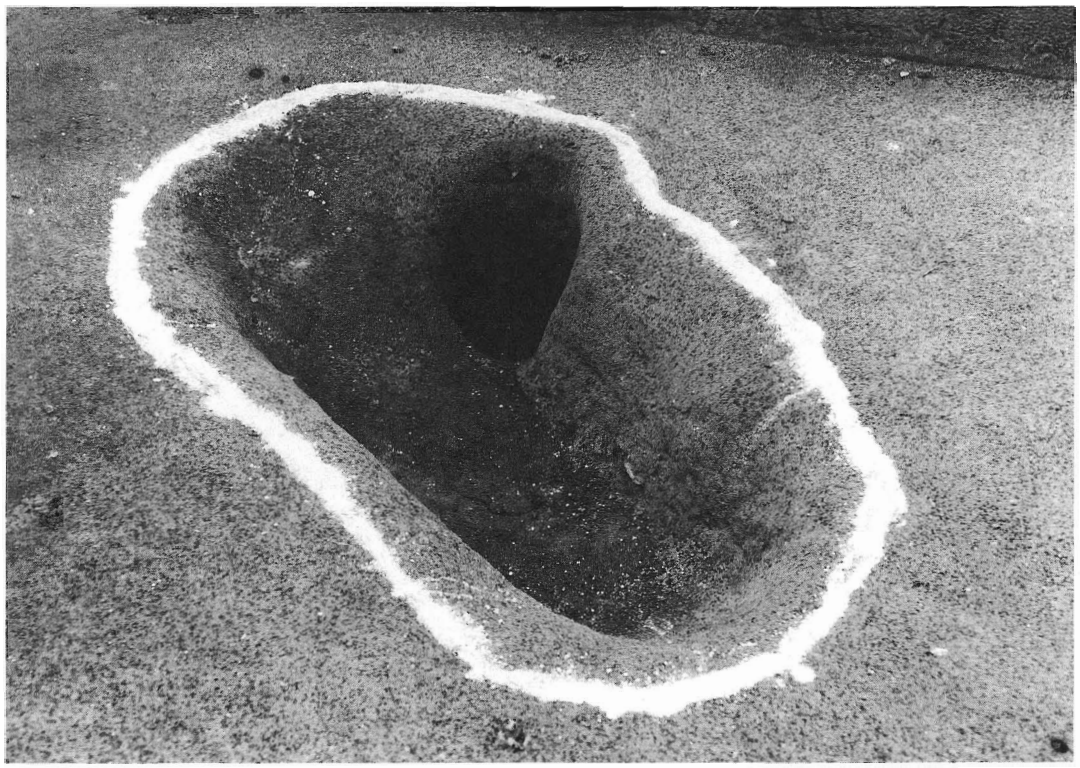
7．Ｆ２－ｄの土壙検出状況（SK07）



8．立石と周堤（？）を周行する溝状土壙



9．トレンチに検出された陥ち込み（左P29・右SK05）

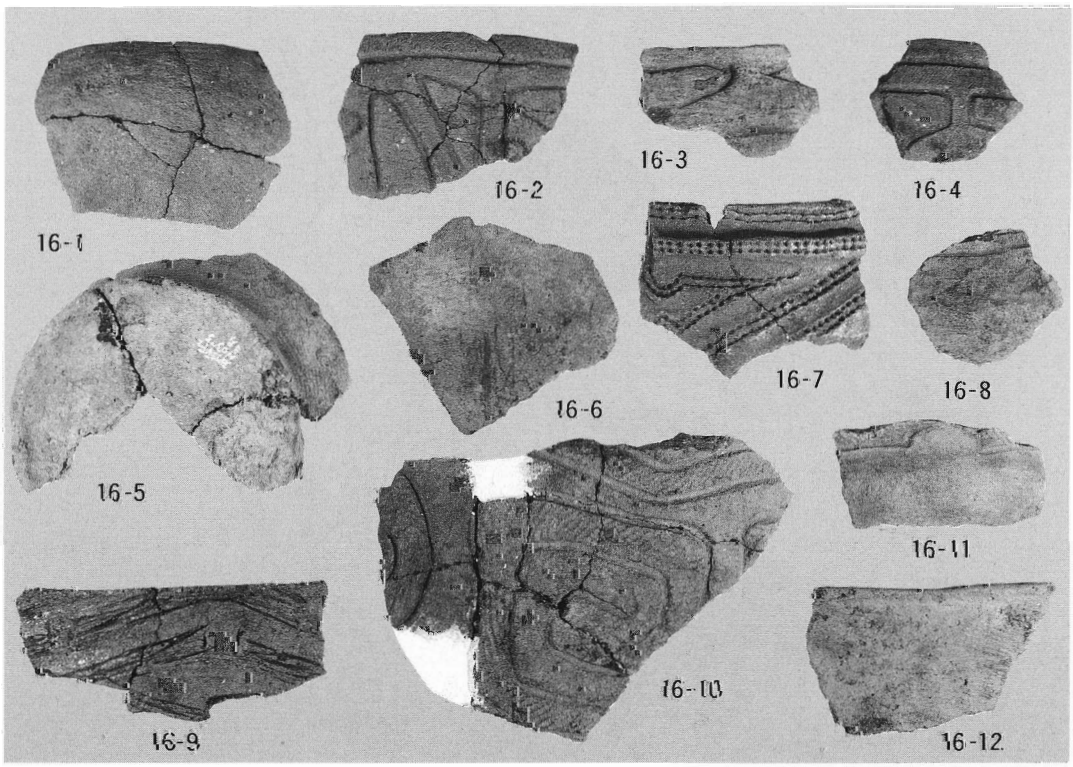


10．土壙内のピット（SK06・P28）

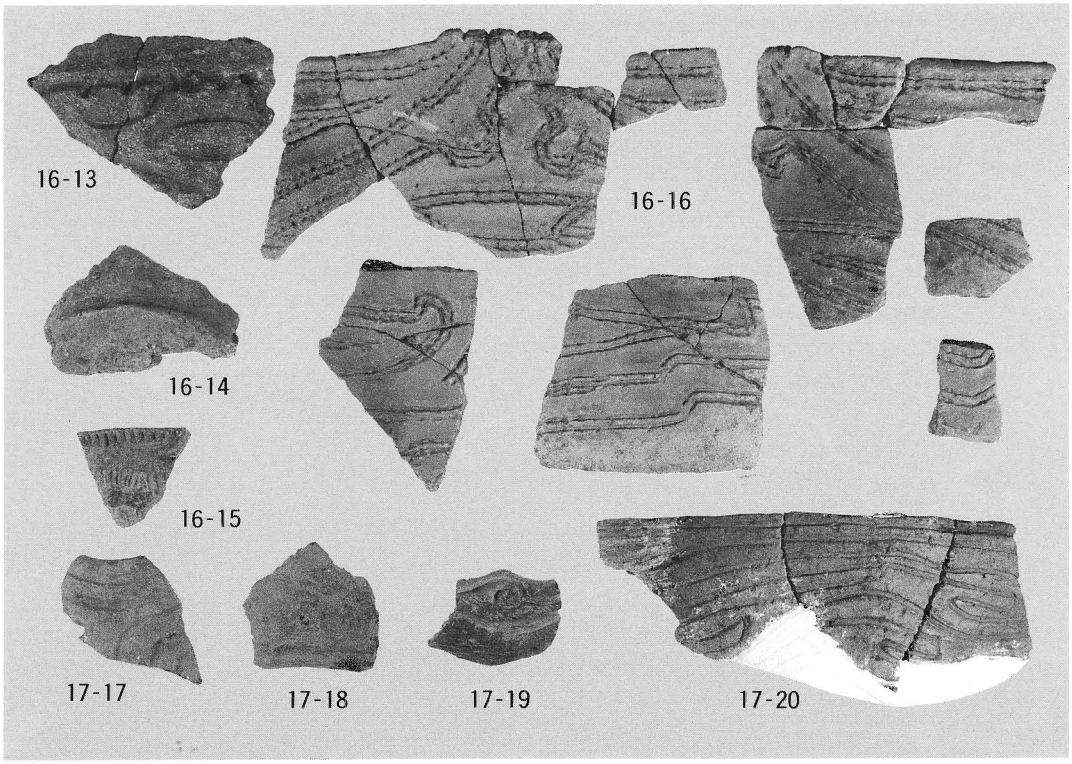
11．Ｆ２区の３層下位の状況（北東から）

12．Ｆ２区の遺構検出状況（北東から）

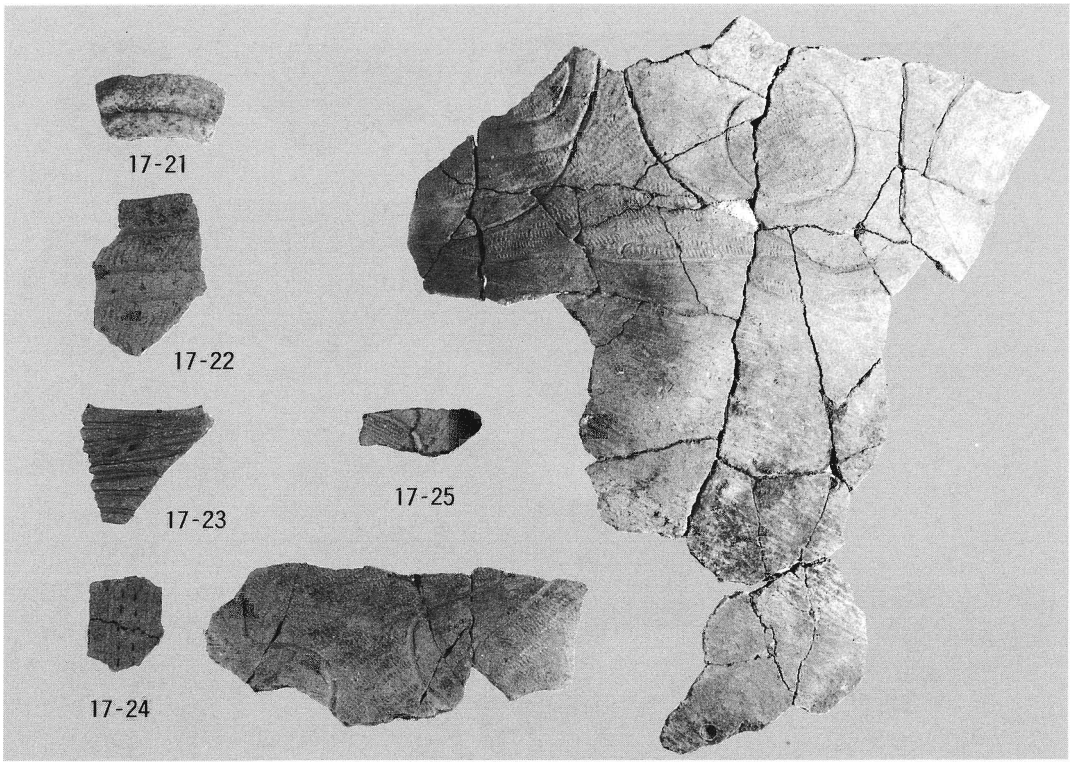
13. F2－C・F2－bの遺構検出状況（北東から）



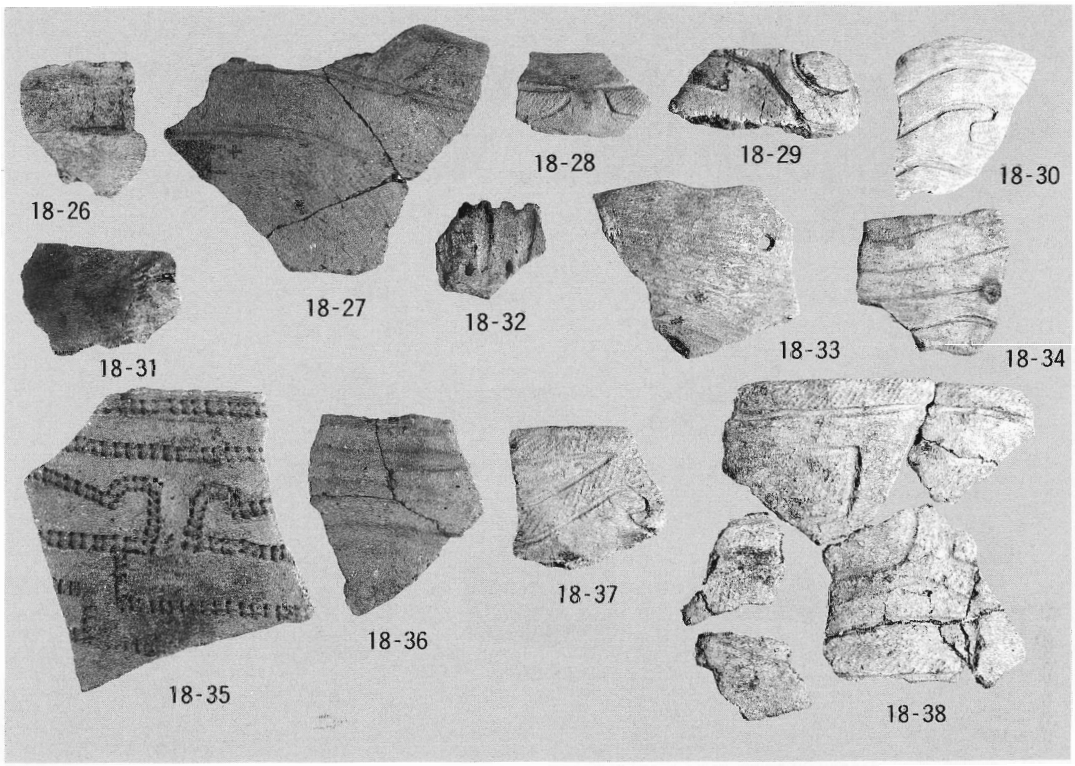
1．縄文土器


16-13
16-16
16-14
16-15
17-17
17-18
17-19
17-20

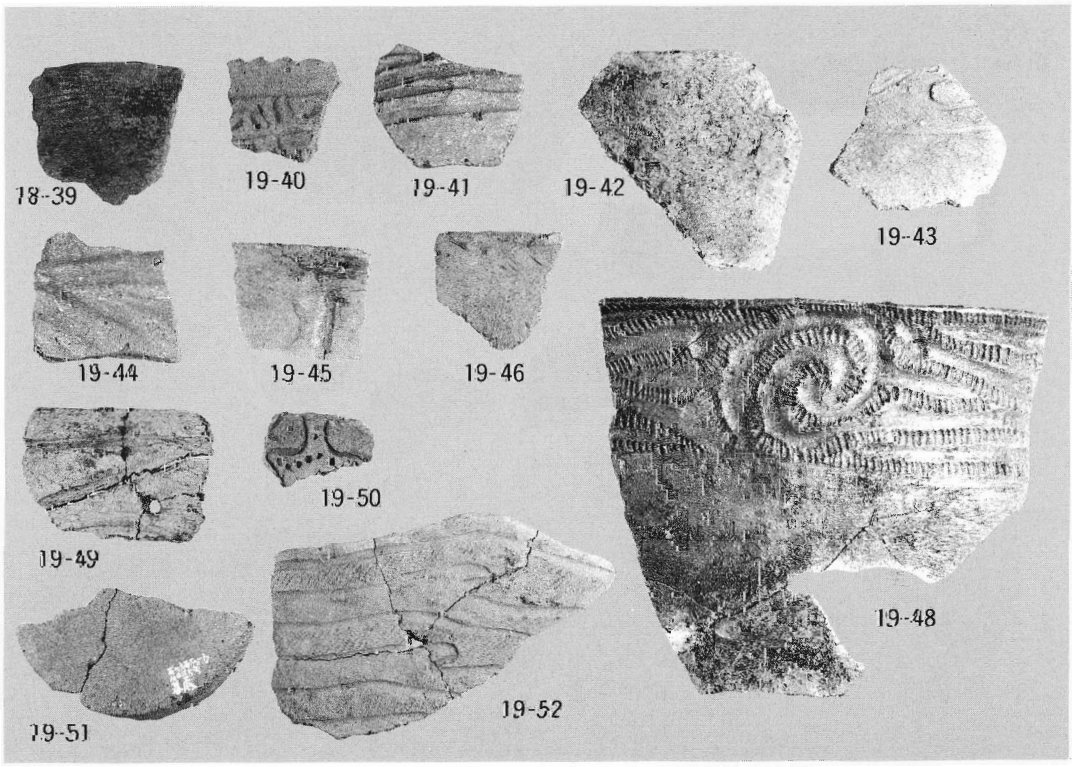
2．縄文土器


17-21
17-22
17-23
17-25
17-24

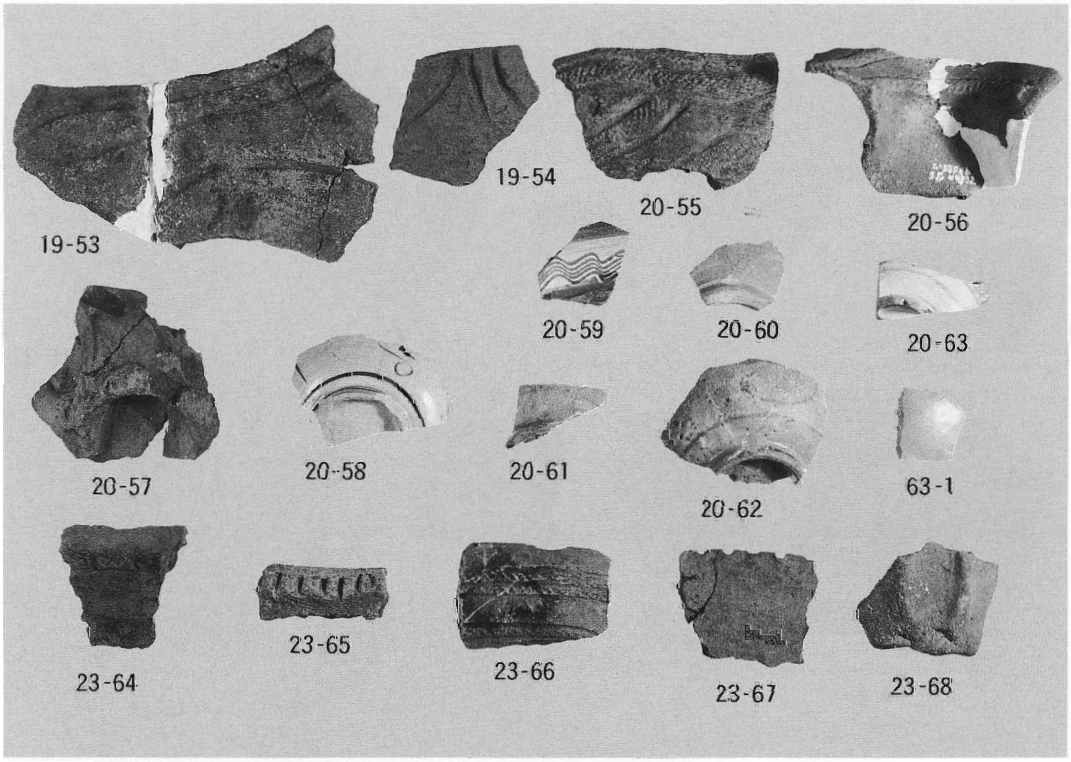
3．縄文土器


18-26
18-27
18-28
18-29
18-30
18-31
18-32
18-33
18-34
18-35
18-36
18-37
18-38

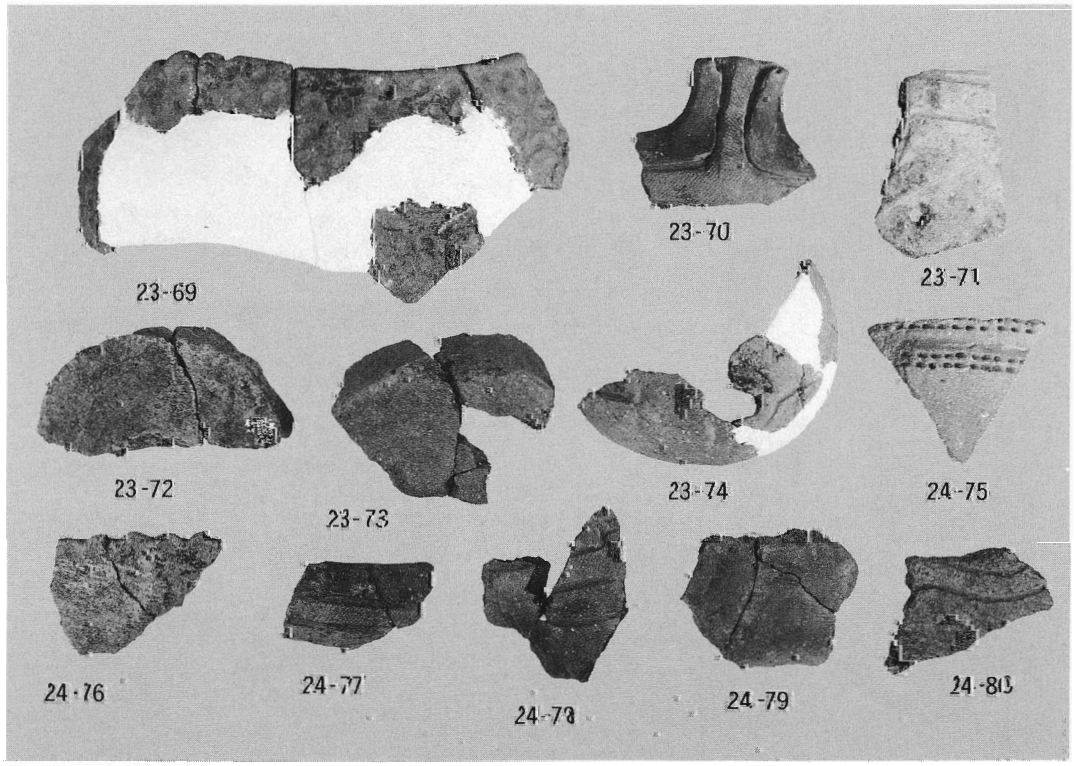
4．縄文土器


18-39
19-40
19-41
19-42
19-43
19-44
19-45
19-46
19-48
19-49
19-50
19-51
19-52

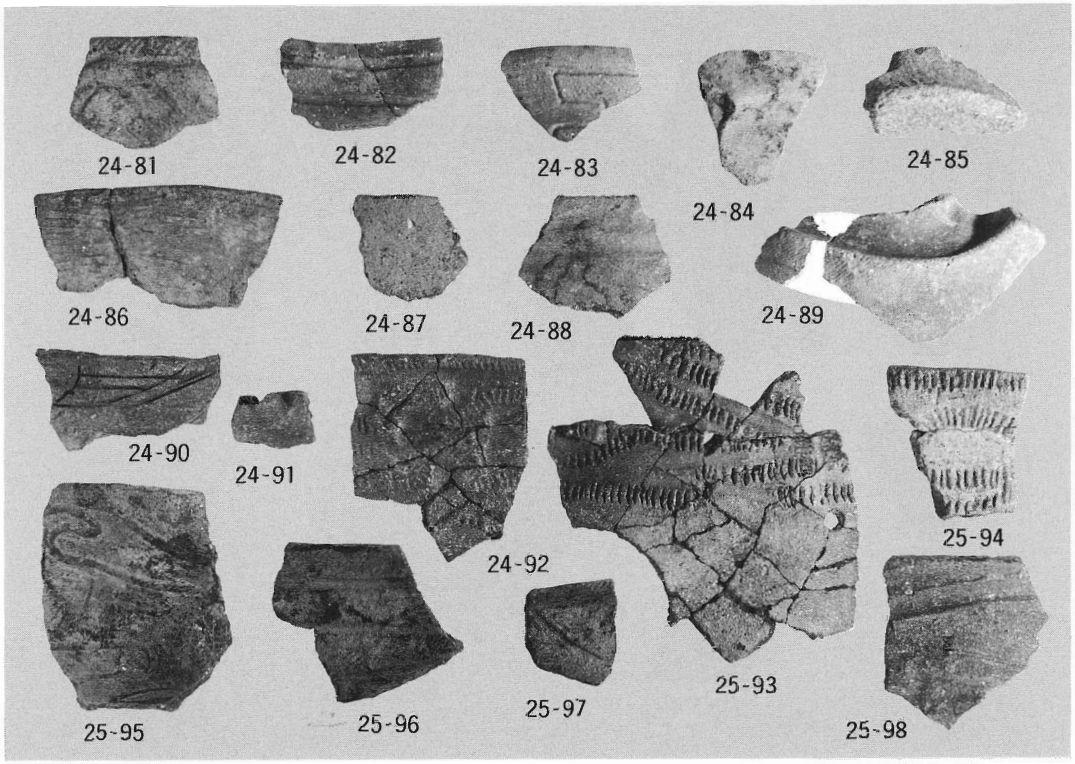
5．縄文土器



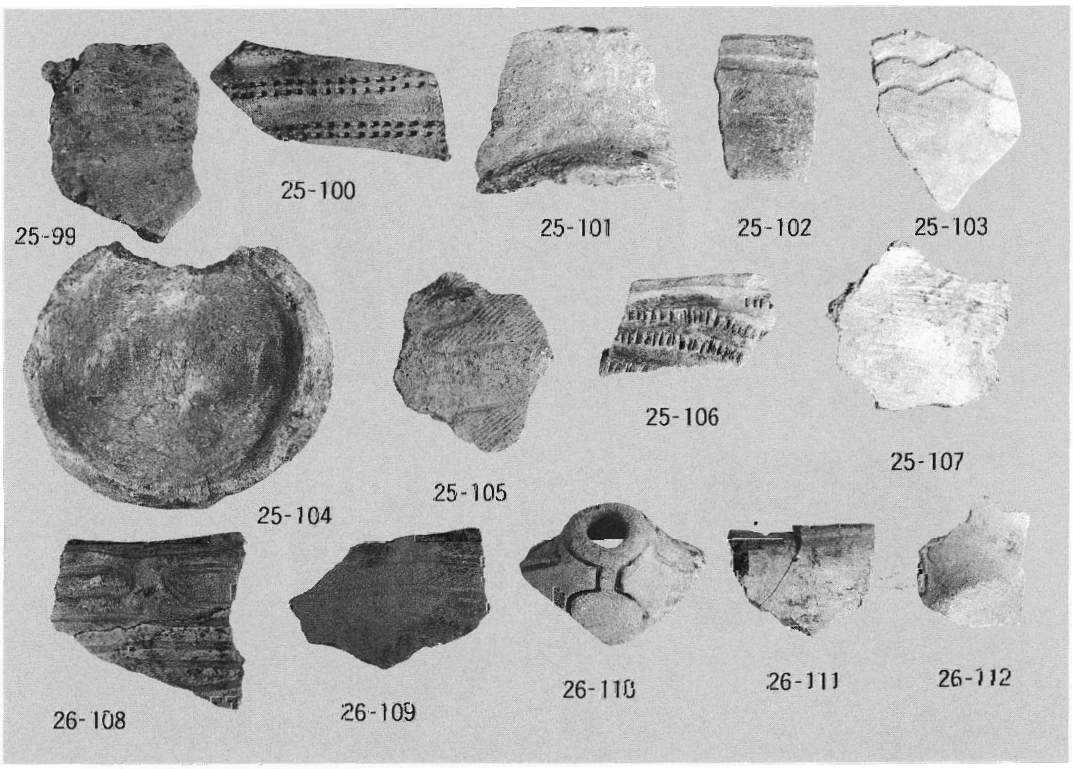
6．縄文土器と陶磁器



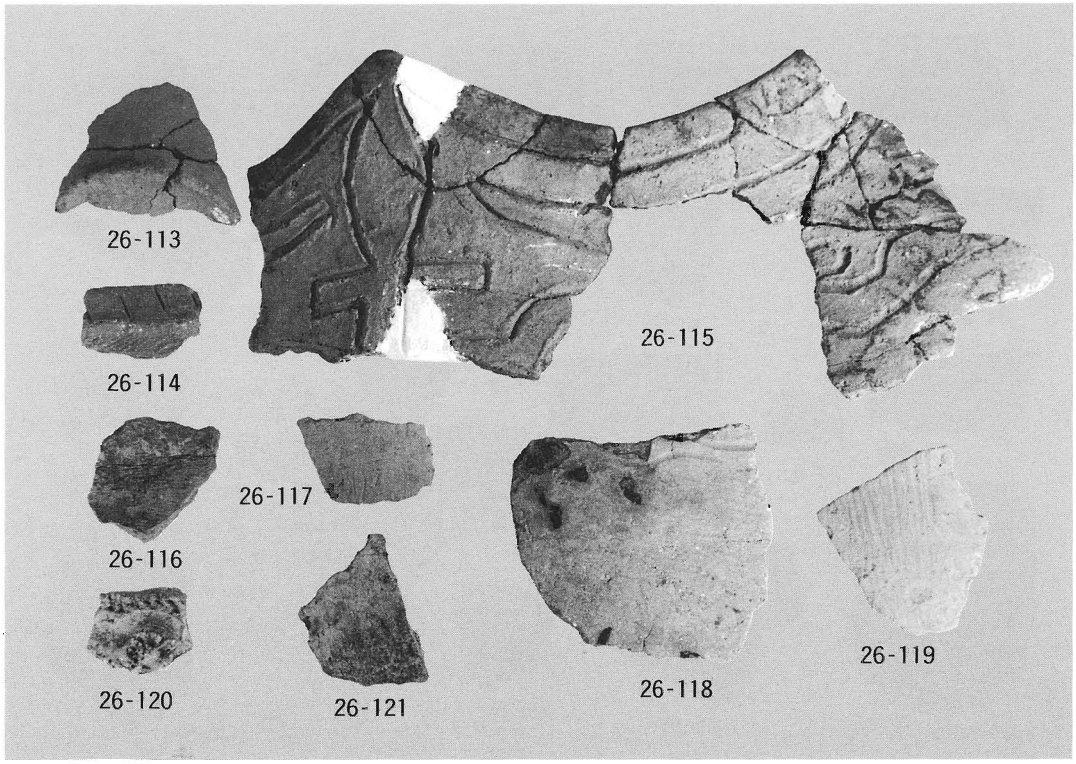
7．縄文土器


24-81
24-82
24-83
24-84
24-85
24-86
24-87
24-88
24-89
24-90
24-91
24-92
25-93
25-94
25-95
25-96
25-97
25-98

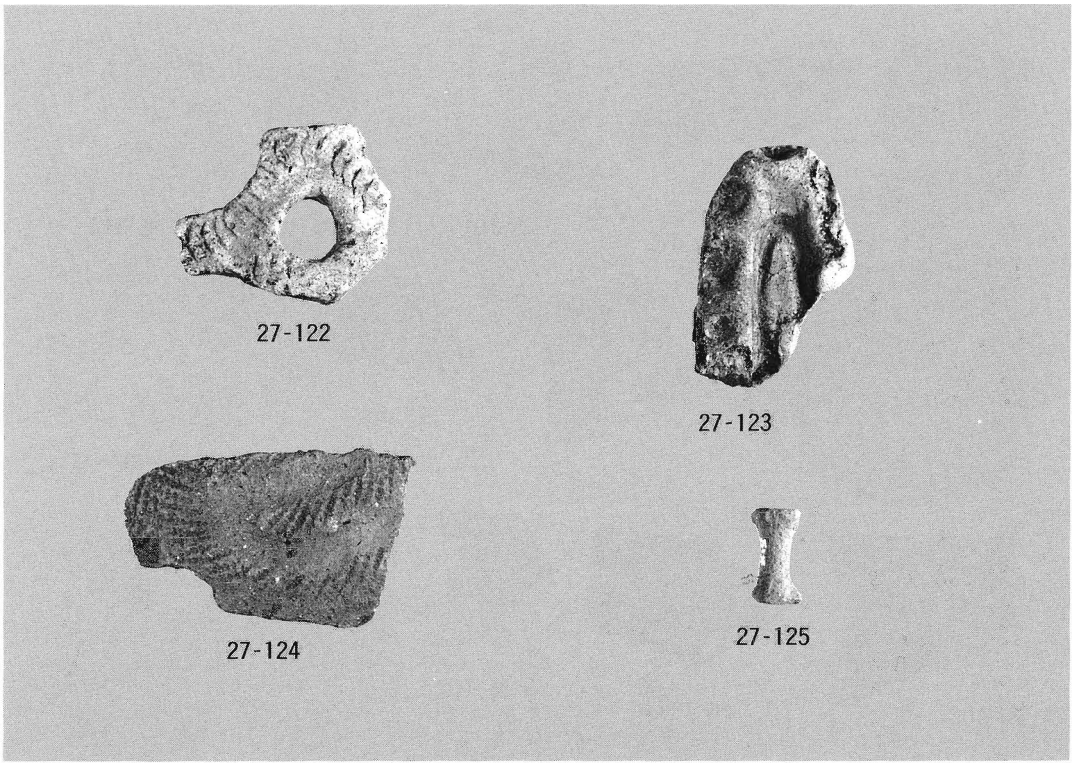
8．縄文土器


25-99
25-100
25-101
25-102
25-103
25-104
25-105
25-106
25-107
26-108
26-109
26-110
26-111
26-112

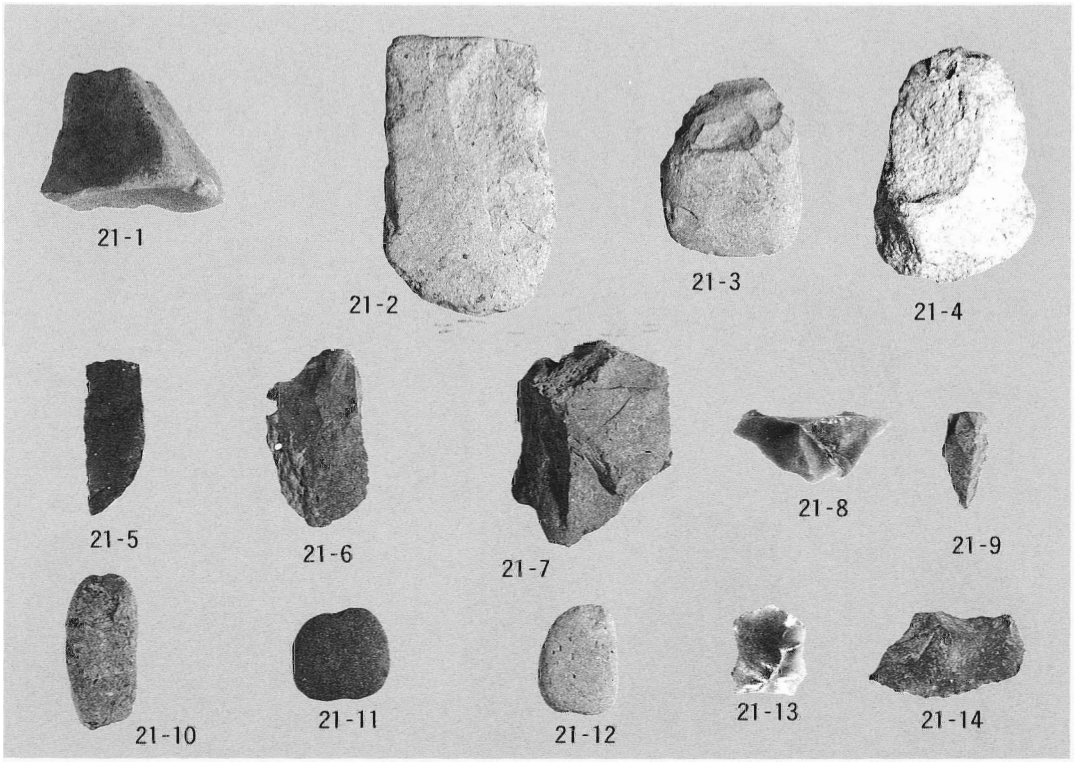
9．縄文土器



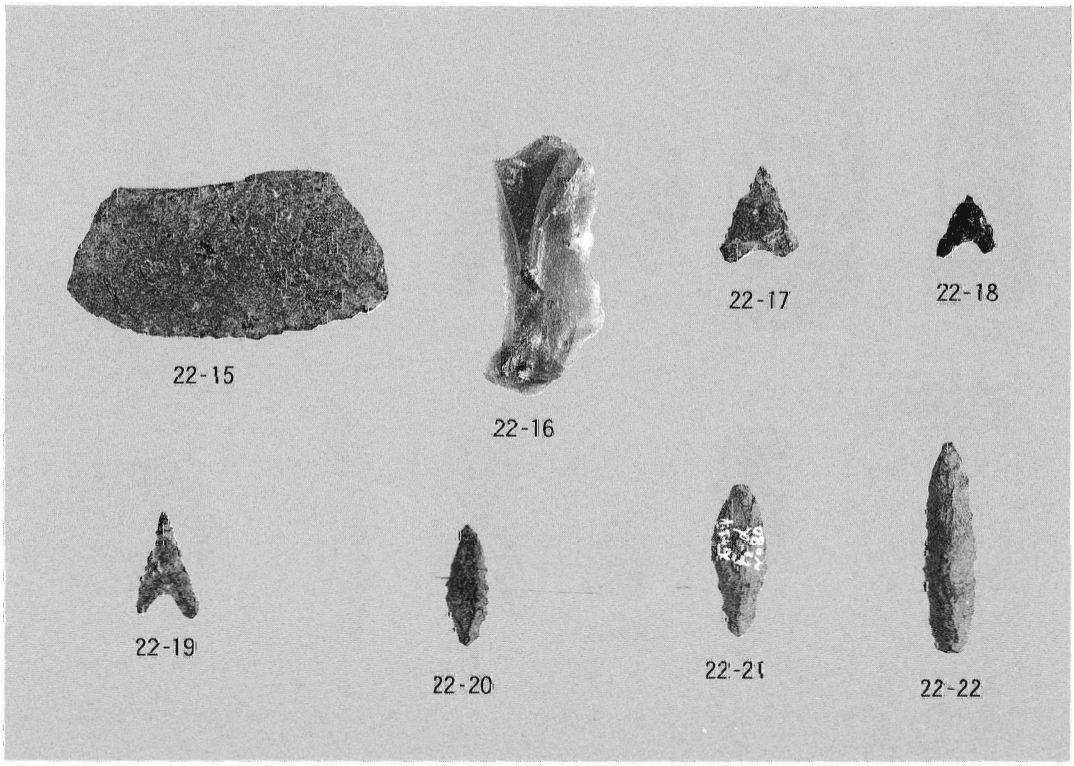
10. 縄文土器



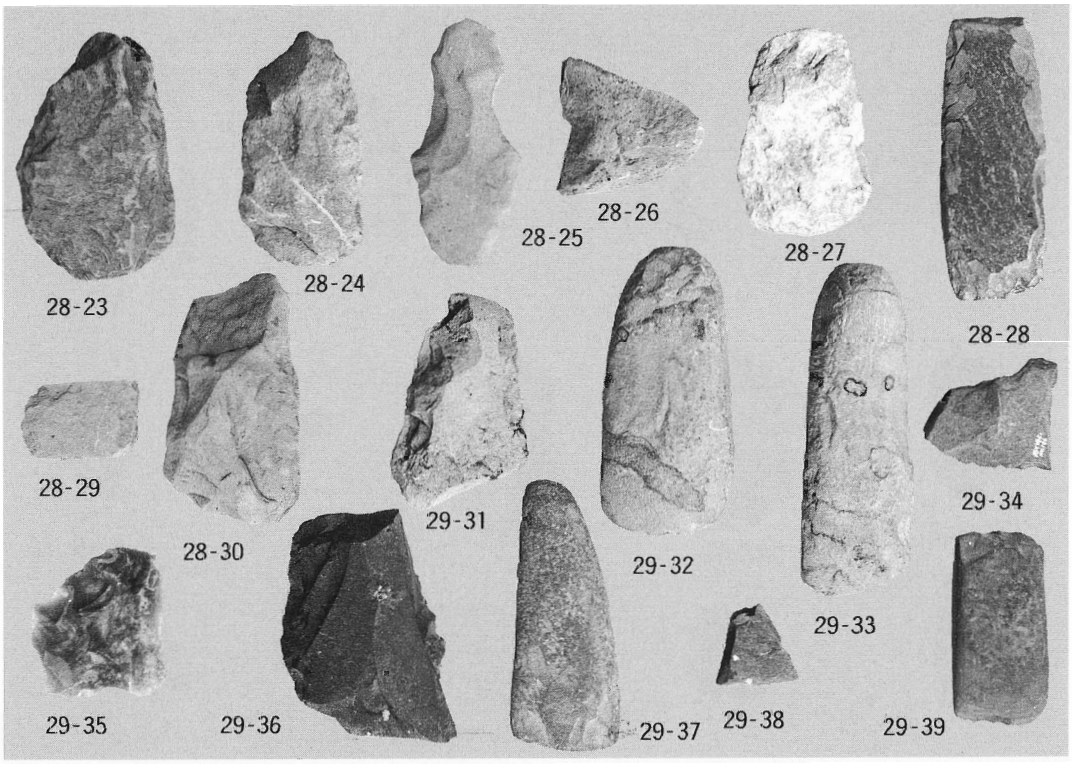
11. 縄文土器・耳栓


21-1
21-2
21-3
21-4
21-5
21-6
21-7
21-8
21-9
21-10
21-11
21-12
21-13
21-14

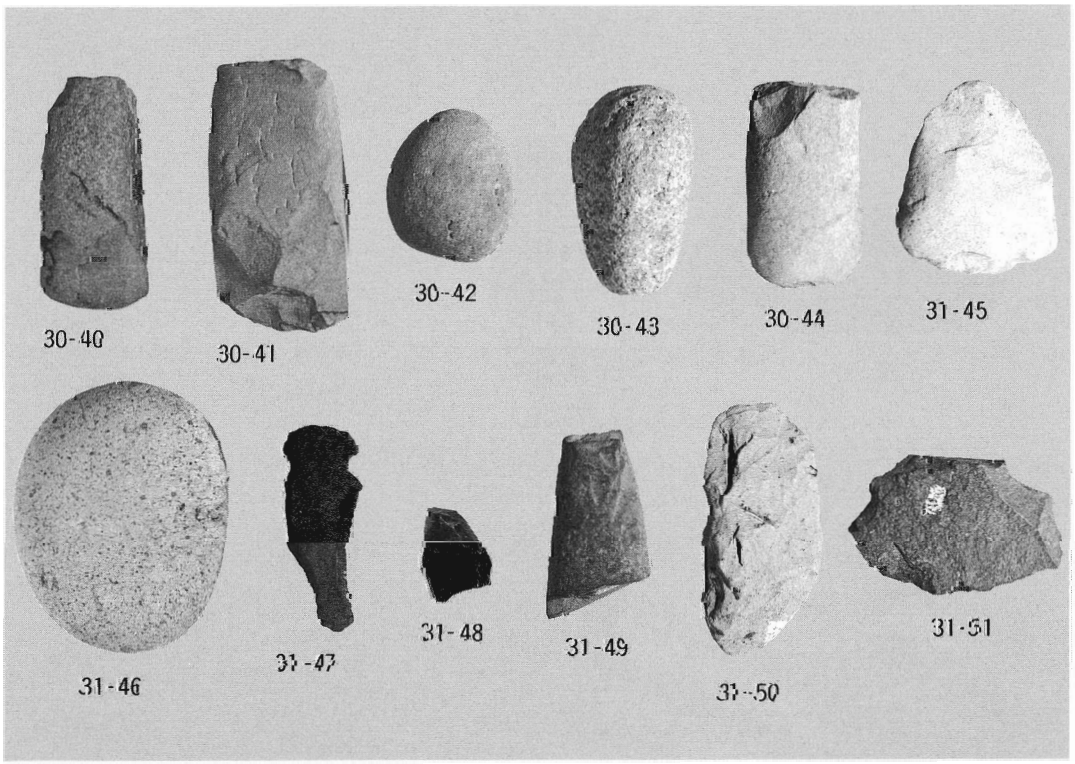
1．石　　器


22-15
22-16
22-17
22-18
22-19
22-20
22-21
22-22

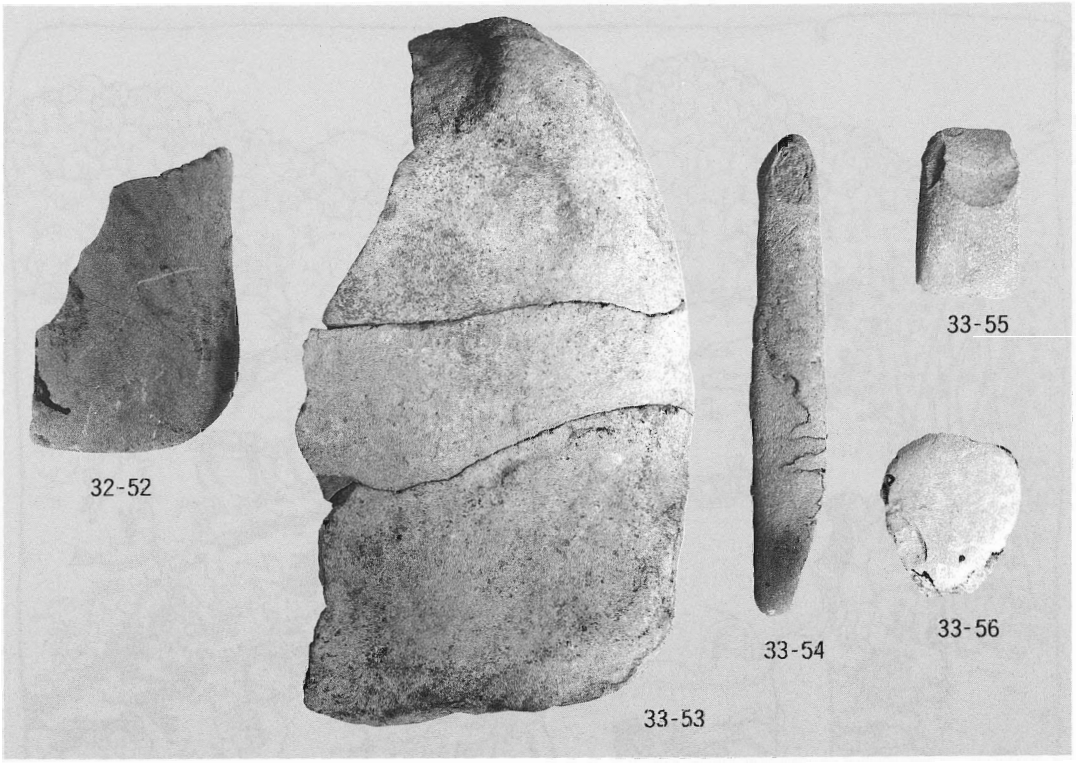
2．石　　器


28-23
28-24
28-25
28-26
28-27
28-28
28-29
28-30
29-31
29-32
29-33
29-34
29-35
29-36
29-37
29-38
29-39

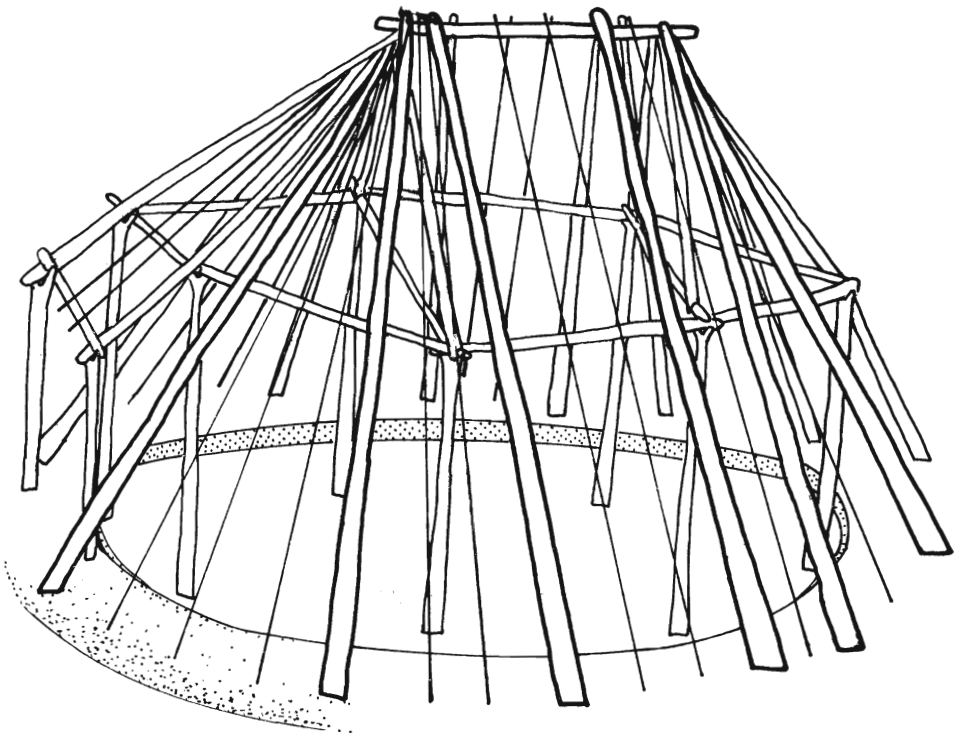
3．石　　器


30-40
30-41
30-42
30-43
30-44
31-45
31-46
31-47
31-48
31-49
31-50
31-51

4．石　　器



5．石　　器



第34図　竪穴住居の想像図（原画・森 正樹）

第35図　石ヶ坪遺跡縄文想像図（原画・岩崎 建）

山陰中央新報

縄文中期の住居跡確認

土器片も3千点 南九州と交流裏付け

匹見・石ケ坪遺跡

縄文中期の九州産土器片が出土して注目を集めた匹見町紙祖、石ケ坪遺跡で、新たに土器片も大量三千点にのぼることが分かった。西日本では珍しい縄文中期の大集落があったことをうかがわせ、さらに九州との密接な交流も裏付けており、発掘に当たっている町教委では遺跡の一部を買収、住居跡などを復元することも検討している。

町民40人が参加して開かれた匹見・石ケ坪遺跡の現地説明会

住居跡などは二十五日開いた現地説明会で明らかにされた。

調査は今年四月から続けられていた。その結果、縄文中期から後期の土器片や石器一万五千点が出土。うち九州で生産された並木式土器（鹿児島）が約二千四百点、阿高式土器（熊本県）が約六百点も出土した。さらに岡山県で生産された中津式土器や福井KII式土器、大分県姫島産の黒曜石なども多量に見つかり、町教委は「九州、山陽方面との幅広い交流を裏付けることができた」としている。

調査地（千三百平方メートル）の縄文中期層からは、直径約六メートルの竪穴住居跡七棟を検出。調査指導に当たった広島大学の河瀬正利講師は「遺跡地一帯には縄文中期、大集落があったとみられる。こうした例は西日本では珍しい」と話している。

同遺跡は昭和五十九年春、農道工事中に見つかった土器の中に縄文中期の九州で生産された並木式土器と阿高式土器があったことから注目を集めた。同土器なども九州以外で出土した例は関西半部を除き初めて。説明会には町民ら四十人が参加、渡辺友千代町教委調査課長から、石器や土器の使い方、住居内の様子などを聞いた。調査は七月上旬まで行われる。

（第3種郵便物認可）

匹見に「縄文村」計画

町が石ケ坪遺跡50アール買い上げへ

住居跡の一部復元も

一帯整備し活性化狙う

匹見町は、縄文中期の住居跡や大量の九州産土器片が出土して注目を集めている同町紙祖、石ケ坪遺跡の五十アールを本年度中に買い上げ、住居跡を一部復元するなどして、遺跡一帯を〝縄文村〟として町づくりに活用していくことにした。

石ケ坪遺跡は、ほ場整備事業のため昨年の春から夏にかけて町教委が調査。縄文中期から後期の土器片や石器一万一千点が出土し、うち九州産は並木式土器（鹿児島）が約二千四百点、阿高式土器（熊本）が約六百点もあった。さらに調査地（千三百平方メートル）の縄文中期層からは直径約六メートルの竪穴住居跡七棟が確認され、当時としては西日本では珍しい大集落があったことをうかがわせている。

昨年夏に発掘された石ケ坪遺跡。周辺一帯50アールを町が買い上げ、〝縄文村〟として整備する

町では、紙祖地区には縄文遺跡が石ケ坪の外にも稲田遺跡、水田の上遺跡があることから、石ケ坪を中心に地区一帯を〝縄文村〟として整備したい考え。また、町には歴史資料館の建設構想があり、石ケ坪も建設候補地に上がっている。

同町の遺跡地買い上げは同町道川にある新橋原遺跡（先土器時代）に次いで二番目。

1989年（平成元年）6月26日（月曜日）　中国新

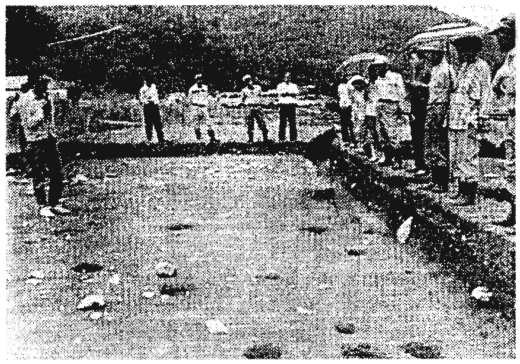
九州と交流あった？

匹見の石ケ坪遺跡

「縄文中期」と判明

裏付ける土器片が多数

美濃郡匹見町教委は同町紙祖の石ケ坪遺跡の発掘調査をほぼ終え二十五日、現地説明会を開いた。調査で約四千七百年から三千年前の縄文時代中期の遺跡であることがわかった。縄文中期のものとしては数少ない大規模集落跡で、九州との交流を裏付ける土器片なども多数出土しており、全国的に注目を集めている。



住民を対象に開いた石ケ坪遺跡の現地説明会

石ケ坪遺跡は、「古代遺跡銀座」と呼ばれる同町の西端部の紙祖川が形成する河岸段丘上にある。県営ほ場整備事業に伴って今年四月から、一・五㌶のうち、ほ場整備で影響を受ける千三百平方㍍を対象に発掘調査をした。

これまでに、竪穴式住居跡の土坑、柱穴、集石などの遺構や縄文式土器片、石器など一万五千点が発掘された。住居跡は全部で七棟で、五十一六十人の集落であったと推測される。縄文研究で知られる河瀬正利広島大講師も現地を訪れ「縄文中期の遺跡そのものの例が少ないが、中でも石ケ坪は規模、出土品ともに全国でもトップクラス」と折り紙をつけた。

出土品は、石斧（おの）、石皿（石すり）、石臼、磨石（すりいし）、石錘（おもり）などの石器や土器片。特に注目されるのは、滑石の粉末を使って土肌に銀色の光沢を出す九州地方独自の阿高式と呼ばれる土器片と鹿児島県で出土例がみられる並木式土器片。これらの土器片は約三千年前出土、うち八割が並木式。

西日本で阿高、並木式土器片がみつかったのは、九州、下関を除いては長崎県町だけ。

このほか、大分県産黒曜石の黒曜石を使った石器なども見つかり、この遺跡が九州方面から材料を取り寄せているなど豊かさを持った縄文時代の先進地であったと想像される。

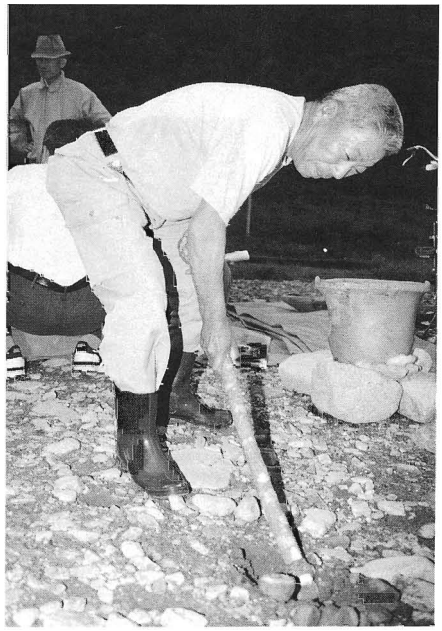
調査地は、緊急土工法で保存することが決まっているが、現地を買い取って住居を復元し子供たちの教材にしてほしいとの声もあり、町は議会も含め検討する。

現地説明会

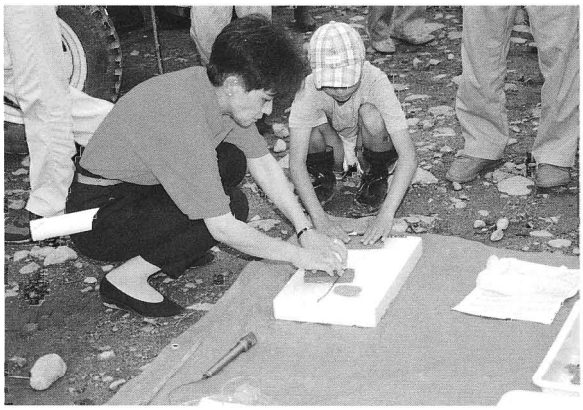
プラス　縄文体験

平成元年６月25日

調査員の説明を聞きいる見学者たち

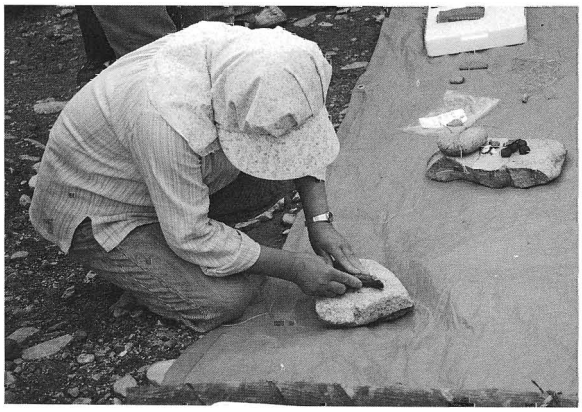


土掘具を使う見学者

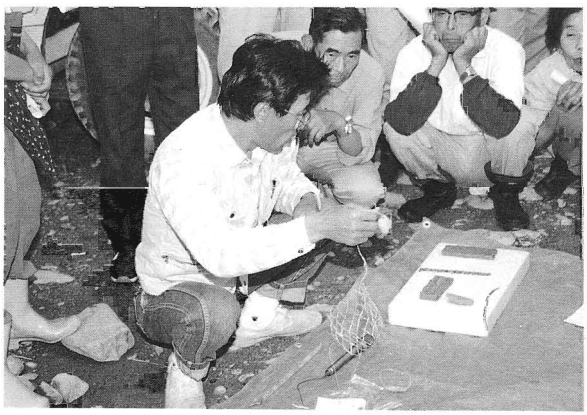


縄文施文コーナーでは……

ここでは猟師も登場



石匙を使って鮎料理



縄文講義？

平成２年３月10日 印刷
平成２年３月25日 発行

石ヶ坪遺跡

平成元年度 匹見地区県営圃場整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書Ⅲ

発　行　匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町イ1260

印　刷　有限会社 谷口印刷
島根県松江市母衣町89

題字：揮毫　匹見町教育長　平谷　勉